

# 特別支援学級における 自立活動ガイドブック

愛媛県総合教育センター  
特別支援教育室



# 目次

## ◆はじめに

## ◆自立活動の概要

1	自立活動について	1
2	自立活動の教育課程上の位置付け	2
3	自立活動の目標	3
4	自立活動の内容	3
5	「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」と自立活動	7

## ◆自立活動の進め方

1	指導計画の作成	8
①	実態把握	9
②	実態把握の整理	10
③	課題の抽出	11
④	中心的な課題	12
⑤	指導目標の設定	13
⑥	指導内容の選定	14
⑦	指導内容の設定	15
⑧	評価	17
2	指導場面の設定	19
3	指導事例	
	実践事例1：知的障がい特別支援学級に在籍する Bさん（小学3年生）	20
	実践事例2：自閉症・情緒障がい特別支援学級に在籍する Cさん（中学2年生）	25

### 【資料】

- 資料1 手順シート 原本
- 資料2 手順シート 記入例
- 資料3 補助資料活用の留意事項
- 資料4 補助資料

## ◆おわりに

## ◆はじめに

平成29年3月に告示された小学校学習指導要領・中学校学習指導要領では、特別支援学級における特別の教育課程の編成に係る基本的な考え方として、「障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るため、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第7章に示す自立活動を取り入れること」と新たに示されました。

自立活動は、特別支援学校の教育課程において特別に設けられた指導領域であり、障がいによる学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服しようとする取組を促す教育活動です。また、障がいのある児童生徒は、その障がいによって、各教科等において育まれる資質・能力を身に付ける上でつまずきを生じやすいため、自立活動における個別の指導計画を作成して、それに基づいて指導することが大切です。

しかし、特別支援学級における自立活動の指導に関する先行研究では、「指導内容が不明確である」「授業の組み立て方が分からない」といった課題が挙げられています。また、本センターの研修を受講した、主に知的障がい特別支援学級担任や自閉症・情緒障がい特別支援学級担任からも同じような声を聞くことがあり、本県でも同様の課題があると考えました。

そこで、特別支援学級における自立活動の指導が、適切かつ効果的に進めていけるように、指導の手引となる本資料「特別支援学級における自立活動ガイドブック」を作成しました。ガイドブックの内容は、初めて自立活動の指導に当たられる先生方を念頭に置いて、自立活動の目標や教育課程上の位置付け等を正しく理解するための「自立活動の概要」と、自立活動の指導計画の作成手順をまとめた「自立活動の進め方」という二部構成にしました。「自立活動の進め方」の中には、手順に沿って記入できるシート「自立活動の指導『手順シート』」と、記入する際の実態把握や指導内容の整理に参考となる「補助資料」も加えました。

是非、このガイドブックを先生方のそばに置いていただき、ニーズや経験に応じて、必要なページを開いて御活用いただければ幸いです。

## ◆自立活動の概要

### 1 自立活動について

自立活動は、障がいによる学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服することを目的とした、特別支援学校学習指導要領に示されている指導領域です。そして、授業時間を特設して行う「自立活動の時間における指導」はもとより、各教科等の指導との密接な関連を図って、学校の教育活動全体を通じて行うこととされており、障がいのある子どもの教育においては、教育課程上重要な位置を占めています。



平成29年3月に告示された小学校・中学校学習指導要領には、特別支援学級の教育課程について次のように規定されました。

小学校・中学校学習指導要領「第1章 第4の2の(1) 障害のある児童（生徒）などへの指導」

イ 特別支援学級において実施する特別の教育課程については、次のとおり編成するものとする。

(ア) 障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るため、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第7章に示す自立活動を取り入れること。

(イ) 児童（生徒）の障害の程度や学級の実態等を考慮の上、各教科の目標や内容を下学年の教科の目標や内容に替えたり、各教科を、知的障害者である児童（生徒）に対する教育を行う特別支援学校の各教科に替えたりするなどして、実態に応じた教育課程を編成すること。



特別支援学級の子どもたちにも、障がいの状態や発達の段階を把握し、障がいによる学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服することを目的とした、自立活動の指導をします。



自立活動の指導については、特別支援学校教育要領・学習指導要領を参考にしましょう。

- ・解説 総則編（平成30年3月）
- ・解説 自立活動編（平成30年3月）



## 2 自立活動の教育課程上の位置付け

自立活動の指導は、学校の教育活動全体を通じて行うものであることから、図1のように、自立活動の時間における指導と各教科等における指導とが密接な関連を保つことが必要となります。

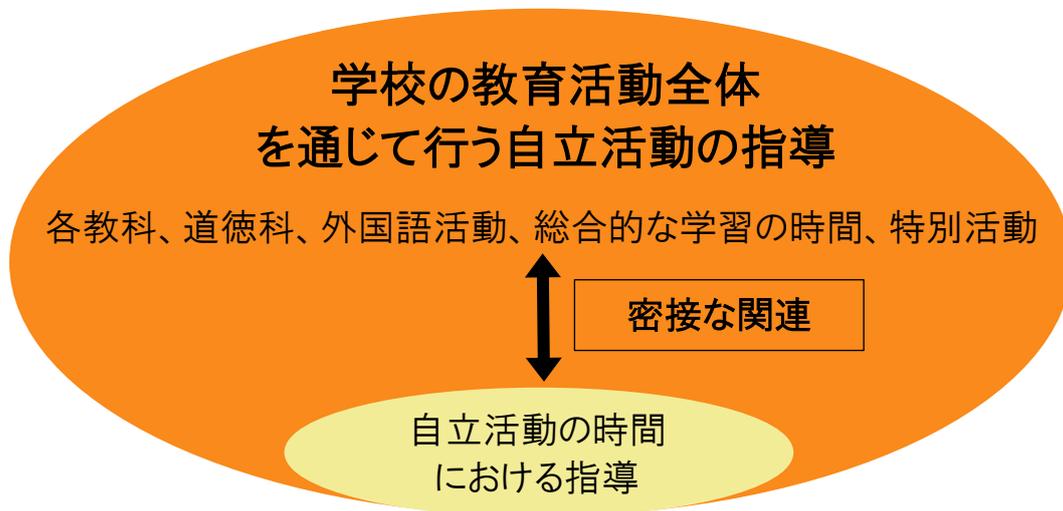


図1 教育課程における自立活動の位置付け



「自立活動の時間における指導」とは、時間割の中に「自立活動の時間」を位置付けて行う指導です。

一方、「各教科等の指導」や「各教科等を合わせた指導」の時間の中で、自立活動の内容を関連させて指導する場合があります。



つまり、自立活動の指導は、学校の教育活動全体を通じて行うものなのです。

### 自立活動の時間について

自立活動の時間は、各学校が自校の子どもの実態に応じた適切な指導を行うために必要な時数を判断することになっているため、授業時数についての標準時数が示されていません。

自立活動の時間を含めた年間の授業時数は、各学年の総授業時数に準ずることとなっています。

### 3 自立活動の目標



特別支援学校学習指導要領において、次のように示されています。

特別支援学校小学部・中学部学習指導要領「第7章 第1 目標」

個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基礎を培う。



「自立」とは・・・  
子どもがそれぞれの障がいの状態や発達の段階等に応じて、主体的に自己の力を可能な限り発揮し、よりよく生きようとすることです。



「障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服する」とは・・・  
子どもの実態に応じ、日常生活や学習場面等の諸活動において、その障がいによって生じるつまずきや困難を軽減しようとしたり、また、障がいがあることを受容したり、つまずきや困難の解消のために努めたりすることです。



「調和的発達の基礎を培う」とは・・・  
子ども一人一人の発達の遅れや不均衡を改善したり、発達の進んでいる側面を更に伸ばすことによって遅れている側面の発達を促すようにしたりして、全人的な発達を促進することです。

### 4 自立活動の内容

自立活動の内容は、「人間としての基本的な行動を遂行するために必要な要素」と、「障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服するために必要な要素」で構成しており、「健康の保持」、「心理的な安定」、「人間関係の形成」、「環境の把握」、「身体の動き」及び「コミュニケーション」の6区分27項目（表1：P4）に分類・整理されています。



自立活動の内容は、各教科等のようにその全てを取り扱うものではなく、個々の子どもの障がいの状態や特性及び心身の発達等に応じて、必要な項目を選定して取り扱うものです。  
つまり、自立活動の内容は、個々の子どもに、その全てを指導すべきものとして示されているものではありません。

表 1 自立活動の内容（6区分27項目）

## 1 健康の保持

◆生命を維持し、日常生活を行うために必要な健康状態の維持・改善を身体的な側面を中心として図る観点から内容を示している。

- (1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること。
- (2) 病気の状態の理解と生活管理に関すること。
- (3) 身体各部の状態の理解と養護に関すること。
- (4) 障がいの特性の理解と生活環境の調整に関すること。
- (5) 健康状態の維持・改善に関すること。

## 2 心理的な安定

◆自分の気持ちや情緒をコントロールして変化する状況に適切に対応するとともに、障がいによる学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服する意欲の向上を図り、自己のよさに気付く観点から内容を示している。

- (1) 情緒の安定に関すること。
- (2) 状況の理解と変化への対応に関すること。
- (3) 障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること。

## 3 人間関係の形成

◆自他の理解を深め、対人関係を円滑にし、集団参加の基盤を培う観点から内容を示している。

- (1) 他者とのかかわりの基礎に関すること。
- (2) 他者の意図や感情の理解に関すること。
- (3) 自己の理解と行動の調整に関すること。
- (4) 集団への参加の基礎に関すること。

## 4 環境の把握

◆感覚を有効に活用し、空間や時間などの概念を手掛かりとして、周囲の状況を把握したり、環境と自己との関係を理解したりして、的確に判断し、行動できるようにする観点から内容を示している。

- (1) 保有する感覚の活用に関すること。
- (2) 感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること。
- (3) 感覚の補助及び代行手段の活用に関すること。
- (4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること。
- (5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること。

## 5 身体の動き

◆日常生活や作業に必要な基本動作を習得し、生活の中で適切な身体の動きができるようにする観点から内容を示している。

- (1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること。
- (2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関すること。
- (3) 日常生活に必要な基本動作に関すること。
- (4) 身体の移動能力に関すること。
- (5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること。

## 6 コミュニケーション

◆場や相手に応じて、コミュニケーションを円滑に行うことができるようにする観点から内容を示している。

- (1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること。
- (2) 言語の受容と表出に関すること。
- (3) 言語の形成と活用に関すること。
- (4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること。
- (5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること。

表2 各項目の意味していること

区分	項目	意味していること
1 健康の保持	(1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること	体温の調節、覚醒と睡眠など健康状態の維持・改善に必要な生活のリズムを身に付けること、食事や排泄などの生活習慣の形成、衣服の調節、室温の調節や換気、感染予防のための清潔の保持など健康な生活環境の形成を図ること。
	(2) 病気の状態の理解と生活管理に関すること	自分の病気の状態を理解し、その改善を図り、病気の進行の防止に必要な生活様式についての理解を深め、それに基づく生活の自己管理ができるようにすること。
	(3) 身体各部の状態の理解と養護に関すること	病気や事故等による神経、筋、骨、皮膚等の身体各部の状態を理解し、その部位を適切に保護したり、症状の進行を防止したりできるようにすること。
	(4) 障がいの特性の理解と生活環境の調整に関すること	自己の障がいにとどのような特性があるのか理解し、それらが及ぼす学習上又は生活上の困難についての理解を深め、その状況に応じて、自己の行動や感情を調整したり、他者に対して主体的に働き掛けたりして、より学習や生活をしやすい環境にしていこうとすること。
	(5) 健康状態の維持・改善に関すること	障がいのため、運動量が少なくなったり、体力が低下したりすることを防ぐために、日常生活における適切な健康の自己管理ができるようにすること。
2 心理的な安定	(1) 情緒の安定に関すること	情緒の安定を図ることが困難な児童生徒が、安定した情緒の下で生活できるようにすること。
	(2) 状況の理解と変化への対応に関すること	場所や場面の状況を理解して心理的抵抗を軽減したり、変化する状況を理解して適切に対応したりするなど、行動の仕方を身に付けること。
	(3) 障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること	自分の障がいの状態を理解したり、受容したりして、主体的に障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲の向上を図ること。
3 人間関係の形成	(1) 他者とのかかわりの基礎に関すること	人に対する基本的な信頼感を持ち、他者からの働き掛けを受け止め、それに応ずることができるようにすること。
	(2) 他者の意図や感情の理解に関すること	他者の意図や感情を理解し、場に応じた適切な行動をとることができるようにすること。
	(3) 自己の理解と行動の調整に関すること	自分の得意なことや不得意なこと、自分の行動の特徴などを理解し、集団の中で状況に応じた行動ができるようになること。
	(4) 集団への参加の基礎に関すること	集団の雰囲気に合わせてたり、集団に参加するための手順や決まりを理解したりして、遊びや集団活動などに積極的に参加できるようになること。

4 環境の把握	(1) 保有する感覚の活用に関する こと	保有する視覚、聴覚、触覚、嗅覚、固有覚、前庭覚などの感覚を十分に活用できるようにすること。
	(2) 感覚や認知の特性についての理解と対応に関する こと	障がいのある児童生徒一人一人の感覚や認知の特性を踏まえ、自分に入ってくる情報を適切に処理できるようにするとともに、特に自己の感覚の過敏さや認知の偏りなどの特性について理解し、適切に対応できるようにすること。
	(3) 感覚の補助及び代行手段の活用に関する こと	保有する感覚を用いて状況を把握しやすくするよう各種の補助機器を活用できるようにしたり、他の感覚や機器での代行が的確にできるようにしたりすること。
	(4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関する こと	いろいろな感覚器官やその補助及び代行手段を総合的に活用して、情報を収集したり、環境の状況を把握したりして、的確な判断や行動ができるようにすること。
	(5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関する こと	物の機能や属性、形、色、音が変化する様子、空間・時間等の概念の形成を図ることによって、それを認知や行動の手掛かりとして活用できるようにすること。
5 身体の動き	(1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関する こと	日常生活に必要な動作の基本となる姿勢保持や上肢・下肢の運動・動作の改善及び習得、関節の拘縮や変形の予防、筋力の維持・強化を図ることなどの基本的技能に関すること。
	(2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関する こと	姿勢の保持や各種の運動・動作が困難な場合、様々な補助用具等の補助的手段を活用してこれらができるようにすること。
	(3) 日常生活に必要な基本動作に関する こと	食事、排泄、衣服の着脱、洗面、入浴などの身辺処理及び書字、描画等の学習のための動作などの基本動作を身に付けることができるようにすること。
	(4) 身体の移動能力に関する こと	自力での身体移動や歩行、歩行器や車椅子による移動など、日常生活に必要な移動能力の向上を図ること。
	(5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関する こと	作業に必要な基本動作を習得し、その巧緻性や持続性の向上を図るとともに、作業を円滑に遂行する能力を高めること。
6 コミュニケーション	(1) コミュニケーションの基礎的能力に関する こと	児童生徒の障がいの種類や程度、興味・関心等に応じて、表情や身振り、各種の機器などを用いて意思のやりとりが行えるようにするなど、コミュニケーションに必要な基礎的な能力を身に付けること。
	(2) 言語の受容と表出に関する こと	話し言葉や各種の文字・記号等を用いて、相手の意図を受け止めたり、自分の考えを伝えたりするなど、言語を受容し表出することができるようにすること。
	(3) 言語の形成と活用に関する こと	コミュニケーションを通して、事物や現象、自己の行動等に対応した言語の概念の形成を図り、体系的な言語を身に付けることができるようにすること。
	(4) コミュニケーション手段の選択と活用に関する こと	話し言葉や各種の文字・記号、機器等のコミュニケーション手段を適切に選択・活用し、他者とのコミュニケーションが円滑にできるようにすること。
	(5) 状況に応じたコミュニケーションに関する こと	コミュニケーションを円滑に行うためには、伝えようとする側と受け取る側との人間関係や、そのときの状況を的確に把握することが重要であることから、場や相手の状況に応じて、主体的にコミュニケーションを展開できるようにすること。

## 5 「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」と自立活動

特別支援学級に在籍する子どもについては、「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」を作成・活用して指導を行います。自立活動の指導においても、これらの計画に基づいて、組織的・継続的かつ計画的に指導を行うことが大切です。



小学校・中学校学習指導要領において、次のように示されています。

小学校・中学校学習指導要領「第1章 第4の2の(1) 障害のある児童（生徒）などへの指導」

エ （前略）特別支援学級に在籍する児童（生徒）（中略）については、個々の児童（生徒）の実態を的確に把握し、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、効果的に活用するものとする。



一人一人の障がいの状態等に応じた自立活動の指導を行うためには、教職員だけでなく、専門家の指導・助言を得ることが必要な場合があります。本人、保護者はもとより、医療・教育・福祉等の各機関とも連携して取り組む際には、「個別の教育支援計画」を活用することができます。

また、自立活動と各教科等との関連を考慮し、特別支援学級担任と交流学級の担任や教科担任、養護教諭、支援員等の関係教職員が共通理解を図って取り組めるように「個別の指導計画」を活用しましょう。



特別支援学校学習指導要領において、次のように示されています。

特別支援学校小学部・中学部学習指導要領「第7章 第3 個別の指導計画の作成と内容の取扱い」

1 自立活動の指導に当たっては、個々の児童又は生徒の障害の状態や特性及び心身の発達段階等の的確な把握に基づき、指導すべき課題を明確にすることによって、指導目標及び指導内容を設定し、個別の指導計画を作成するものとする。その際、第2に示す内容（※）の中からそれぞれに必要な項目を選定し、それらを相互に関連付け、具体的に指導内容を設定するものとする。

※ 「第2に示す内容」とは、自立活動の内容（P4）のことです。



特別支援学級では、どのように自立活動の指導を行えばよいのでしょうか。次のページから、自立活動の進め方について説明します。

# ◆ 自立活動の進め方

## 1 指導計画の作成



自立活動には、教科書や指導書等がないのですが、どのように指導していけばよいのですか。

各教科と同様に、自立活動の指導においても、目標を設定し、指導の実施及び評価を行うことが基本となります。特別支援学校学習指導要領解説自立活動編（以後「自立活動編」）では、実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの例が示されています。



なるほど、参考になりますね。どのように目標を設定し、指導内容等を組み立て、指導すればよいのでしょうか。

今回、自立活動編の例を参考に、「自立活動の指導『手順シート』」を作成しました。



### 自立活動の指導「手順シート」

【表面】

【裏面】

作成日 令和 年 月 日

**自立活動の指導「手順シート」**

学年 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_ ( 特別支援学級 )

**① 実態把握**  
障がいの状態、発達や個性の強さ、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所や良さ、強さ、本人・保護者の思い

**① 実態把握 P 9**

**② 実態把握の整理**

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
<b>② 実態把握の整理 P 10</b>					

**③ 課題の抽出**

**③ 課題の抽出 P 11**

**④ 中心的な課題**

**④ 中心的な課題 P 12**

**⑤ 指導目標の設定**

長期目標	短期目標
	1学期
	2学期
	3学期

**⑤ 指導目標の設定 P 13**

**⑥ 指導内容の選定**

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
<b>⑥ 指導内容の選定 P 14</b>					

**⑦ 指導内容の設定**

学期	具体的な指導内容	選択した区分・項目
1学期		
2学期	<b>⑦ 指導内容の設定 P 15~16</b>	
3学期		

**⑧ 評価**

1学期		
2学期	<b>⑧ 評価 P 17~18</b>	
3学期		



①から⑧の手順（P 9～18）に沿って、具体的に考えていきましょう。

## ① 実態把握



子どもを理解するためには、実態把握が大切だと聞きますが、具体的にどのようなことをすればよいのでしょうか。

障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所や良さ、課題等について情報収集を行います。

ここからは、Aさんの例で見てみましょう。



### <知的障がい特別支援学級に在籍するAさん（小学5年生）の例>

障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所や良さ、課題、本人・保護者の願い

- ・消防車など車が大好きで、名前をよく覚えている。
- ・2年生程度の漢字の読み書きができる。
- ・具体物を用いながら、20までの加減計算ができる。
- ・文字やイラストの入った手順表を手掛かりに、朝の片付けや帰りの支度が一人のできるようになってきた。
- ・新しい場所や活動は不安になりやすいが、活動の見通しを持たせることで、自主的に取り組むようになってきた。
- ・相手の発言に応じた会話が出来るが、困ったときに、自発的に周囲に助けを求めることは難しい。
- ・休み時間は友達に誘われて一緒に遊ぶこともあるが、一人で車の図鑑を見たり、学級担任や支援員と話をしたりして過ごしていることが多い。
- ・視野に入ったものが気になると、離席してしまう。
- ・ダンスが好きで大まかな動作の模倣はできるが、はさみなど手先を使った活動は苦手である。
- ・保護者はコミュニケーションの力を身に付け、友達と関わり合いながら成長していくことを望んでいる。
- ・本人は、将来、車の運転免許を取得したいと思っている。

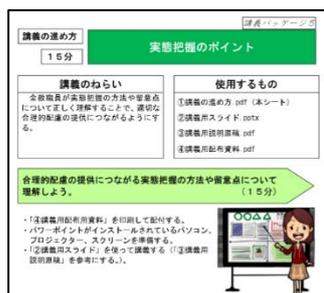


なるほど。課題だけでなく、できていることにも目を向け、そのときの状況や手立ても把握するのですね。

できていることから具体的な指導や支援のヒントを得られることがあります。「行動観察」以外にも、本人・保護者の願い等の「聞き取り」や個別の教育支援計画等の「引き継ぎ資料」などから情報を収集します。



### もっと詳しく!!



愛媛県総合教育センターH29年度研究成果物「合理的配慮に関する研修資料」の講義パッケージ5「実態把握のポイント」には、校内研修で使用できるスライド資料、読み原稿等があります。センターホームページ (<https://center.esnet.ed.jp/>) からダウンロードできますので、御活用ください。

## ② 実態把握の整理



実態把握では、様々な視点で情報を得ることができました。なぜ、それを整理するのですか。

特定の指導内容に偏ることがないように、子どもの全体像を捉えるために、「①実態把握」で収集した情報を、自立活動の内容の6区分に即して整理します。自立活動の内容の詳細については、P4の表1（自立活動の内容）やP5、6の表2（各項目の意味していること）を見てください。



### ＜知的障がい特別支援学級に在籍するAさん（小学5年生）の例＞

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> <li>健康状態は良好で、生活リズムは確立している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>新しい場所や活動に対して不安になりやすい。</li> <li>活動の見通しが持てると、自主的に取り組む。</li> <li>車など興味関心があるものを見ると、衝動的に行動してしまう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>特定の教師との関わりが中心である。</li> <li>友達に誘われると、一緒に遊ぶことがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>文字やイラストなどの手掛かりがあれば、適切に行動できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大まかな動作模倣ができる。</li> <li>はさみなど手先を使った活動が苦手である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日常生活においては、相手の発言に応じた会話ができる。</li> <li>感情などを言葉にして話すことが難しい。</li> </ul>

新たに気付いた実態があれば、記入します。該当する実態がない場合は空欄でも構いません。

「困った場面で、助けを求めることができない」は、「人間関係の形成」と「コミュニケーション」の両方に整理することが考えられます。必要に応じて、複数の区分に記入して整理することもあります。

困った場面で、助けを求めることができない。

困った場面で、助けを求めることができない。



なるほど。区分ごとに整理していくことで、実態把握では見過ごしていた子どもの良さや困難さに気付くことができました。

区分ごとに整理することは、障がい名にとらわれた画一的な見方を防ぐことにもなり、子どもを多面的に捉えることができます。



### 困ったときは・・・

「自立活動編」には、各項目の内容や具体的な状態が例示されています。それをまとめたものが、補助資料1です。どの区分に整理すればいいか分からない場合には「状態例」を参考にしてください。

### ③ 課題の抽出



子どもの実態を自立活動の内容に沿って整理することで、抱えている困難さ等が分かってきました。課題の抽出はどのように行うのですか。

指導開始時点で課題となることを抽出します。例えば「できること」「もう少しでできること」「援助があればできること」「できないこと」などの観点で整理することによって、課題が明らかになります。次のように、課題はいろいろな書き方ができます。



#### <知的障がい特別支援学級に在籍するAさん（小学5年生）の例>

- ・新しい場所や活動に対して不安になりやすい。  
(書き方1: 「②実態把握の整理」から、そのまま記入する)
- ・活動の見通しが立たず、困ってしまうと周囲に助けを求められない。  
(書き方2: 複数の区分を関連させて記入する)
- ・イラスト等を手掛かりに、日常生活におけるコミュニケーション能力を高める必要がある。  
(書き方3: 高めていくべき力について記入する)



なるほど。書き方1は、「②実態把握の整理」の内容の中から課題をそのまま記入したのですね。

そうですね。ただし、全ての課題を記入すればよいというものではありません。指導すべき課題かどうかという視点が大切です。



書き方2は、複数の区分を合わせて記入していますね。

「②実態把握の整理」で関連が明らかな場合は、まとめて記入しても構いません。



書き方3では、高めていくべき力について書かれていますが、どのようなことがポイントになりますか。

高めていくべき力について記入する際には、本人・保護者の願いを踏まえた上で、生活の質の向上につながるという視点を持つことが大切です。



#### さらに!!

現在の姿のみにとらわれることなく、そこに至る背景や在学期間、数年後や卒業後までに育みたい力との関係など考慮して、課題を抽出することも大切です。

#### ④ 中心的な課題



中心的な課題とは、「抽出した課題の中から、中心となる課題を選ぶ」ということでしょうか？

いいえ、そうではありません。  
「抽出した課題同士がどのように関連しているのか」を整理して、中心的な課題を導き出します。



「課題同士の関連」について、もっと教えてください。

Aさんの例では、「新しい場所や活動に対して不安になりやすい」という心理的な一面がある中で学校での集団生活を送っているため、コミュニケーションの課題が生じている可能性があります（下欄「詳しく解説」参照）。このように、課題同士が『原因と結果』として関連している場合があります。



確かに！Aさんの例では、「心理的な安定」が「コミュニケーション」だけでなく、「人間関係の形成」にも関連してそうですね。

また、「一つの課題の改善によって、他の課題の改善にもつながっていくものを、中心的な課題として捉える」ということも一つの考え方です。



#### <知的障がい特別支援学級に在籍するAさん（小学5年生）の例>

・視覚支援を用いて見通しを持たせることにより、不安感を軽減させ、身近な人とのコミュニケーションの中で、自分の気持ちを伝える方法を身に付けさせる。

#### 詳しく解説！！

Aさんの例では、「相手の発言に応じた会話ができる」とありますが、心理的な安定に「新しい場所や活動に対して不安になりやすい」、人間関係の形成に「友達に誘われると、一緒に遊ぶ」とあります。

このことから、**原因**「見通しの持てないことに対して、不安になる」  
「自分から友達に働き掛けることが苦手である」



**結果**「困った場面で、自分から助けを求めることができない」と関連付けることができます。

また、原因と結果が明確でなく、相互に関連している場合もあります。

## ⑤ 指導目標の設定



いよいよ指導目標の設定ですね。長期目標と短期目標がありますが、その違いを教えてください。

長期目標は1年間の目標で、短期目標は各学期の目標です。目標を立てるときは、長期目標と短期目標につながりを持たせることが大切です。



なるほど。設定の際に大切なことは何かありますか？

「1年後、こうなっていてほしい」と成長した姿をイメージして長期目標を考えますが、表記する際の主語は子どもにします。子ども自身がその目標を聞いて、自分が何をするのかイメージできるような文章表記（下欄「もっと詳しく」参照）を心掛けましょう。



とても大事なことですね。  
長期目標を設定した後、短期目標を考えていくのですね（※）。

### <知的障がい特別支援学級に在籍するAさん（小学5年生）の例>

長期目標	カードを活用しながら、先生や友達に困っていることやしてほしいことを伝える。
短期目標	1期 支援員の促しによって、カードを用いて先生に困っていることを伝える。
	2期 自分でカードを用いて、先生に困っていることやしてほしいことを伝える。
	3期 自分でカードを用いて、先生や友達に困っていることやしてほしいことを伝える。

#### もっと詳しく！！

子どもがイメージできる文章表記とは、「何をするか」具体的に書いてある文章とも言えます。例えば「友達と仲良くする」では、人によってイメージする状態像が異なるためふさわしくありません。「友達と一緒にドッジボールをする」「友達を誘って、図書室に本を借りに行く」といった具体的な行動目標を設定することが大切です。目標が具体的であると、子ども自身が自己評価しやすくなります。

※ Aさんの例では、年度当初に3学期までの短期目標を設定しています。長期目標と1学期の短期目標を年度当初に設定し、評価を基に2学期の目標と指導内容を設定することも可能です。各学校の状況に応じて「手順シート」を御活用ください。

## ⑥ 指導内容の選定



指導内容の選定とは、どのようなことをするのでしょうか。

指導目標が決まると指導内容を考えていきますね。選定とは、指導内容に関連する自立活動の区分や項目を選び出すことです。



では「④中心的な課題」で関連付けた項目を参考に選定すると考えてよさそうですね。

そうですね。ただし、「中心的な課題」＝「目標」ではないため、これまでの流れを振り返りながら、再度関連付けを考えることが大切です。また、子どもの特性や得意な認知処理の方法を生かした支援を行うと指導の効果が高まるので、できている面にも着目しましょう。



### <知的障がい特別支援学級に在籍するAさん（小学5年生）の例>

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	(2) 状況の理解と変化への対応に関すること	(1) 他者とのかかわりの基礎に関すること	(5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること		(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること



「④中心的な課題」で関連付けた項目以外に、Aさんの視覚優位という得意な情報処理の仕方を支援に取り入れようと「環境の把握」の項目も関連付けました。

実際の指導を行う際に必要な項目を関連付けるので、空欄となる区分があっても構いません。



#### 困ったときは・・・

「自立活動編」に示されている具体的指導内容例と留意点を、補助資料1にまとめています。指導内容例を参考に、具体的なイメージを持ちながら項目の選定を行ってください。

⑦ 指導内容の設定



指導内容の設定で、気を付けることはありますか。



「⑥指導内容の選定」で関連付けた項目を組み合わせながら、指導内容を考えていきます。

<知的障がい特別支援学級に在籍するAさん（小学5年生）の例：1学期>

学期	具体的な指導内容	選定した区分・項目
1 学 期	<u>担任がカードの意味を教えたり、伝え方のモデルを示したりする。また、本児と担任、支援員とで、設定した場面でのロールプレイを行う。</u>	心(2)・環(5) コ(5)
	授業中、困ったことがあったときに、 <u>支援員がカードを示しながら伝えるタイミングを促す。</u>	心(2)・人(1)
	実際の生活場面で、本児が何に困ったのか、どういった支援があればよかったのか自分で気付けるよう、 <u>メモや図で示しながら状況を整理し、振り返りをさせる。</u>	人(1)・環(5) コ(5)



選定した項目の組み合わせ方を変えることで、いろいろな指導内容を考える手掛かりとなりました。

困難さを抱えている子どもたちですので、目標を達成するために必要な指導内容を段階的に取り上げるようにしましょう。また、次のページのとおり「自立活動編」には配慮事項が明記されていますので、しっかり目を通しておきましょう。



「具体的な指導内容」に、下線が引かれていますね。

「いつ、誰が、どのようなことをするのか」といった具体的な働き掛け（手立て）が書かれていると、関係教職員と共通理解の下、指導に当たることができます。



## 具体的な指導内容を設定する際の配慮事項

ア 主体的に取り組む指導内容 児童又は生徒が、興味をもって主体的に取り組み、成就感を味わうとともに自己を肯定的に捉えることができるような指導内容を取り上げること。
イ 改善・克服の意欲を喚起する指導内容 児童又は生徒が、障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲を高めることができるような指導内容を重点的に取り上げること。
ウ 発達の進んでいる側面を更に伸ばすような指導内容 児童又は生徒が、発達の遅れている側面を補うために、発達の進んでいる側面を更に伸ばすような指導内容を取り上げること。
エ 自ら環境を整える指導内容 児童又は生徒が、活動しやすいように自ら環境を整えたり、必要に応じて周囲の人に支援を求めたりすることができるような指導内容を計画的に取り上げること。
オ 自己選択・自己決定を促す指導内容 児童又は生徒に対し、自己選択・自己決定する機会を設けることによって、思考・判断・表現する力を高めることができるような指導内容を取り上げること。
カ 自立活動を学ぶことの意義について考えさせるような指導内容 児童又は生徒が、自立活動における学習の意味を将来の自立や社会参加に必要な資質・能力との関係において理解し、取り組めるような指導内容を取り上げること。

### もっと詳しく・・・

「自立活動編」には、指導内容の工夫のポイントや具体例が示されています。それをまとめたものが、「指導上の留意点（指導内容の設定）」（補助資料2）です。指導内容を設定する際に活用してください。

また、指導及び支援の手立てを考える際には、下記の点に留意しましょう。

- 手立ての内容・量・順序を考えていますか。  
(子どもの実態に合っているか、実現可能か考慮しましょう。)
- 子どもの集中時間に配慮していますか。  
(無理のない課題配分となるようにしましょう。)
- 得意な面、興味のあることを生かしていますか。
- 苦手なことを配慮したり、苦手さを補うための手立てを用いたりしていますか。
- 抵抗感など心理面に配慮していますか。

## ⑧ 評価



評価では、どのようなことに気を付ければよいですか。

指導目標の実現に向けて、子どもがどのように変容しているかを明らかにするために、具体的な達成状況を把握する必要があります。



具体的な達成状況を把握するためには、どうすればいいのでしょうか。

子どもの様子等を記録する際に、できるだけ「事実」を書くようにします。例えば「集中して作業に取り組んだ」ではなく、「15分間、黙々と作業に取り組んだ」と記録します。



なるほど。子どもの活動時間や回数なども、具体的で客観的な記録になりますね。

記録した「事実」を基に情報を共有することで、関係教職員と共通理解を図ることができます。



### <知的障がい特別支援学級に在籍するAさん（小学校5年生）の例>

1学期	支援員の促しにより、カードを使って困っていることを伝えることが確実にできた。3回に1回程度は、自分からカードを用いて、担任に困っていることを伝えることができるようになった。また、先生にしてほしいことについても、カードを自分から用いて担任に伝えることができた。
-----	---

#### もっと詳しく！！

活動の評価を行うことは、子どもにとっては自らの状況や結果を振り返り、自己を見つめ直すきっかけとなります。自立活動の指導においては、子ども自身が障がいと向き合い、困難を改善しようとする意欲を持つことが期待されます。そのため、例えば「動画で課題となる状況を撮影し、指導の前後の様子を本人と振り返って、達成表にシールを貼る」など、子どもの実態に応じて、自己評価の機会を設けることが大切です。

子ども自身が状況を振り返り、評価するためには、子ども自身が分かる表現で具体的に目標を設定しておくことが、何より重要となります。



評価をした後のことについて、教えてください。

1学期末の評価、つまり、1学期末の子どもの実態に応じて、2学期の短期目標や指導内容の設定又は修正を行います。



Aさんの場合では、どのようなことが考えられますか。

1学期末の評価で「先生に伝えること」については、自らできるようになってきました。そこで、2学期の短期目標を「友達に伝えること」へ修正することが考えられます。



### <知的障がい特別支援学級に在籍するAさん（小学校5年生）の例>

短期目標	2学期	自分でカードを用いて、先生に困っていることやしてほしいことを伝える。
------	-----	------------------------------------



短期目標	2学期	自分でカードを用いて、友達に困っていることやしてほしいことを伝える。
------	-----	------------------------------------



その都度、見直しを行うことが必要なのですね。

これは一つの例です。子どもの様子をどのように評価し、目標の修正を行うかなど、関係教職員と共通理解を図りながら、見直しをすることが大切です。



自立活動の指導における、計画 (Plan) - 実践 (Do) - 評価 (Check) - 改善 (Action) のPDCAサイクルのポイントを教えてください。

実態把握を基に設定した目標や指導内容であっても、実際に指導してみると、子どもにとって適切なものでない場合があります。したがって、学期途中であっても適宜修正を行っていく必要があります。また、学年が変わっても、一貫した指導や支援を引き継いでいくようにしましょう。



## 2 指導場面の設定



「自立活動の指導『手順シート』」を活用して、自立活動の指導を行うことができました。効果的な指導を行うために、大事なポイントを教えてください。

自立活動は、授業時間を特設して行う自立活動の時間における指導を中心として、各教科等の時間においても、自立活動の指導と密接な連携を図っていくことが大切です。



自立活動の指導は、学校の教育活動全体を通じて行うのでしたね。具体的には、どのように考えていけばよいですか。

設定した自立活動の指導内容を、各教科等の授業や学級での活動等、具体的な場面のどこに取り入れることができるかを考えてみましょう。



### <知的障がい特別支援学級に在籍するAさん（小学5年生）の例>

指導内容	指導場面
担任がカードの意味を教えたり、伝え方のモデルを示したりする。また、本児と担任、支援員とで、設定した場面でのロールプレイを行う。	・日常生活の指導（朝の会、終わりの会等）
授業中、困ったことがあったときに、支援員がカードを示しながら伝えるタイミングを促す。	・交流学級の家庭科、図画工作科 ・生活単元学習
実際の生活場面で、本児が何に困ったのか、どういった支援があればよかったのか自分で気付けるよう、メモや図で示しながら状況を整理し、振り返りをさせる。	・友達とトラブルになったとき ・初めての場所に行くときや初めての活動を行うとき



一つの指導内容でも、いろいろな場面で指導できるんですね。交流学級での授業など、学校の教育活動全体を通じて指導を行うことの意味がよく分かりました。

自立活動の指導内容を常に意識しておくことで、いろいろな場面での指導ができるようになります。交流学級の担任など、関係する教職員と共通理解を図ることが大切です。



### 3 指導事例

ここからは、小学校と中学校での実践を2事例紹介します。  
 ここでは、指導の手立てや子どもの様子、教材・教具の紹介だけでなく、PDCAサイクルを意識した手順シートの活用方法や、活用時の学級担任の思いや考えを「学級担任の声」として掲載しました。  
 まずは、知的障がい特別支援学級に在籍する小学3年生の実践事例です。



#### <実践事例1：知的障がい特別支援学級に在籍するBさん（小学3年生）>

##### (1) 指導計画の作成（手順シート）

##### ①実態把握

障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所や良さ、課題、本人・保護者の願い
<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎日繰り返し行っている登校時の準備や帰りの支度等は、担任や支援員の少しい言葉掛けで、取り組むようになってきた。一方で、活動内容によっては、取り掛かるまでに時間が掛かったり、指示待ちになったりしている。</li> <li>・いろいろなことが気になり、集中が途切れやすいが、周囲の様子を見て行動することが増えた。</li> <li>・友達を思いやる発言など、相手を意識した言動が見られるようになった。一方で、ドッジボールの試合で負けそうになるとルールを変更するなど、自己中心的な一面も見られる。</li> <li>・視線を合わせて、話を聞くことが苦手である。</li> <li>・椅子に座った姿勢が崩れやすく、じっとしていることが難しい。</li> <li>・平仮名はほとんど読めるが、単語や2語以上の文になると読み間違いが多い。</li> <li>・左右の視線移動にぎこちなさが見られ、斜めの点つなぎが苦手である。</li> <li>・筆圧が弱く、1学年のときはなぞり書きしかできなかった。2学年になってからは、手本を見て書き写そうとする意欲が見え始め、自分の名前が書けるようになった。</li> <li>・自宅から学校まで、長い距離を集団登校している。</li> </ul>

##### ②実態把握の整理

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自宅から学校までの長い距離を毎日徒歩で登校している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・繰り返し行う活動は、少しい言葉掛けで取り組むようになってきた。</li> <li>・活動内容によっては取り掛かるまでに時間が掛かり、指示待ちになることも多い。</li> <li>・いろいろなことが気になり集中が途切れやすい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・視線を合わせて話を聞くことが苦手である。</li> <li>・自己中心的な一面も見られるが、相手を意識した動きや発言ができつつある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平仮名はほとんど読めるが単語や2語以上の文になると読み間違いが多い。</li> <li>・周囲の様子を見て行動することができる。</li> <li>・左右の視線移動にぎこちなさが見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・姿勢が崩れやすく、じっとしていることが難しい。</li> <li>・筆圧は弱いがなぞり書きができる。</li> <li>・平仮名を視写することが難しい。</li> <li>・斜めの点つなぎが苦手である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手を意識した言動ができつつある。</li> <li>・視線を合わせて話を聞くことが苦手である。</li> </ul>

#### 学級担任の声



実態把握で得られた情報を自立活動の内容の6区分で整理する中で、Bさんのできているときの状況や手立て等に注目することができました。

### ③課題の抽出

- ・見通しの持てない活動では、指示待ちになることが多い。
- ・いろいろなことが気になり、集中が途切れやすい。
- ・姿勢が崩れやすく、身体のバランスが取りにくい。
- ・左右の視線移動のぎこちなさが見られるため、文字や図形の形を捉えることが難しい。

### ④中心的な課題

- ・視覚的な手掛かりを用いて見通しを持たせ、集中して学習や作業に取り組ませることで、自主的に行動する経験を積み重ねる。
- ・姿勢保持の向上や左右の視線移動をスムーズにすることで、文字や図形の形を正しく捉えられるようにする。



#### 学級担任の声

課題の関連性を考える中で、Bさんは見通しの持てない活動において指示待ちになることが多いため、いろいろなことが気になり、集中が途切れるのではないかと考え、中心的な課題を導き出しました。

### ⑤指導目標の設定

長期目標	1 単位時間の活動の中で見通しを持ち、集中して学習や作業に取り組むことができる。	
短期目標	1学期	教師と一緒に、スケジュールを見て活動内容が分かり、15分間程度の学習や作業に最後まで取り組むことができる。
	2学期	教師と一緒に、スケジュールを見て活動内容が分かり、20分間程度の学習や作業に最後まで取り組むことができる。
	3学期	教師と一緒に、スケジュールを見て活動内容が分かり、25分間程度の学習や作業に最後まで取り組むことができる。



#### 学級担任の声

具体的な指導目標とするために、達成基準を設けました。Bさんの集中できる時間を考慮して、1学期の短期目標を「15分間程度の学習」とし、2学期以降は集中できる時間が延びるようにと学習内容や方法をその都度検討することとしました。

### ⑥指導内容の選定

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	(3) 障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること	(4) 集団への参加の基礎に関すること	(5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること	(1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること	(2) 言語の受容と表出に関すること (3) 言語の形成と活用に関すること

### ⑦指導内容

学期	具体的な指導内容	選択した区分・項目
1学期	ホワイトボードに1単位時間のスケジュールを示し、教師と一緒に活動内容を確認する。	心(3)・環(5)
	教師と一緒に活動の終わりの状態を確認し、活動後「がんばりカード」を用いて振り返りを行う。	心(3)・人(4)・コ(2)(3)
	「書く」「読む」など活動内容を変えながら、集中及び姿勢の保持ができるようにする。	心(3)・身(1)・環(5)

## (2) 指導場面の設定

この事例の具体的な指導内容は、学校の教育活動において、様々な場面で取り入れられることが考えられます。今回は、国語科の授業での実践を見てみましょう。



## (3) 指導の実際

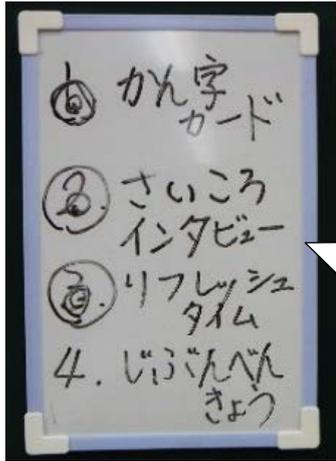
### <国語科「言葉の学習をしよう」>

#### ・本時の展開

学習活動	Bさんに対する指導の手立て	Bさんの主な様子
1 学習内容を確認する。	・ミニホワイトボードを提示して、本時の学習の流れを確認させる。	
2 漢字の学習（漢字カード）をする。	・「①漢字カードセットの中から右手で1枚カードを取る②取ったカードの漢字を読む③読み終わったカードを左手に持つ」と実演しながら方法を説明する。 ・「①取るカードがなくなったら終わり②次の漢字カードセットを先生からもらう」と終わりの状態を確認させる。	指示された方法で漢字カードを読み終え、自主的に担任の所へ次の漢字カードセットをもらいに行った。
3 「さいころインタビュー」をする。	・発表のルールや順番を板書し、確認させる。 ・小黒板にインタビューをする際の定型文を掲示しておく。	友達が発表しているときに、黒板を見て自分の順番を確認していた。
4 「リフレッシュタイム」を行う。	・音楽に合わせて、主に二人組でする運動を行う。	
5 「じぶんべんきょう」(*)をする。 ・視写プリント ・点つなぎ ・反対言葉 ・漢字パズル	・活動前に、どのような状態になったら終わりになるかを確認させる。 ・「書く」「読む」など、異なる課題を組み合わせ、Bさんの集中が持続できるようにする。 ・活動後、「がんばりカード」を用いて振り返りを行う。	周囲の様子が気になっても、離席することなく、活動の終わりまで取り組んだ。 活動後、自主的に「がんばりカード」にシールを貼った。
6 学習のまとめをする。	・ミニホワイトボードで振り返りながら、自分の頑張りを伝えさせる。	

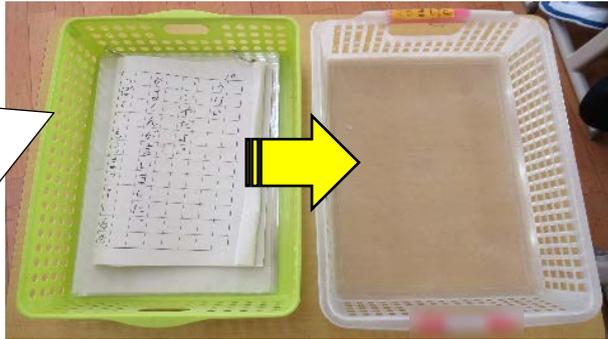
(※) 「じぶんべんきょう」とは、本学級の個別学習の呼称である。

・使用した教材・教具等



＜ミニホワイトボード＞  
 15分間程度で終える活動を組み合わせて1単位時間の学習を構成し、その流れを示した。授業の最初に提示して、Bさんに活動内容を確認させた。活動が終わるごとに数字に丸を付けるようにした。「リフレッシュタイム」は気分転換を兼ねて、身体を動かす時間とした。

＜課題を入れるかご＞  
 個別学習の時間である「じぶんべんきょう」で「取り組む課題（緑色のかご）」と「終わった課題（白色のかご）」の二つのかごを準備した。活動前に「緑色のかごの中の課題がなくなるまで」と確認することで、Bさんにとって終わりの状態が明確になり、集中して課題に取り組むことが増えた。



取り組む課題が入っている

終わった課題を入れる



＜がんばりカード＞  
 「じぶんべんきょう」に取り組み始めた頃、Bさんは課題を早く終わらせたい気持ちから、終わっていない状態でもかごに入れてしまうことがあった。そこで、緑色のかごの中の課題がなくなった後に、達成状況を担任と一緒に確認し、できていればシールを一つずつ貼ることとした。Bさんはシールをたくさん貼ることを目標に、一つ一つの課題に対して一生懸命取り組むようになった。

(4) 評価・改善

⑧評価

1学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スケジュールを見て、1単位時間の活動の流れを理解することができていた。</li> <li>・終わりの状態を確認することで、15分間程度の活動に集中して最後まで取り組めた。</li> <li>・自信を持ちにくい活動内容の場合には、指示待ちになる場合があった。</li> </ul>
-----	---



学級担任の声

「15分間程度の学習」という具体的な数値で目標を設定していたので、評価がしやすかったです。

評価後に見直した短期目標と具体的な指導内容です。



## ⑤指導目標の設定

長期目標	1 単位時間の活動の中で見通しを持ち、集中して学習や作業に取り組むことができる。	
短期目標	1学期	教師と一緒に、スケジュールを見て活動内容が分かり、15分間程度の学習や作業に最後まで取り組むことができる。
	2学期	教師と一緒に「じぶんべんきょう」の活動内容を選び、15分間程度の学習や作業に最後まで取り組むことができる。
	3学期	自分で「じぶんべんきょう」の活動内容を選び、15分間程度の学習や作業に最後まで取り組むことができる。

### 学級担任の声



Bさんにとって、集中できる時間が延びることよりも、より主体的に活動に取り組むことが大切だと考え、年度当初に設定した2学期及び3学期の短期目標を修正しました。

## ⑦指導内容

学期	具体的な指導内容	選択した区分・項目
2学期	各活動の終わりの時刻を時計のイラストで示しながら、1単位時間の活動スケジュールを確認させる。	心(3)・環(5)
	「じぶんべんきょう」で行う複数の内容をそれぞれカードで示し、その順番や量等を教師と一緒に選択・決定させる。	心(3)・人(4)・コ(2)(3)
	活動後に「がんばりカード」を用いて振り返りを行う。	心(3)・コ(2)(3)

### 学級担任の声



活動に取り組む際に、時間を意識してほしいと考え、時計のイラストを活用してスケジュールを示すこととしました。「がんばりカード」は有効だったため、「じぶんべんきょう」以外の活動でも使用するようになりました。

## 【実践を終えて】

本実践を通して、自立活動の内容に即して実態把握を行ったり、具体的な目標や指導内容を設定したりすることの大切さを理解することができました。これまで何気なく行っていた言葉掛けも、「ホワイトボードを見てごらん」など、指導内容や短期目標を意識して言葉掛けをするようになりました。



次は、自閉症・情緒障がい特別支援学級に在籍する中学2年生の実践事例です。



## <実践事例2：自閉症・情緒障がい特別支援学級に在籍するCさん（中学2年生）>

### (1) 指導計画の作成（手順シート）

#### ①実態把握

障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所や良さ、課題、本人・保護者の願い

- ・家庭でよく手伝いをしており、身の回りのことが自分でできる。
- ・気分の浮き沈みが激しい面があり、見通しが持てないことや気になることがあると気持ちが不安定になる。
- ・周囲の視線が気になるようで、集団の中で活動することが苦手である。
- ・周囲の状況を見て、直感的に行動してしまうことがある。
- ・漢字や計算など、基礎的な学力が学年相応に身に付いている。
- ・自分の気持ちを文章にして書いたり、言葉で伝えたりすることが苦手である。
- ・自分の気持ちをうまく表現できないと、不機嫌な態度をとってしまうことがある。
- ・手先が器用で、調理、裁縫、ペーパークラフトが得意である。
- ・読書を好み、毎日、本を読んでいる。
- ・保護者は、本人のペースで、できることを増やして行ってほしいと望んでいる。

#### ②実態把握の整理

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気分の浮き沈みが激しい面がある。</li> <li>・見通しが持てないと気持ちが不安定になる。</li> <li>・周囲の視線が気になる、集団で活動することが苦手である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・周囲の視線が気になり、集団で活動することが苦手である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・直感的に行動してしまうことがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手先が器用で身の回りのことは自分でできる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の気持ちを文章にして書いたり、言葉で伝えたりすることが苦手である。</li> <li>・自分の気持ちをうまく表現できず、不機嫌な態度をとってしまう。</li> </ul>

#### ③課題の抽出

- ・気持ちの安定を図り、集団の中で主体的に活動できるようにすることで、自信が持てるようにする。
- ・自分の気持ちを他者に伝えられるようにすることで、活動や集団に対する不安を和らげるようにする。

#### ④中心的な課題

- ・様々な活動の中で自己肯定感を高めるとともに、自分の不安な気持ちを他者に伝えられるようにすることで、安心して集団の中で自分の力を発揮できるようにする。



#### 学級担任の声

自立活動の内容の6区分で実態を整理し、関連性を考えることで、Cさんの集団参加の難しさの原因は、活動や人への強い不安感によるものであると考えました。

## ⑤指導目標の設定

長期目標	教師に不安な気持ちを言葉で伝え、相談することができる。
短期目標	1学期 学級担任からの言葉掛けにより、不安なことを学級担任に言葉で伝えることができる。
	2学期 自分から不安なことを学級担任に言葉で伝え、相談することができる。
	3学期 教科担任に不安なことを言葉で伝え、相談することができる。



### 学級担任の声

Cさん本人と話をした上で、目標を決めました。その際、Cさんがイメージしやすい、具体的な行動目標となるよう心掛けました。

## ⑥指導内容の選定

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	(1) 情緒の安定に関すること	(3) 自己の理解と行動の調整に関すること	(2) 感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること		(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること

## ⑦指導内容

学期	具体的な指導内容	選択した区分・項目
1学期	1日の始まりに、不安な気持ちを数値化させることで、自分の気持ちを明確にするとともに、何が不安か学級担任に伝えることができるようにする。	心(1)・人(3)・環(2)・コ(5)
	数値化された気持ちの理由を十分に聞いたり、解決方法を一緒に考えたりすることで、本人の不安が軽減できるようにする。	心(1)・環(2)・コ(5)



### 学級担任の声

主に学級担任が行う指導内容となっていますが、支援員や教科担任などの関係教職員と共通理解を図るため、できるだけ具体的な表記となるよう心掛けました。

## (2) 指導場面の設定

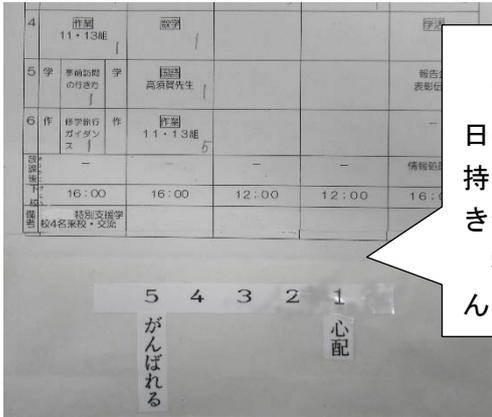
この事例では、具体的な指導内容に「1日の始まりに」と指導場面が表記されていますね。実際の取組を見てみましょう。



### (3) 指導の実際

#### <登校時に不安な気持ちを数値化する>

##### ・使用した教材・教具等



##### <マイ気持ちメーター>

家庭配布用の週時間割を基に作成した。毎朝、その日の時間割を見ることで、1日の学校生活に見通しを持たせるとともに、各学習に対する自分の気持ちと向き合う時間を設けた。

学習時間ごとに自分の気持ちを「1（心配）～5（がんばれる）」で数値化して記入するように働き掛けた。

##### <がんばったビー>

1日の終わりに頑張ったことの数（主に参加できた授業の数）のビー玉をペットボトルに入れるようにした。学級の生徒が各自持っており、全員のペットボトルが満杯になれば、学級で楽しい活動ができることとした。



#### 学級担任の声



「1日の始まり」である登校時に、Cさんには不安な気持ちを伝えてほしいと考え、伝えるきっかけとなる「マイ気持ちメーター」を用意しました。既存の週時間割を活用することで、特別な教材を新たに作る必要がありませんでした。Cさんは、自分の気持ちを数値化することは理解でき、私の働き掛けに抵抗なく取り組むことができました。

##### ・Cさんの主な様子

初めは、学級担任から促されて自分の気持ちを数値化していたが、ある日、学級担任が声を掛けるのを忘れていると、自分で「マイ気持ちメーター」に数字を書いて見せにきた。その日以降、学級担任はCさんが自発的に持ってくるのを待つようにすると、毎日「マイ気持ちメーター」を忘れずに記入し、どの教科の何が不安か、具体的に学級担任に話すことが増えてきた。

ある日、「-10」と書いてくることもあり、学級担任が驚いて「これは？」と尋ねると、「これは絶対無理。」と話すこともあった。そのようなときにでも、学級担任は常に共感的な態度を心掛けることで、Cさんは自ら不安な気持ちを伝えられるようになってきた。

#### (4) 評価・改善

##### ⑧評価

1学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不安な気持ちを数値化したことで、何が不安か、具体的に学級担任に話すことが増えてきた。</li> <li>・1日の活動に見通しを持ち学級担任と話し合ったことで、不安な気持ちを和らげることができた。また調理実習など自信のある活動では、苦手意識のあった友達とも一緒に活動する姿が見られるようになった。</li> </ul>
-----	--



##### 学級担任の声

「マイ気持ちメーター」と「がんばったビー」がCさんに適していたようで、当初予想していたよりも、良い変容がCさんに見られました。

評価後に見直した短期目標と具体的な指導内容です。



##### ⑤指導目標の設定

長期目標	教師に不安な気持ちを言葉で伝え、相談することができる。	
短期目標	1学期	学級担任の言葉掛けにより、不安なことを学級担任に言葉で伝えることができる。
	2学期	教科担任に、不安なことを言葉で伝えることができる。
	3学期	自分から学級担任や教科担任に不安なことを言葉で伝え、相談できる。

##### ⑦指導内容

学期	具体的な指導内容	選択した区分・項目
2学期	「マイ気持ちメーター」を活用させながら、教科担任に不安な気持ちを言葉で伝え、相談できるようにする。	心(1)・人(3)・環(2)・コ(5)
	学級担任を含めた教職員は、本人の不安な気持ちを十分に聞いたり、解決方法を一緒に考えたりすることで、本人の不安が軽減できるようにする。	心(1)・環(2)・コ(5)



##### 学級担任の声

年度当初に考えていた2学期の目標は、ほぼ達成できたので、次のステップとして教科担任にも「マイ気持ちメーター」を使って不安なことを伝えてほしいと考えました。

##### 【実践を終えて】

本実践を通して、自立活動の内容の6区分で実態を整理し中心的な課題を導き出すことと、実態に応じた教材を用いることの大切さを実感しました。また、具体的な目標及び指導内容を設定することにより、関係教職員と共通理解が図られ、明確に評価できたと思います。



## 【資料】

- 資料 1 手順シート 原本
- 資料 2 手順シート 記入例
- 資料 3 補助資料活用の留意事項
- 資料 4 補助資料



資料1 手順シート 原本



# 自立活動の指導「手順シート」

作成日 年 月 日

学年		氏名	
----	--	----	--

## ①実態把握

障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所や良さ、課題、本人・保護者の願い

--

## ②実態把握の整理

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション

## ③課題の抽出

--

## ④中心的な課題

--

⑤目標の設定

長期目標		
短期目標	1学期	
	2学期	
	3学期	

⑥指導内容の選定

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション

⑦指導内容の設定

学期	具体的な指導内容	選択した区分・項目
1学期		
2学期		
3学期		

⑧評価

1学期	
2学期	
3学期	

## 資料2 手順シート 記入例



# 自立活動の指導「手順シート」

作成日 年 月 日

学年	小学5年	氏名	A	(知的障がい特別支援学級)
----	------	----	---	---------------

## ①実態把握

障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所や良さ、課題、本人・保護者の願い
<ul style="list-style-type: none"> <li>・消防車など車が大好きで、名前をよく覚えている。</li> <li>・2年生程度の漢字の読み書きができる。</li> <li>・具体物を用いながら、20までの加減計算ができる。</li> <li>・文字やイラストの入った手順表を手掛かりに、朝の片付けや帰りの支度が一人でできるようになってきた。</li> <li>・新しい場所や活動は不安になりやすいが、活動の見通しを持たせることで、自主的に取り組むようになってきた。</li> <li>・相手の発言に応じた会話ができるが、困ったときに、自発的に周囲に助けを求めることは難しい。</li> <li>・休み時間は友達に誘われて一緒に遊ぶこともあるが、一人で車の図鑑を見たり、学級担任や支援員と話をしたりして過ごしていることが多い。</li> <li>・視野に入ったものが気になると、離席してしまう。</li> <li>・ダンスが好きで大まかな動作の模倣はできるが、はさみなど手先を使った活動は苦手である。</li> <li>・保護者はコミュニケーションの力を身に付け、友達と関わり合いながら成長していくことを望んでいる。</li> <li>・本人は、将来、車の運転免許を取得したいと思っている。</li> </ul>

## ②実態把握の整理

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> <li>・健康状態は良好で、生活リズムは確立している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しい場所や活動に対して不安になりやすい。</li> <li>・活動の見通しが持てると、自主的に取り組む。</li> <li>・車など興味関心があるものを見ると、衝動的に行動してしまう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特定の教師との関わりが中心である。</li> <li>・友達に誘われると、一緒に遊ぶことがある。</li> <li>・困った場面で助けを求めることができない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文字やイラストなどの手掛かりがあれば、適切に行動できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大まかな動作模倣ができる。</li> <li>・はさみなど手先を使った活動が苦手である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常生活においては、相手の発言に応じた会話ができる。</li> <li>・感情などを言葉にして話すことが難しい。</li> <li>・困った場面で、助けを求めることができない。</li> </ul>

## ③課題の抽出

<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しい場所や活動に対して不安になりやすい。</li> <li>・活動の見通しが立たず、困ってしまうと周囲に助けを求めることができない。</li> <li>・イラスト等を手掛かりに、日常生活におけるコミュニケーション能力を高める必要がある。</li> </ul>
--

## ④中心的な課題

<ul style="list-style-type: none"> <li>・視覚支援を用いて見通しを持たせることにより、不安感を軽減させ、身近な人とのコミュニケーションの中で、自分の気持ちを伝える方法を身に付けさせる。</li> </ul>
--

### ⑤目標の設定

長期目標	カードを活用しながら、先生や友達に困っていることやしてほしいことを伝える。
短期目標	1学期 支援員の促しによって、カードを用いて先生に困っていることを伝える。
	2学期 自分でカードを用いて、友達に困っていることやしてほしいことを伝える。
	3学期 自分でカードを用いて、先生や友達に困っていることやしてほしいことを伝える。

### ⑥指導内容の選定

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	(2) 状況の理解と変化への対応に関すること	(1) 他者とのかわりの基礎に関すること	(5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること		(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること

### ⑦指導内容の設定

学期	具体的な指導内容	選択した区分・項目
1学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担任がカードの意味を教えたり、伝え方のモデルを示したりする。また、本児と担任、支援員とで、設定した場面でのロールプレイを行う。</li> <li>・授業中、困ったことがあったときに、支援員がカードを示しながら伝えるタイミングを促す。</li> <li>・実際の生活場面で、本児が何に困ったのか、どういった支援があればよかったのか自分で気付けるよう、メモや図で示しながら状況を整理し、振り返りをさせる。</li> </ul>	心(2)・環(5)・コ(5) 心(2)・人(1) 人(1)・環(5)・コ(5)
2学期		
3学期		

### ⑧評価

1学期	支援員の促しにより、カードを使って困っていることを伝えることが確実にできた。3回に1回程度は、自分からカードを用いて、担任に困っていることを伝えることができるようになった。また、先生にしてほしいことについても、カードを自分から用いて担任に伝えることができた。
2学期	
3学期	

# 自立活動の指導「手順シート」

作成日 年 月 日

学年	小学3年	氏名	B	(知的障がい特別支援学級)
----	------	----	---	---------------

## ①実態把握

障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所や良さ、課題、本人・保護者の願い
<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎日繰り返し行っている登校時の準備や帰りの支度等は、担任や支援員の少しの言葉掛けで、取り組むようになってきた。一方で、活動内容によっては、取り掛かるまでに時間が掛かったり、指示待ちになったりしている。</li> <li>・いろいろなことが気になり、集中が途切れやすいが、周囲の様子を見て行動することが増えた。</li> <li>・友達を思いやる発言など、相手を意識した言動が見られるようになった。一方で、ドッジボールの試合で負けそうになるとルールを変更するなど、自己中心的な一面も見られる。</li> <li>・視線を合わせて、話を聞くことが苦手である。</li> <li>・椅子に座った姿勢が崩れやすく、じっとしていることが難しい。</li> <li>・平仮名はほとんど読めるが、単語や2語以上の文になると読み間違いが多い。</li> <li>・左右の視線移動にぎこちなさが見られ、斜めの点つなぎが苦手である。</li> <li>・筆圧が弱く、1学年のときはなぞり書きしかできなかった。2学年になってからは、手本を見て書き写そうとする意欲が見え始め、自分の名前が書けるようになった。</li> <li>・自宅から学校まで、長い距離を集団登校している。</li> </ul>

## ②実態把握の整理

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自宅から学校までの長い距離を毎日徒歩で登校している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・繰り返し行う活動は、少しの言葉掛けで取り組むようになってきた。</li> <li>・活動内容によっては取り掛かるまでに時間が掛かり、指示待ちになることも多い。</li> <li>・いろいろなことが気になり集中が途切れやすい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・視線を合わせて話を聞くことが苦手である。</li> <li>・自己中心的な一面も見られるが、相手を意識した動きや発言ができつつある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平仮名はほとんど読めるが単語や2語以上の文になると読み間違いが多い。</li> <li>・周囲の様子を見て行動することができる。</li> <li>・左右の視線移動にぎこちなさが見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・姿勢が崩れやすく、じっとしていることが難しい。</li> <li>・筆圧は弱いかなぞり書きができる。</li> <li>・平仮名を視写することが難しい。</li> <li>・斜めの点つなぎが苦手である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手を意識した言動ができつつある。</li> <li>・視線を合わせて話を聞くことが苦手である。</li> </ul>

## ③課題の抽出

<ul style="list-style-type: none"> <li>・見通しの持てない活動では、指示待ちになることが多い。</li> <li>・いろいろなことが気になり、集中が途切れやすい。</li> <li>・姿勢が崩れやすく、身体のバランスが取りにくい。</li> <li>・左右の視線移動のぎこちなさが見られるため、文字や図形の形を捉えることが難しい。</li> </ul>
---

## ④中心的な課題

<ul style="list-style-type: none"> <li>・視覚的な手掛かりを用いて見通しを持たせ、集中して学習や作業に取り組ませることで、自主的に行動する経験を積み重ねる。</li> <li>・姿勢保持の向上や左右の視線移動をスムーズにすることで、文字や図形の形を正しく捉えられるようにする。</li> </ul>
--

### ⑤目標の設定

長期目標	1 単位時間の活動の中で見通しを持ち、集中して学習や作業に取り組むことができる。	
短期目標	1学期	教師と一緒に、スケジュールを見て活動内容が分かり、15分間程度の学習や作業に最後まで取り組むことができる。
	2学期	教師と一緒に個別学習の活動内容を選び、15分間程度の学習や作業に最後まで取り組むことができる。
	3学期	自分で個別学習の活動内容を選び、15分間程度の学習や作業に最後まで取り組むことができる。

### ⑥指導内容の選定

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	(3) 障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること	(4) 集団への参加の基礎に関すること	(5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること	(1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること	(2) 言語の受容と表出に関すること (3) 言語の形成と活用に関すること

### ⑦指導内容の設定

学期	具体的な指導内容	選択した区分・項目
1学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホワイトボードに1 単位時間のスケジュールを示し、教師と一緒に活動内容を確認する。</li> <li>・教師と一緒に活動の終わりの状態を確認し、活動後「がんばりカード」を用いて振り返りを行う。</li> <li>・「書く」「読む」など活動内容を変えながら、集中及び姿勢の保持ができるようにする。</li> </ul>	心(3)・環(5) 心(3)・人(4)・コ(2)(3) 心(3)・身(1)・環(5)
2学期		
3学期		

### ⑧評価

1学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スケジュールを見て、1 単位時間の活動の流れを把握することができていた。</li> <li>・終わりの状態を確認することで、15分間程度の活動に集中して取り組めた。</li> <li>・自信を持ちにくい活動内容の場合には、指示待ちになる場合があった。</li> </ul>
2学期	
3学期	

# 自立活動の指導「手順シート」

作成日 年 月 日

学年	中学2年	氏名	C (自閉症・情緒障がい特別支援学級)
----	------	----	---------------------

## ①実態把握

障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所や良さ、課題、本人・保護者の願い
<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭でよく手伝いをしており、身の周りのことが自分でできる。</li> <li>・気分の浮き沈みが激しい面があり、見通しが持てないことや気になることがあると気持ちが不安定的になる。</li> <li>・周囲の視線が気になるようで、集団の中で活動することが苦手である。</li> <li>・周囲の状況を見て、直感的に行動してしまうことがある。</li> <li>・漢字や計算など、基礎的な学力が学年相応に身に付いている。</li> <li>・自分の気持ちを文章にして書いたり、言葉で伝えたりすることが苦手である。</li> <li>・自分の気持ちをうまく表現できないと、不機嫌な態度をとってしまうことがある。</li> <li>・手先が器用で、調理、裁縫、ペーパークラフトが得意である。</li> <li>・読書を好み、毎日本を読んでいる。</li> <li>・保護者は、本人のペースで、できることを増やして行ってほしいと望んでいる。</li> </ul>

## ②実態把握の整理

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気分の浮き沈みが激しい面がある。</li> <li>・見通しが持てないと気持ちが不安定的になる。</li> <li>・周囲の視線が気になり、集団で活動することが苦手である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・周囲の視線が気になり、集団で活動することが苦手である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・直感的に行動してしまうことがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手先が器用で身の回りのことは自分でできる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の気持ちを文章にして書いたり、言葉で伝えたりすることが苦手である。</li> <li>・自分の気持ちをうまく表現できず、不機嫌な態度をとってしまう。</li> </ul>

## ③課題の抽出

<ul style="list-style-type: none"> <li>・気持ちの安定を図り、集団の中で主体的に活動できるようにすることで、自信が持てるようにする。</li> <li>・自分の気持ちを他者に伝えられるようにすることで、活動や集団に対する不安を和らげるようにする。</li> </ul>
---

## ④中心的な課題

<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な活動の中で自己肯定感を高めるとともに、自分の不安な気持ちを他者に伝えられるようにすることで、安心して集団の中で自分の力を発揮できるようにする。</li> </ul>
---

### ⑤目標の設定

長期目標		教師に不安な気持ちを言葉で伝え、相談することができる。
短期目標	1学期	学級担任からの言葉掛けにより、不安なことを学級担任に言葉で伝えることができる。
	2学期	教科担任に、不安なことを言葉で伝えることができる。
	3学期	自分から学級担任や教科担任に不安なことを言葉で伝え、相談できる。

### ⑥指導内容の選定

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	(1) 情緒の安定に関すること	(3) 自己の理解と行動の調整に関すること	(2) 感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること		(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること

### ⑦指導内容の設定

学期	具体的な指導内容	選択した区分・項目
1学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1日の始まりに、不安な気持ちを数値化させることで、自分の気持ちを明確にするとともに、何が不安か学級担任に伝えることができるようにする。</li> <li>・ 数値化された気持ちの理由を十分に聞いたり、解決方法を一緒に考えたりすることで、本人の不安が軽減できるようにする。</li> </ul>	心(1)・人(3)・環(2)・コ(5) 心(1)・環(2)・コ(5)
2学期		
3学期		

### ⑧評価

1学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 不安な気持ちを数値化したことで、何が不安か、具体的に学級担任に話すことが増えてきた。</li> <li>・ 1日の活動に見通しを持ち学級担任と話し合ったことで、不安な気持ちを和らげることができた。また、調理実習など自信のある活動では、苦手意識のあった友達とも一緒に活動する姿が見られるようになった。</li> </ul>
2学期	
3学期	

# 自立活動の指導「手順シート」

作成日 年 月 日

学年	小学4年	氏名	D	(弱視特別支援学級)
----	------	----	---	------------

## ①実態把握

障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所や良さ、課題、本人・保護者の願い
<ul style="list-style-type: none"> <li>・未熟児網膜症により、右眼は光覚程度、左眼は0.08（矯正視力0.1）程度の視力である。</li> <li>・少し離れた場所や薄暗い場所では、人や物の区別がつきにくい。</li> <li>・学校では、一人で教室や慣れた場所での移動が可能である。屋外では、道路の凹凸や段差に気付かず、つまずくことがある。また、まぶしさを軽減するため、屋外に出るときにはひさしの付いた帽子をかぶっている。</li> <li>・校外学習などで初めて行く場所や交流学級での席替えなど、周囲の変化に対して不安になりやすい。</li> <li>・交流学級で音楽と図画工作の授業を受けている。朝の会や給食も交流学級で過ごしている。</li> <li>・教科書は拡大教科書を使用しており、特別支援学級には、拡大読書器が備えられている。</li> <li>・板書された文字を読んだり書き写したりする際には、弱視レンズ（単眼鏡とルーペ）を使用している。</li> <li>・漢字を正確に書くのが苦手で、点や線の数が多かったり少なかったりする。</li> <li>・文字の読み書きなど学習以外の場面では自分から弱視レンズを使用する様子が見られず、教師からの指示を待っていることが多い。</li> <li>・昼休み等は仲の良い友達と一緒に教室で過ごすなど、人間関係は良好であるが、自分から他者へ話し掛けることは少ない。</li> <li>・キャッチボールは難しいが、基本的な運動・動作は習得している。</li> <li>・登下校は保護者が送迎している。ピアノ教室とスイミング教室に通っている。</li> <li>・本人は、友達と同じようにいろいろなことに挑戦したいと思っている。保護者は、地域の中学校・高等学校へ進学してほしいと願っている。</li> </ul>

## ②実態把握の整理

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> <li>・右眼は光覚程度、左眼の視力が0.08（0.1）の弱視である。</li> <li>・屋外では、日の光をまぶしく感じる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昼休み等は仲の良い友達と過ごす。</li> <li>・初めての場所や変化に対して不安になる。</li> <li>・決まった場面以外では、教師からの指示を待っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人間関係は良好であり、仲の良い友達もいる。</li> <li>・自分から他者へ話し掛けることは少ない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少し離れた場所や薄暗い場所では人や物の区別がつきにくい。</li> <li>・慣れた場所では、一人での移動が可能である。</li> <li>・弱視レンズを使用して、黒板の文字を読んでいる。</li> <li>・学習場面以外で、弱視レンズを使用する様子が見られない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的な運動・動作は習得している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音声でコミュニケーションを行う。</li> <li>・自分から他者へ話し掛けることは少ない。</li> </ul>

## ③課題の抽出

<ul style="list-style-type: none"> <li>・良好な人間関係を構築することができるが、相手の表情等を視覚的に捉えることが困難なため、他者との関わりは受動的である。</li> <li>・周囲の状況や変化等に不安を感じても、自分から弱視レンズを使用するなどして、必要な情報を得る習慣が身に付いていない。</li> <li>・身体の動きに大きな問題はなく近くの物は見えるため、他感覚の併用を促しながら自分でできることを増やす。</li> </ul>
--

## ④中心的な課題

<ul style="list-style-type: none"> <li>・体育館での集会活動や校外学習など、教室での学習以外に弱視レンズの有効な使用場面があることを理解し、日常生活の中で積極的に使おうとする態度を身に付ける。</li> </ul>
--

### ⑤目標の設定

長期目標	学校生活の中で、自主的に弱視レンズを使用して必要な情報を得ることができる。	
短期目標	1学期	特別支援学級での活動や集会活動、各行事において、教師の促しを受けて、弱視レンズを使用して情報を得ることができる。
	2学期	教師の促しにより、弱視レンズを使用して必要な情報を得ることができる。
	3学期	自主的に弱視レンズを使用して、必要な情報を得ることができる。

### ⑥指導内容の選定

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	(2) 状況の理解と変化への対応に関すること	(1) 他者とのかわりの基礎に関すること	(2) 確認や認知の特性についての理解と対応に関すること		(4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること

### ⑦指導内容の設定

学期	具体的な指導内容	選択した区分・項目
1学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>自立活動の時間における指導で、弱視レンズを使って対象物の名前を当てるゲームを行い、遠くの掲示物や小さな物でも自分で見ることができたという経験をさせる。</li> <li>弱視レンズの使用が有効であると考えられる具体的な場面（体育館での集会、校外学習、遠足など）について、これまでの経験を基に考えさせる。</li> </ul>	心(2)・人(1)・環(2) 心(2)・環(2)・コ(4)
2学期		
3学期		

### ⑧評価

1学期	様々な対象物をゲーム形式で見たことで、特別支援学級の活動では、少しでも見えにくいと感じると弱視レンズを使用する場面が増えた。
2学期	
3学期	

# 自立活動の指導「手順シート」

作成日 年 月 日

学年	中学2年	氏名	E	(難聴特別支援学級)
----	------	----	---	------------

## ①実態把握

障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所や良さ、課題、本人・保護者の願い
<ul style="list-style-type: none"> <li>健康状態は比較的良好であるが、中耳炎に罹患しやすく聴力低下も見られる。</li> <li>両耳とも中等度の感音性難聴であり、補聴器を装用している。授業中はFM補聴システムを使用している。</li> <li>発音は比較的明瞭であり、1対1であれば音声言語のみでコミュニケーションが可能である。</li> <li>大勢の場での聞き取りや後方からの呼びかけには、反応できないことが多い。一方で、日常生活においては聞き取りが難しい場合でも、これまでの経験を基に、周囲の状況から判断して行動できることが多い。</li> <li>数学、体育が得意科目であり、国語、英語に苦手意識を持っている。</li> <li>インターネットを活用して、興味・関心のある事柄について情報を得ている。</li> <li>交流学級でノートテイク等の支援を受ける際に、周囲の視線を気にするようになってきた。</li> <li>地域の幼稚園・小学校に在籍していたため友達が多い。しかし、聞き取れなかった会話があっても、その内容を確認することなく、視覚からの情報だけで判断して行動するため、トラブルになることがある。</li> <li>本人が気付くことのできない聞き逃しや状況に適さない大きさの話声を注意されることが多く、周囲から何か指摘されると、自分だけがいつも責められると感じている。</li> <li>本人・保護者は、地域の友達と一緒に学習し、高校へ進学することを望んでいる。</li> </ul>

## ②実態把握の整理

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> <li>中耳炎に罹患している間は聴力低下が見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>周囲から間違いを指摘されたり注意を受けたりすると、自分だけがいつも責められると感じている。</li> <li>思春期になり、付き添っての支援（ノートテイク等）は周囲の視線を気にするようになってきた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>視覚からの情報を優先して物事を判断するため、思い込みで行動し、友達とトラブルになることがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>補聴器を装用していても、大勢の場での聞き取りや後方からの呼びかけには反応できないことが多い。</li> <li>日常生活においては、音声情報が聞き取れなかった場合でも、周囲の状況から判断して行動できる。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>1対1であれば、相手の発言に応じた会話ができる。</li> <li>聞き取れなかった会話の内容を、周囲の人へ確認することはない。</li> </ul>

## ③課題の抽出

<ul style="list-style-type: none"> <li>聞き取れなかった音声情報を確認することなく、視覚からの情報及び本人の経験から判断して行動している。</li> <li>周囲から間違いを指摘されたり注意を受けたりすると、自分だけがいつも責められると感じている。</li> </ul>
--

## ④中心的な課題

<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の聞こえの状態について知り、聞き取りが難しい状況や聞き分けることが難しい音声情報があることを理解させ、状況に応じた声の大きさや周囲に確認する習慣を身に付けさせる。</li> </ul>
---

### ⑤目標の設定

長期目標	自分の聞こえの状態を理解し、少人数の場で会話の内容を確認することができる。
短期目標	1学期 自分の聞こえの状態と読話や筆談での視覚的なコミュニケーションがあることを知る。
	2学期 教師とのやり取りの中で、視覚的なコミュニケーションを活用して確認することができる。
	3学期 友達とのやり取りの中で、視覚的なコミュニケーションを活用して確認することができる。

### ⑥指導内容の選定

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	(3) 障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲	(2) 他者の意図や感情の理解に関すること	(1) 保有する感覚の活用に関すること (3) 感覚の補助及び代行手段の活用に関すること		(2) 言語の受容と表出に関すること

### ⑦指導内容の設定

学期	具体的な指導内容	選択した区分・項目
1学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オージオグラムについて学習し、自分の聞こえの状態を把握させる。</li> <li>・設定した場面で口声模倣を行い、音声情報を正確に聞き取ることができているか確認する。</li> <li>・読話や筆談での視覚的なコミュニケーションについて学習し、周囲の人へ確認するタイミングや伝え方について、教師と一緒に考える。</li> </ul>	心(3)・環(1) 環(1)・コ(2) 環(3)・心(3)・人(2)
2学期		
3学期		

### ⑧評価

1学期	自分の聞こえの状態を、オージオグラムの学習を通して客観的に把握することで、これまで周囲から指摘されていた聞き間違いの理由が分かり、本人はとても納得した様子であった。
2学期	
3学期	

# 自立活動の指導「手順シート」

作成日 年 月 日

学年	小学4年	氏名	F	(肢体不自由特別支援学級)
----	------	----	---	---------------

## ①実態把握

障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所や良さ、課題、本人・保護者の願い
<ul style="list-style-type: none"> <li>健康状態は良好であり、生活リズムは安定している。</li> <li>痙直型脳性まひ（両まひ）で、普段は下肢装具を着けて歩行（移動）しているが、長い移動のときはクラッチ（杖）も使用するときがある。</li> <li>両下肢に緊張があり、膝が伸展しにくく、足首が硬いため歩行時に転倒しやすい。</li> <li>空間認知に弱さがあるためか、教室や廊下では、人や物にぶつかったりすることがある。</li> <li>交流学級では、国語、社会、算数、理科の授業に参加している。</li> <li>読書が好きで、図書館から自分の好きな本を借りて休み時間などに読んでいる。</li> <li>自分から積極的に話し掛けることはないが、自分の好きな話題のときには、友達と楽しく話をすることができる。</li> <li>経験のないことや自信のないことには不安が強く、消極的になったり、黙り込んだりすることもある。</li> <li>話し掛けられたり質問されたりすると答えるが、人前での発表は不安があり極度に緊張する。</li> <li>本人は友達と関わりながら、もっと一緒に活動したいという思いがある。</li> <li>保護者は自分でできることを増やし、学校生活を楽しんでほしいという思いがある。</li> </ul>

## ②実態把握の整理

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> <li>健康状態は良好であり、生活リズムは安定している。</li> <li>普段は下肢装具を着けて移動しているが、長い移動のときはクラッチも使用する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>経験のないことや自信のないことには不安が強く、消極的になる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分から積極的に話し掛けることはないが、自分の好きな話題のときには、友達と楽しく話をすることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の身体と空間との位置関係の認識（空間認知）に弱さがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>膝が伸展しにくく、足首が硬いため歩行時に転倒しやすい。</li> <li>両下肢に筋緊張があるため、膝や足首の可動域が狭い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分から積極的に話し掛けることはないが、自分の好きな話題のときには、友達と楽しく話をすることができる。</li> </ul>

## ③課題の抽出

<ul style="list-style-type: none"> <li>両下肢に緊張があるため、膝や足首の可動域が狭いことから、膝や足首の緩める運動等が必要である。</li> <li>自分の身体と空間との位置関係に応じた動き方や、転倒しないための体の動かし方を身に付けることが必要である。</li> <li>自信がないときや人前で注目を集める場面では、緊張や不安で消極的になることから、見通しを持って、人と関わるようになること必要である。</li> </ul>
---

## ④中心的な課題

<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の体の可動域を理解し、周囲の人や物を意識して、安全に移動したり活動したりする力を身に付ける。</li> <li>興味のある話題や行動のモデルを通して、人と関わる力を身に付ける。</li> </ul>
--

### ⑤目標の設定

長期目標	周囲の人や物及び自分の体の動きを意識し、安全に活動に参加できる。	
短期目標	1学期	教室内の人や物の位置など、周囲の安全を確認してから活動する。
	2学期	自分でクラッチを使う活動や場所を決め、安全に特別支援学級の学習活動に参加する。
	3学期	自分の体の動かし方を意識し、安全に交流学級での授業に参加する。

### ⑥指導内容の選定

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
(4) 障がいの特性の理解と生活環境の調節に関する事	(1) 情緒への安定に関する事	(1) 他者とのかわりの基礎に関する事	(3) 感覚の補助及び代行手段の活用に関する事	(1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関する事 (2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関する事 (4) 身体の移動能力に関する事	(5) 状況に応じたコミュニケーションに関する事

### ⑦指導内容の設定

学期	具体的な指導内容	選択した区分・項目
1学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 体育の時間に、空間認知力を高める遊びや運動をサーキット形式で行う。</li> <li>・ 教室の机や物などの配置図を提示しておき、どこを移動するときに気を付けなければならないかを自分で意識できるようにする。</li> <li>・ 自立活動の時間と朝の会のストレッチ運動で、身体を弛緩する運動（足首を緩める、膝を緩める、股関節を緩める等の運動）を実施する。</li> <li>・ クラッチを使って移動したり活動したりした後に、自己チェック表を用いて、使い方や安全面等の振り返りを行う。</li> </ul>	健(4)・身(4) 環(3)  身(1)  身(2)(4)
2学期		
3学期		

### ⑧評価

1学期	教室内の配置図を見ることで、幅が狭い個所を把握することができた。また、休み時間など周囲の安全を確認して歩行するようになった。
2学期	
3学期	

# 自立活動の指導「手順シート」

作成日 年 月 日

学年	小学1年	氏名	G (病弱・身体虚弱特別支援学級)
----	------	----	-------------------

## ①実態把握

障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所や良さ、課題、本人・保護者の願い
<ul style="list-style-type: none"> <li>・成長ホルモン分泌不全性低身長症である。家庭で毎日注射をしている。</li> <li>・固形物が食べにくいいため、一口大に切って食べるようにしている。</li> <li>・ぎこちなさは残るが、歩いたり、ゆっくり走ったりすることはできる。</li> <li>・階段では、手すりがある状態で、大人が手をつないでいれば、ゆっくり昇降できる。</li> <li>・服やズボンの前後は分かる。服のボタンを留めたり外したりすること、立ったままズボンの脱ぎ着することは難しい。身の回りのことについては、大人にやってもらおうとする気持ちが強い。</li> <li>・教師が促すと、いろいろなことに一生懸命取り組もうとする。褒められると、うれしそうにする。</li> <li>・知的な遅れはほとんどないため、体育以外の教科学習については、支援員と共に交流学級で学んでいる。</li> <li>・学校では、教師や支援員と過ごす時間が多い。友達に自分から話すことは少ないが、友達からの働き掛けに笑顔で応じる姿が見られる。</li> <li>・保護者は、保育所から続く友達と同じ場で教育を受けさせたいという強い願いがあった。本人も友達と一緒にいることを望んでいる。</li> </ul>

## ②実態把握の整理

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> <li>・成長ホルモン分泌性低身長症であるため、毎日家庭で注射をしている。</li> <li>・食事は、一口大に切ったものを食べている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身の回りのことについては、やってもらおうとする気持ちが強い。</li> <li>・教師が促すと、いろいろなことに一生懸命取り組もうとする。褒められると、うれしそうにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校では、教師や支援員と過ごす時間が多い。</li> <li>・友達に自分から話すことは少ないが、友達からの働き掛けに笑顔で応じる姿が見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知的な遅れはほとんどないため、体育以外の教科学習については、支援員と共に交流学級で学んでいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歩いたり、ゆっくり走ったりすることはできる。</li> <li>・階段の昇降は支援が必要である。</li> <li>・服のボタンを留めたり外したりすること、立ったままズボンの脱ぎ着することは難しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達に自分から話すことは少ないが、友達からの働き掛けに笑顔で応じる姿が見られる。</li> </ul>

## ③課題の抽出

<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な粗大運動の機会を設けて、四肢を力強く動かすことができるようになる。</li> <li>・立位のままの衣服や靴の着脱ができたり、衣服を丁寧に畳んだりといった、自分の身の回りのことが自分から正しくできるようになる。</li> <li>・本児のペースで活動を行い、できることを実感させて自信が持てるようになる。</li> </ul>
--

## ④中心的な課題

<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な活動に自分から取り組めるような状況づくりを行い、運動機能や手指の機能の向上と体力の向上を図る。</li> </ul>
---

### ⑤目標の設定

長期目標	立った状態で着替えをすることができる。
短期目標	1学期 椅子に座った状態で、ズボンや上着の脱ぎ着をすることができる。
	2学期 壁にもたれた状態で、ズボンや上着の脱ぎ着をすることができる。
	3学期 立った状態で、ズボンや上着の脱ぎ着をすることができる。

### ⑥指導内容の選定

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
(5) 健康状態の維持・改善に関すること	(1) 情緒の安定に関すること	(3) 自己の理解と行動の調整に関すること		(3) 日常生活に必要な基本動作に関すること	(2) 言語の受容と表出に関すること

### ⑦指導内容の設定

学期	具体的な指導内容	選択した区分・項目
1学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>自立活動を毎日1日の始めに設定して、体操服に着替えて運動する機会を設ける。トランポリンや手押し車など、教師と二人組で楽しみながら取り組めるような運動種目を取り上げる。</li> <li>着替えの際は、椅子に座って体を安定させた状態で、ズボンや上着の脱ぎ着をさせる。脱いだ衣服は、かごの中に入れ、畳んで所定の位置に置くようにする。</li> <li>運動や着替えの際、一人でできない場合は援助を求められることができるように、教師は自発的な言動を待ったり、自発的な言動を認めたりする。</li> </ul>	健(5)・心(1)・人(3) 身(3)・コ(2)  心(1)・人(3)・身(3)・コ(2)  心(1)・コ(2)
2学期		
3学期		

### ⑧評価

1学期	毎日の運動を楽しみにして、着替えをする時間が短縮された。ズボンの脱ぎ着の際は、椅子に座って着替えた。教師の身体的な支援を徐々に減らしていくことで、裏返しにならない脱ぎ方も身に付けることができた。ポロシャツのボタンの着脱は難しいため、教師に「してください」と自ら援助を求めることができた。
2学期	
3学期	

## 資料3 補助資料活用の留意事項







## 資料4 補助資料



区分一覧表 「健康の保持」

項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
(1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>□体温の調節</li> <li>□健康状態の維持・改善</li> <li>□食事や排便などの生活習慣の形成</li> <li>□衣服の調節</li> <li>□室温の調節や換気</li> <li>□感染予防のための清潔な環境の保持など健康な生活環境の形成</li> </ul>	<p>覚醒と睡眠のリズムが不規則なことが多い。また、体力が弱かったり、食事の量や時間、排泄の時刻が不規則になったりする。</p> <p>視覚障がいがあるため、昼夜の区別がつきにくいことから覚醒と睡眠のリズムが不規則になり、昼夜逆転した生活になる。</p> <p>特定の食物や衣服に強いこだわりを示す場合があり、極端な偏食になったり、季節の変化にかかわらず同じ衣服を着続けたりする。</p> <p>相手からどのようなように見られているのかを推測することが苦手なため、整髪や着衣の乱れなど身だしなみを整えることに関心が向かない。</p> <p>周囲のことに気が散りやすいことから一つ一つの行動に時間が掛かり、整理・整頓などの習慣が十分に付いていない。</p> <p>障がいが重度で重複しており、覚醒と睡眠のリズムが不規則になりがちである。</p>	<p>1日の生活状況（覚醒と睡眠のリズム、食事及び水分摂取の時間や回数・量など）や体調に関する情報（呼吸機能、体温調節機能、服薬の種類や時間、てんかん発作の有無とその状態など）を把握し、基礎的な生活のリズムが身に付くようにする。</p> <p>困難の要因を明らかにした上で、無理のない程度の課題から取り組む。生活のリズムや生活習慣の形成は、日課に即した日常生活の中で指導をする。</p> <p>困難の要因を明らかにした上で、無理のない程度の課題から取り組む。清潔や衛生を保持ことの必要性を理解できるようにし、家庭などの密接な連携の下に不衛生にならないよう日常的に心掛けられるようにする。</p> <p>困難の要因を明らかにした上で、無理のない程度の課題から取り組む。生活のリズムや生活習慣の形成は、日課に即した日常生活の中で指導をする。</p> <p>家庭と連携を図って、朝決まった時刻に起きることができるとし、日中は、身体を動かす活動や遊びを十分に行って目覚めた状態を維持したり、規則正しい食事をとったりするなど生活リズムを形成するための指導を行う。日中の活動を計画する際には、視覚や聴覚等の保有ができていなくても、教師が補助をして身体を動かすことにより、活動内容を工夫する。また、自分では身体を動かすことによって覚醒を促すことなども効果的である。</p> <p>（★「4環境の把握」「5身体動き」）</p> <p>規則正しい生活をすることの大切さを理解したり、温度に適した衣服の調節をすることや身に付けたらよい習慣を測るよう指導することや、体調がよくなることを保護者や教師と相談できるよう指導することや、自己を客観視するための健康に関する習慣について指導・就寝時刻などを記録したりして、スケジュール管理をすること、自らの体内の感覚に注目することなどを指導する。</p> <p>（★「3人間関係の形成」「4環境の把握」「6コミュニケーション」）</p>
(2) 病気の状態の理解と生活習慣に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>□病気の状態の理解と改善</li> <li>□病気の進行の理解</li> <li>□生活様式の管理</li> <li>□生活の自己管理</li> </ul>	<p>食生活や運動不足等の生活習慣と関連する2型糖尿病である。</p> <p>二分脊椎により、長時間同じ座位をとることで褥瘡（じょくそう）ができる。</p> <p>進行性の疾患がある。</p> <p>うつ病などの精神性の疾患があり、食欲の減退などの身体症状、興味や関心の低下や意欲の減退などの症状が見られるが、それらの症状が病気によるものであることを理解できない。</p> <p>口蓋裂の既往歴があり、滲出性中耳炎やむし歯などになりやすい。</p> <p>てんかん発作のなかで、短時間意識を失う小発作の場合には、発作が起きているのを本人が自覚しにくいことから、自己判断して服薬を止めてしまう。</p>	<p>自己の病気を理解し血糖値を毎日測定して、病状に応じた対応ができるようにするとともに、適切な食生活や適度の運動を行うなど主体的に生活管理を行い、病気の進行を防止するよう指導する。</p> <p>定期的に姿勢変換を行うよう指導する。</p> <p>病気を正しく理解し、日々の体調や病気の状態の変化に留意しながら、適度な運動を行い、身体機能の低下を予防するよう、生活の自己管理に留意した指導を行う。</p> <p>医師の了解を得た上で、病気の仕組みと治療方法を理解するように指導する。ストレスが症状に影響を与えること、日記を書くこと、ストレスを避ける方法や発散する方法を要因に気付いたり、小集団での話合いの中で、例えば、トレスを避ける方法や発散する方法を考えたりまする。</p> <p>日頃から聞こえの状態に留意したり、丁寧な歯磨きの習慣形成に努めたりするなどして、病気の予防や健康管理を自らで行えるようにする。</p> <p>定期的な服薬の必要性について理解させるとともに、確実に自己管理ができるよう指導する。</p>

<p>(2) 病気の状態の理解と改善 生活管理に 関すること</p>	<p>病気の状態の理解と改善 病気の進行の防止に必要な 生活様式の理解 生活の自己管理</p>	<p>治療後に起きる成長障害がいやや内分泌障がい等の晩期合併症のリスクがあることを理解して、体調の変化や感染症予防等に留意するなど、病気の予防や適当な運動や睡眠等の健康管理を自らできるようにする。</p> <p>てんかんの発作は、全身がけいれんするものなど多様であるため、身体症状だけでは分かりにくいことがある。そのために、発作が収まった場合には、専門の医師に相談する。また、定期的な服薬の必要性について理解するとともに、服薬により多くの場合は発作をコントロールできるという安心感を持たせる。</p> <p>(★「2心理的な安定」)</p> <p>コミュニケーション手段や理解の状況、生活の状況等を踏まえて、例えば、疲労を蓄積しないことや、定期的に服薬することなどを具体的に指導したり、てんかんについて分かち合ったりやすらぎのある活動や映像資料などを活用して理解を図ったり、ストレスをためることがてんかんの発作を誘発する原因となるため、情緒の安定を図るよう指導することや、てんかんの発作を忘れてしまうことなどがあるため、周囲の人の理解や協力を得ることが有効な場合があるようにする。</p> <p>(★「2心理的な安定」)</p> <p>コミュニケーション手段や理解の状況、生活の状況等を踏まえて、例えば、疲労を蓄積しないことや、定期的に服薬することなどを具体的に指導したり、てんかんについて分かち合ったりやすらぎのある活動や映像資料などを活用して理解を図ったり、ストレスをためることがてんかんの発作を誘発する原因となるため、情緒の安定を図るよう指導することや、てんかんの発作を忘れてしまうことなどがあるため、周囲の人の理解や協力を得ることが有効な場合があるようにする。</p> <p>(★「2心理的な安定」)</p>
<p>(3) 身体各部の状態の理解と改善に 関すること</p>	<p>小児がんの経験がある。</p> <p>てんかんがある。</p> <p>てんかんがあるが、他の障がいを伴っているため、生活上の留意事項を理解し守ることや定期的な服薬が難しい。</p> <p>視覚障がいがある。</p> <p>聴覚障がいがある。</p> <p>下肢切断によって義肢を装着している。</p> <p>長時間寝たきりの状態により、床ずれ等がある。</p> <p>筋萎縮等により筋力が低下し、運動機能などの各機能が低下する筋ジストロフィーである。</p>	<p>発達の段階に応じて、眼の構造や動き、自己の視力や視野などの状態について十分な理解を図る。その上で、保有する視機能を維持するため、学習中の姿勢に留意したり、危険な場面での対処方法を学んだりして、視覚管理を適切に行うことができるように指導する。</p> <p>発達の段階に応じて、耳の構造や自己の障がいについての十分な理解を図る。その上で、補聴器等を用いる際の留意点についても理解を促すなどして、自ら適切な聞こえの状態を維持できるように指導を行う。</p> <p>義肢を装着している部分を清潔に保ったり、義肢を適切に管理したりすることができるように指導する。</p> <p>患部への圧迫が続かないように、定期的な体位を交換することの必要性を理解させ、自分で行う方法を工夫したり、自分でできない場合には他の人に依頼したりできるように指導する。</p> <p>身体の状態に応じて運動の自己管理ができるように指導する。特に、心臓機能や呼吸機能の低下は命に危険を及ぼす可能性があるため、病気の原因や経過、進行の予後、適切な運動の必要性、適切な運動方法や運動量などについて学習させる。その際、治療方法や病気の進行、将来に関する不安等を持つことがあるので、情緒の安定に配慮した指導を行う。また、病気の進行に伴い、姿勢変換や移動、排泄などの際に周囲の人の支援を依頼することが必要になる場合があるため、場や状況に応じたコミュニケーション方法を身に付けて学習させる。(★「2心理的な安定」「6コミュニケーション」)</p>
<p>(4) 障がいの特性の理解と生活環境の調整に 関すること</p>	<p>吃音に関する知識を得る機会がなく、吃音状態が生じることへの不安感や恐怖感を持ち、内面の葛藤を一人で抱えている。</p> <p>感覚の過敏さやこだわりがあり、大きな音がしたり、予定通りに物事が進まなかったりすると、情緒が不安定になる。</p> <p>学習や対人関係がうまくいかないことを感じていたり、自分の長所や短所、得手不得手を客観的に認識することが難しくなったり、他者との違いから自分を否定的に捉えていたりする。</p> <p>視野の障がいがあるため、限られている学校内であっても環境の把握が十分ではない。</p>	<p>安心した場の中で、吃音について学び、吃音についてより客観的に捉えられるようにする。また、発達の段階や吃音状態の変化等に応じて、周囲の人へ「どうしてほしいのか」等を伝える方法を話し合う。</p> <p>自分から別の場所に移動したり、音量の調整や予定を説明してもらったことを他者に依頼したりするなど、自ら刺激の調整を行い、気持ちを落ち着かせることができるように指導する。</p> <p>個別指導や小集団などの指導形態を工夫しながら、対人関係に関する技能を習得するなかで、自分の特性に気づき、自分を認め、生活する上で必要な支援を求められるようにする。</p> <p>自分の見方の特徴を理解した上で、部屋に置かれた様々な物の位置などを自ら触ったり、他者から教えてもらったりしながら確認する。その際、物の位置関係を把握しやすいうように、順序よく丁寧に確認できるようにする。また、自分に分りやすいように整理した情報を決めたりしておく。さらに、必要以上に行動が消極的にならないよう、必要以上に情緒の安定を図る。</p> <p>(★「2心理的な安定」「3人間関係の形成」「4環境の把握」)</p>

<p>(4) 障がいの特性の理解と生活環境の調整に関すること</p>	<p>□ 自己の障がい特性の理解及び学習上又は生活上の困難さの理解 □ 状況に応じた、自己の行動や感情の調整及び他者に対する主体的な働きかけしやすい環境づくり</p>	<p>聴覚障がいがある。</p>	<p>どのような声や声が聞き取れないのかを自分でしっかりと理解し、時と場合によって聞き取れないことを気付けさせる。卒業後、自分の聞こえの状況や最も理解しやすいコミュニケーションの方法を自ら他者に伝え、伝えていくこと、手話や筆談など、他者とコミュニケーションを図るための様々な方法を理解し、その中で自分が分かりやすいコミュニケーションの方法を選択できるようなことである。 (★「2心理的な安定」「6コミュニケーション」)</p>
<p>(5) 健康状態の維持・改善に関すること</p>	<p>□ 運動量の減少及び体力低下の防止 □ 日常生活における適切な健康の自己管理</p>	<p>障がいが重度で重複しており、健康の状態を明確に訴えることが難しい。  たんの吸引等の医療的ケアを必要とする。  運動量が少ないことにより、肥満がみであったり体力低下を招いたりする。また、心理的な要因により不登校の状態が続き、運動量が極端に少なくなったり、食欲不振の状態になったりする。  心臓疾患があり、運動が制限されていても、その範囲を超えて身体を動かしてしまえば病気の状態を悪化させてしまう。</p>	<p>様々な場面で健康観察を行うことにより、変化しやすい健康状態を的確に把握する。その上で、例えば、乾布摩擦や軽い運動を行ったり、空気を水、太陽光線を利用して皮膚や粘膜を鍛えたりして、血行の促進や呼吸機能の向上などを図り、健康状態の維持・改善に努めるようにする。  健康状態の詳細な観察が必要であることや、指導の前後にたんの吸引等の医療的ケアが必要なこと等から、養護教諭や看護師等と十分連携を図って指導を進める。  体力低下を防ぐために、運動することへの意欲を高めながら適度な運動を取り入れたり、食生活と健康について実際の生活に即して学習したりするなど、日常生活において自己の健康管理ができるようにする。  心臓疾患の特徴、治療方法、生活管理などについて、個々の発達の段階等に応じて理解できるようにし、その健康の状態を把握し、その状態に応じて日常生活や学習活動の指導をコントロールし、生活管理や入院生活から生じるストレスなどの心理的な側面にも配慮するとともに、実施可能な運動等については学校生活管理指導表等を参考にしながら可能な限り取り組めるようにするなどの配慮を行う。 (★「2心理的な安定」)</p>

区分一覧表 「心理的な安定」

項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
(1) 情緒の安定に關すること	<p>□情緒の安定</p>	<p>心理的に緊張したり不安になったりする状態が継続し、集団に参加することが難しい。</p> <p>白血球治療の副作用による貧血や嘔吐などが長期間続くことにより、情緒が不安定な状態である。</p> <p>入院と退院を繰り返していたり、退院後も感染予防のため学校に登校できにくい状態であったりする。</p> <p>他者に自分の気持ちや適切な方法を伝えることが難しいため、自傷行為や、他者に対して不適切な関わり方をしてしまう。</p> <p>自分の行動を注意されたときに、反発して興奮しやすい。</p> <p>注意や集中を持続し、安定して学習に取り組むことが難しい。</p> <p>生活全般において自信を失っているため、自分の思う結果が得られず感情的になり、情緒が不安定になる。</p> <p>不安や緊張が高まった状態になると、チックの症状により、身体が動いてしまったり、言葉が発してしまったりする。</p> <p>障がいや重度で重複しているため、情緒が安定しているかどうかを把握することが難しい。</p> <p>障がいがあることや過去の失敗経験等により、自信をなくしたり、情緒が不安定になったりする。</p> <p>心理的に緊張しやすく、不安になりやすい傾向がある。また、身体面では、嘔吐、下痢、拒食等様々な症状があり、日々それらが繰り返されるため強いストレスを感じる。そのため、集団に参加することが難しい。</p> <p>場所や場面が変化することにより、心理的に圧迫を受けて適切な行動がでない。</p> <p>特定の場所や状況等において緊張が高まることなどにより、家庭などではほとんど支障なく会話ができるものの、特定の場所や状況では会話ができない。</p> <p>日々の日課と異なる学校行事や、急な予定の変更などに対応したらよいか分からない。</p> <p>周囲の状況に葛藤を向けることや経験したことを他の場面にも結び付けて対応することが苦手なため、人前で年齢相応に行動することが難しい。</p>	<p>環境的な要因（睡眠、生活のリズム、体調、天気、家庭生活、人間関係など）を明らかにし、情緒の安定を図る指導をするとともに、必要に応じて環境の改善を図る。</p> <p>悩みを打ち明けたり、自分の不安な気持ちを表現できるようにしたり、心理的な不安を表現できるような活動をしたりするなどして、情緒の安定を図る。</p> <p>テレビ会議システム等を活用して学習して学習に対する不安を軽減するような指導を工夫する。</p> <p>自分を落ち着かせることができる場所に移動して、慣れた別の活動に取り組むなどの経験を積み重ねながら、その興奮を静める方法を教える。また、様々な感情を素直に絵カードやメモなどを用いて自分の気持ちや伝えたいことを身に付けられるように指導する。</p> <p>自分を落ち着かせることができる場所に移動してその興奮を静めることや、一旦その場を離れて深呼吸などの方法があることを教え、それらを実際に行うことができるように指導する。</p> <p>刺激を統制した落ち着いた落ち着いた環境で、必要なことに意識を向ける経験を重ねながら、自分に合った集中の仕方や課題への取り組み方を身に付け、学習に落ち着いて参加する態度を育てていく。</p> <p>本人が得意なことを生かして課題をやり遂げるように指導し、成功したことを褒めることで自信を持たせたり、自分の長さに気付くことができるようにしたりする。</p> <p>不安や緊張が高まる原因を知り、自ら不安や緊張を和らげるようにする方法を身に付ける指導をする。</p> <p>判断の手掛かりとして「快」、「不快」の表出の状態を読み取ることが重要である。そして安定した健康状態を基盤にして「快」の感情を呼び起こし、その状態を継続できるようにするための適切な関わり方を工夫する。</p> <p>機会を見つけて自分の良さに気付くようにしたり、自信が持てるように励ましたりして、活動への意欲を促すように指導する。</p> <p>教師が病気の原因を把握した上で、本人の気持ちや理解しようとする態度で関わる。その上で、良好な人間関係作りを自指して、集団構成を工夫した小集団で、様々な活動を行ったり、十分にコミュニケーションができるようにしたりする。</p> <p>（★「3人間関係の形成」「6コミュニケーション」）</p> <p>教師と一緒に活動しながら、徐々に慣れるよう指導する。</p> <p>本人は話したくても話せない状態であることを理解し、本人が安心して参加できる集団構成や活動内容等の工夫をしたり、対話的な学習を進める際には、選択肢の提示や筆談など様々な学習方法を認めたりするなどして、情緒の安定を図りながら、他者とのやりとりができる場面を増やしていく。</p> <p>予定されているスケジュールや予想される事態や状況等を伝えたり、事前に体験できる機会を設定したりするなど、状況を理解して適切に対応したり、行動の仕方を身に付けたりするための指導をする。</p> <p>行動の仕方を短い文章にして読むようにしたり、適切な例を示したりしながら、場に応じた行動の仕方を身に付けさせていく。</p>
(2) 状況の理解と変化への対応に関すること	<p>□場所や場面の状況の理解と心理的抵抗の軽減</p> <p>□変化する状況の理解と適切な対応方法の習得</p>		



区分一覧表 「人間関係の形成」

項目		状態例	具体的指導内容例と留意点
(1) 他者との かかわりの 基礎に関す ること	項目の内容 □ 人に対する基本的な信頼感の形成 □ 他者からの働きかけを受け止め、応ずること	人に対する認識が十分に育っておらず、他者からの働きかけに反応が乏しい。  他者との関わりを持とうとするが、その方法が十分身に付いていない。  視覚障がいがあり、相手の顔が見えない、あるいは見えにくいために、他者との関わりが消極的、受動的になる。	好む関わりを繰り返し、関わる者の存在に気付かせる。  指導担当を決め、安定した関係を形成する。やりとりの方法を大きく変えず繰り返し指導し、相互に関わり合う基盤を作ったあと、やりとりの方法を増やす。言葉だけでなく、具体的物や視覚的な情報を加える。  自分の顔を相手に見せたり、相手との距離を意識して声の大きさを調整したりするなどのコミュニケーションを図るための基本的な指導を行う。また、その場の状況の変化が分からない場合は、必要に応じて、友達や周りにいる人に問い掛けるなど、積極的に他者と関わろうとすることを指導する。(★「12.心理的な安定」「6.コミュニケーション」)
	□ 他者の意図や感情の理解 □ 場に応じた適切な行動の形成	言葉や表情、身振りなどを総合的に判断して相手の思いや感情を読み取り、それに応じた行動することが難しい。  言葉が字義通りに受け止めてしまい、相手の真意を読み取れない。  視覚障がいがあり、相手の表情を視覚的に捉えることが困難なため、相手の意図や感情の変化を読み取ることが難しい。  聴覚障がいがあり、聴覚的な情報を入手しにくいことから、視覚的な手がかりだけで判断したり、会話による情報が円滑でないために自己中心的に捉えたりしやすい。  一人で入院しており、病気や治療の不安を一人で抱え込んだり、家族から離れて過ごすことなどに孤独を感じたり、逆に頼りに心配させないよう強がったことがある。このような自己矛盾を抱える中で、周囲の人へ攻撃的な行動や言葉を表出する。	生活の様々な場面を想定し、相手の言葉や表情などから、立場や考えを推測するよう指導を通して、相手と関わる具体的な方法を身に付けさせる。  聴覚的な手がかりである相手の声の抑揚や調子の変化などを的確に聞き分けることができるよう指導する。  状況の推移を振り返りながら、出来事の流れについて総合的に判断する経験を積ませる。その際、臆言活用や談話等の多様なコミュニケーション手段を場面や相手に応じて選択し、的確に会話の内容を把握することができるようになる。(★「2.心理的な安定」「4.環境の把握」「6.コミュニケーション」)  小集団での話し合い活動や遊び等の取組を通して、不安な気持ちや表現したり、他者に意見を聞いたりして協調性を養うよう指導する。(★「2.心理的な安定」「6.コミュニケーション」)
(3) 自己の理 解と行動の 調整に関す ること	□ 自分の得意なことや不得意なこととの理解 □ 自分の行動の特徴の理解 □ 集団の中の状況に応じた行動の形成	失敗経験等の積み重ねにより、自分に自信が持てず、行動することのために 自らがちになる。  経験が乏しく、自分の能力を十分理解できていない。  同じ失敗を繰り返し返したり、目的に沿って行動を調整することが苦手だったりする。  自己に肯定的な感情を持つことができず、活動が消極的になったり、自暴自棄になったりする。  自分の長所や短所に関心が向きにくいなど、自己の理解が難しいことや、「他者が自分をどう見ているか」、「どうしてそのような見方をするのか」など、他者の意図や感情の理解が十分でないことから、友達や周囲の人に対して適切に応じることができない。  特定の光や音などにより混乱し、行動の調整が難しくなる。	容易にできる活動を設定し成就感を味わわせ、徐々に自信を回復しながら自己に肯定的な感情を高めさせる。  自分でできること、補助的な手段を活用してできること、他の人に依頼して手伝ってもらうことなどについて、実際の体験を通して理解を促す。  因果関係を図示して理解させたり、実現可能な自当での立て方や振り返りの仕方を学んだりと、自ら適切な行動を選択し調整する力を育てていく。  早期から成就感を味わわせるような活動を設定するとともに、自己を肯定的に捉えられるよう指導する。  体験的な活動を通して自分の得意なことや不得意なこと、の理解を促したり、他者の意図や感情を考え、それへの対応方法を身に付けたりする指導を関連付けて行う。(★「4.環境の把握」)
			光や音などの刺激の量を調整したり、避けたたりするなど、感覚や認知の特性への対応に関する内容も関連付けて具体的な指導内容を設定する。(★「4.環境の把握」)

<p>(4) 集団への参加の基礎と</p>	<p><input type="checkbox"/> 集団の雰囲気に合わせてと  <input type="checkbox"/> 集団に参加するための手順やきまりの理解  <input type="checkbox"/> 遊びや集団活動への積極的な参加</p>	<p>視覚障がいにより、目で見ればすぐに分かるようなゲームのルールが捉えにくく、集団の中に入っていない。          会話の情報を的確に把握できにくいため、ルールや常識の理解、それに基づいた行動が難しい。          言葉の意味理解の不足や間違いなどから、友達との会話の背景や経過を類推することが難しく、集団に積極的に参加できない。          遊びの説明を聞き漏らしたり、最後まで聞かずに遊び始めたりするためにルールを十分に理解しないで遊ぶ場合がある。また、勝ちたいという気持ちから、ルールを守ることができない。その結果、うまく遊びに参加することができない。</p>	<p>あらかじめ集団活動に参加するための手順や決まり、必要な情報を得るための質問の仕方を指導して、積極的に参加できるようにする。          会話の背景を想像したり、実際の場面を活用したりして、行動の仕方や相手の受け止め方などについて、具体的にやりとりを通して指導する。          日常的によく使われる言い回しや分からないときの尋ね方などを、あらかじめ小集団で指導する。          ルールを少しずつ段階的に理解できるように指導したり、ロールプレイによって適切な行動を具体的に指導したりする。また、遊びへの参加方法が分からないうちの不安を静める方法や友達への尋ね方の練習をさせる。          (★「1.2.心理的な安定」「6.コミュニケーション」)</p>
-----------------------	--	---	--

区分一覧表 「環境の把握」

項目	状態例	具体的指導内容例と留意点
(1) 保有する感覚の活用に関すること	<p>弱視である。</p> <p>聴覚障がいがあり、裸耳では学習や日常生活に必要な情報を収集することが難しい。</p> <p>肢体不自由により、運動・動作に伴う筋の収縮・伸張、関節の屈曲・伸展などに制限や偏りがあり、自分自身の体位や動きを把握し、調整することが難しい。</p> <p>障がいが重度で重複しているため、周囲の情報を得たり、自分自身の身体の動きを調整したりすることが難しい。</p> <p>視覚や聴覚への働き掛けに対して明確な応答が見られない。</p>	<p>保有する視覚を最大限に活用するとともに、その他の感覚も十分に活用して、学習や日常生活に必要な情報を収集するための指導をする。</p> <p>補聴器等の装用により、保有する聴力を十分に活用していく。場所や場面に応じて、磁気ループを用いた集団補聴システム、FM電波や赤外線を用いた集団補聴システム又はFM補聴器等の機器の特徴に応じた活用ができるようにする。</p> <p>自分自身の体位や動きについて、視覚的なイメージを提示する力が身に付けやすい言葉で伝えたりして、自分の身体を正しく調整することができるようにする。</p> <p>視覚、聴覚、触覚と併せて、姿勢の変化や筋、関節の動きなどを感じ取る固有感覚や前庭覚を活用できるようにすることを考慮する。その際、それらを個々の感覚ごとに捉えるだけでなく、相互に関連付けて捉えることができるようにする。</p> <p>教師が抱えて釋らすなどして、触覚や聴覚への感覚への働き掛けに加えて、玩具を見せたり言葉掛けをしながらして視覚や聴覚の活用を促す。適度な揺さぶりの中で視覚や聴覚に対する働き掛けも心地よく受け止められるようになつたら、目の前に音の出る玩具などを示し、音を聞きながら目で玩具を過ったり、音を聞いていくなど、細かな動きや働き掛けをしながら、視覚と聴覚を協調させていくなど、細かな動きや働き掛けと聴覚を協調させたり、視覚と手の運動を協調させたりする指導を行う。</p> <p>(★「5身体の動き」「6コミュニケーション」)</p> <p>遮光眼鏡を装着するよう指導するとともに、その習慣化を図る。また、室内において見えやすい明るさを必要に応じて他者に伝えたり、カーテンで明るさを調整したりできるように指導する。</p> <p>不快である音や感觸などを自ら避けたり、状態に応じて音が発生する理由や身体接觸の意図を知らせるなどして、それらに少しずつ慣れていくよう指導する。</p> <p>自己刺激のための活動と同じような感覚が得られる他の適切な活動に置き換えるなどして、興味が広がるよう指導をする。</p> <p>注目すべき箇所を色分けしたり、手で触れるなど他の感覚も使ったりすることで注目しやすくしながら、注意を持続させることができることを実感し、自分に合った注意集める方法を積極的に使用できるようにする。</p> <p>一人一人の認知の特性に応じた指導方法を工夫し、不得意なことを少しずつ改善できるように指導するとともに、得意な方法を積極的に活用するよう指導する。</p> <p>一つの文字や図形だけを取り出し出して輪郭を協調して見やすくしたり、文字の部首や図形の特徴を話し言葉で説明したりする。また、学習活動を通じて、自分の得意な学習のスタイルを知り、自ら使えるように指導する。</p> <p>コンピュータ等を活用して書くことを補助することによって、学習を効果的に進めるようにする。</p>
(2) 感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること	<p>視覚障がいがあり、障がいの特性により屋外だけでなく屋内においても蛍光灯などにまぶしさを強く感じる。</p> <p>聴覚の過敏さのため特定の音に、また、聴覚の過敏さのため身体接觸や衣服の材質に強く不快感を抱く。それらの刺激が強すぎたり、突然であったりすると、感情が急激に変化したり、思考が混乱したりする。</p> <p>不足する感覚を補うため、自己刺激を過剰に得ようとする。</p> <p>注意機能の特性により、注目すべき箇所が分からない、注意持続時間が短い、注目する対象が変動しやすいなどから、学習等に支障をきたす。</p> <p>言葉や教の学習で困難を示し、認知面において不得意なことがある一方、得意な方法を持つている。</p> <p>個性まひがあり、文字や図形を正しく捉えることが難しい。</p> <p>上肢にまひがあり、文字や図形を書くことが難しい。</p> <p>体の動かし方にぎこちなさがあり、リコーダーを吹くなどの指先を細かく動かす活動や水泳などの全身を協調して動かす運動を苦手としている。</p>	<p>自分に入ってくる情報の適切な処理</p> <p>自己の感覚の過敏さや認知の偏りなどの特性理解と、適切な対応</p> <p>遮光眼鏡を装着するよう指導するとともに、その習慣化を図る。また、室内において見えやすい明るさを必要に応じて他者に伝えたり、カーテンで明るさを調整したりできるように指導する。</p> <p>不快である音や感觸などを自ら避けたり、状態に応じて音が発生する理由や身体接觸の意図を知らせるなどして、それらに少しずつ慣れていくよう指導する。</p> <p>自己刺激のための活動と同じような感覚が得られる他の適切な活動に置き換えるなどして、興味が広がるよう指導をする。</p> <p>注目すべき箇所を色分けしたり、手で触れるなど他の感覚も使ったりすることで注目しやすくしながら、注意を持続させることができることを実感し、自分に合った注意集める方法を積極的に使用できるようにする。</p> <p>一人一人の認知の特性に応じた指導方法を工夫し、不得意なことを少しずつ改善できるように指導するとともに、得意な方法を積極的に活用するよう指導する。</p> <p>一つの文字や図形だけを取り出し出して輪郭を協調して見やすくしたり、文字の部首や図形の特徴を話し言葉で説明したりする。また、学習活動を通じて、自分の得意な学習のスタイルを知り、自ら使えるように指導する。</p> <p>コンピュータ等を活用して書くことを補助することによって、学習を効果的に進めるようにする。</p> <p>固有感覚や前庭覚の発達段階等を把握した上で、現在できている動作がより確実にできるような取り組むとともに、指や身体を、一つ一つ確かめながらゆっくり動かすように練習する。発達段階に見合った運動を行うようにする。また、「できた」という経験と自信を持てるようにし、自己を肯定的に捉えることができるようになるようにする。</p> <p>(★「2心理的な安定」「3人間関係の形成」「5身体の動き」)</p>

<p>(3) 感覚の補助及び代行手段の活用について</p>	<p>□ 保有する感覚を用いて状況を把握しやすくなるために、各種の補助機器の活用 □ 他の感覚や機器での代行</p>	<p>視覚障がいがあり、小さな文字など細かな物や遠くの物を読み取ることが難しい。 聴覚障がいがあり、補聴器や人工内耳を装着している。 聴覚に過敏さが見られ、子どもの泣き声など、特定の音を嫌がる。 聴覚に過敏さが見られ、必要な音を聞き分けようとしても、周囲の音が重なり聞き分けづらい。 弱視のため、遠くの文字が見えにくかったり、本などを読むのに時間が掛かったりするが、読書期になると、周囲の人から買られることを気にして弱視レンズの使用をためらうことがある。</p>	<p>遠く・近用などの各種の弱視レンズや拡大読書器などの視覚補助具、タブレット型端末などを効果的に活用できるように指導する。また、明るさの変化に応じて活用できる感光器のように、視覚以外の感覚で確認できる機器を必要に応じて活用できるように指導する。 補聴器等を装着しているも、音や他者の話を完全に聞き取れるわけではないため、聴覚活用に加えて、視覚を通して情報収集（手話や指文字、キュード・スピーカー、口形、読話など）の特徴や機能を利用して活用できるようにする。 自分で苦手な音などを知らせたり、音量を調節する器具を利用したり、イヤーマフやイヤークロージャーなどの音を遮断する器具を利用したりする理由や仕組みなどを理解し、徐々に受け入れられるように指導していく。</p>
<p>(4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること</p>	<p>□ いろいろな感覚器官やその補助及び代行手段の総合的な活用 □ 情報収集や環境状況の把握による、的確な判断や行動の形成</p>	<p>視覚障がいがあり、他の感覚器官から情報を得て、活動している。 聴覚障がいがあり、補聴器等を通して得られた情報だけでは、周囲の状況やその変化を十分に把握することが難しい。 自分の身体に対する意識や概念が十分に育っていないため、物や人にぶつかったり、簡単な動作をまねることが難しくなったりする。 視知覚のみによって文字を認識してから書こうとすると、目と手の協応動作が難しく、意図している文字がうまく書けない。 聴覚障がいがあることにより、背後や外の様子等、周囲の状況を的確に把握できにくいことや、周囲の人とのコミュニケーションの不十分さなどの影響で、物事がどのように推移してきたか、相手がどう思っているか、これから何が始まるかなどについて、予想できにくい。 動く対象物に手を伸ばしてそれをつかむなどといった、目と手を協働させた活動が難しい。</p>	<p>低学年から各種の弱視レンズなどを使用してよく見える体験を繰り返すとともに、障がいへの理解を図り、障がいによる困難な状態を改善・克服する意欲を喚起する指導を行う。（★「2心理的な安定」） 様々な感覚を通して得られる情報を総合的に活用して周囲の状況を把握し、それに基づいて自分分のいる場所や進むべき方向などを的確に判断し行動できるように指導する。中学生・高校生の場合は、必要に応じて、携帯電話のナビゲーション機能などを利用して自分の位置と周囲の状況を把握させる。 身の周りの音を聞き取り、様子や言葉を理解する場合には、視覚や嗅覚などの感覚も総合的に活用する指導が必要である。その際には、情報を的確に収集するとともに、様々な感覚をいかに活用するかについても考えさせる。 粗大運動や微細運動を通して、全身及び身体の各部位を意識して動かしたり、身体の高めながら、自分の身体が基点となつて位置、方向、遠近の概念の形成につなげられるように指導する。 腕を大きく動かして文字の形をなぞるなど、様々な感覚を使って多面的に文字を認識し、自らの動きを具体的に想像してから文字を書くことができるよう指導をする。</p>

視覚や嗅覚等の様々な感覚を活用して情報を収集したり、多様な手段を活用した積極的なコミュニケーションを通して相手を理解したりするとともに、それまでに得ている情報を照らし合わせて合わせたりしながら、周囲の状況や人の気持ちは、今後の展開等を推察できるようにする。（★「3人間関係の形成」「6コミュニケーション」）  
頭部を安定させるための補助具を活用したり、前腕で上体を支えやすくなる姿勢の保持や未だたたりするなどのために、目の前に置かれた興味のある玩具を注視したり、ゆっくりに動く教材などを追視したりして、その力を高めていく。また、見ていた対象物に手を伸ばし、力を付けて倒したり転がったりする中で、物を操作する経験を重ね、目で手の動きを追うよう



区分一覧表 「身体の動き」

項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
(1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 日常生活に必要な動作の基となる姿勢保持</li> <li>□ 上肢・下肢の運動・動作の改善及び習得</li> <li>□ 関節の拘縮や変形の予防</li> <li>□ 筋力の維持・強化</li> </ul>	<p>肢体不自由があり、基本動作が未習得であったり、間違っって身に付けてしまったりしているために、生活動作や作業動作を十分に行うことができない。</p> <p>身体の部位を適切に動かしたり、指示を聞いて姿勢を変えたりすることが難しい。</p> <p>視覚障がいがあり、身体の動き等を模倣することを通して基本的な運動・動作を習得することが難しい。</p> <p>身体を常に動かしている傾向があり、自分でも気付かない間に座位や立位が大きく崩れ、活動を継続できなくなってしまう。</p> <p>日常生活動作や作業動作の遂行を補うため、補助用具を必要とする。</p> <p>車椅子の使用が度重なることにより、立位を保持する能力が低下する。</p> <p>座位を保持することが難しい。</p> <p>上肢を十分に動かすことができない。</p> <p>運動・動作が極めて困難であり、日常生活に必要な基本動作のほとんどで援助を受けている。</p> <p>衣服の着脱におけるボタンの着脱やはさみなどの道具の操作などが難しい。</p> <p>鉛筆の握り方がぎこちなく過度に力が入りすぎたり、手や指先を用いる細かい動きのコントロールが苦手である。さらに、うまく取り組めないことにより焦りや不安が生じて、余計に書字が乱れてしまう。</p> <p>視覚障がいがある。</p>	<p>全身又は身体各部位の緊張が強すぎたり、弱すぎたり、弱すぎざる場合は、過度な緊張状態をつくりだしたりするなど、個々の運動・動作の状態に即した指導を行う。</p> <p>より基本的な動きの指導から始め、徐々に複雑な動きを指導する。そして、次第に、目的の動きに近づけていくことにより、必要な運動・動作が確実に身に付くよう指導する。</p> <p>姿勢や身体の動きについて、教師の身体や模型などに直接触らせて確認させた後、自分の身体を実際に使って、その姿勢や動きを繰り返して学習させるとともに、その都度教師が、口頭で説明したり、手を添えたりするなどして、正しい姿勢の保持や運動・動作を習得できるように指導する。</p> <p>身体を動かすことに関する指導だけでなく、姿勢を整えやすくなるような補助用具を使用することや、姿勢保持のチェックポイントを自分で確認できるような指導を行う。 (★「2心理的な安定」「4環境の把握」)</p> <p>目的や用途に応じて適切な用具を選び、十分にこなせるように指導する。また、発達の段階を考慮しながら、補助用具のセットや収納の仕方を身に付けたり、自分に合うよう補助用具を調整したりすることを指導する。</p> <p>補助用具の使用の仕方を工夫し、身体の動きの維持や習得を妨げないように十分留意する。</p> <p>座位をとることが可能ならば、骨盤を安定させるための装置や体幹を支えるためのベルトなどが付いた椅子を活用する。併せて、自分で頭を上げたり身体を起こした状態を維持するために、積極的に肩よろうとしたり触ろうとする必要がある。 (★「4環境の把握」)</p> <p>安定した座位を確保しながら、両腕を体の前へ伸ばす、身体の正面で両手を合わせる、指を握ったり開いたりする、手の動きを目で追う等の指導をする。</p> <p>援助を受けやすい姿勢や手足の動かし方を身に付けることを目標として、指導を行う。</p> <p>興味や関心が持てる内容や課題を工夫し、使いやすいつ適切な道具や素材に配慮する。その上で、課題の難易度を考慮しながら、例えば、衣服の着脱では、ボタンはめの前にボタンを外しから取り組むことや、ボタンの大きさを徐々に小さくすること、はさみを使用する際には、切る長さを徐々に長くしたり、直線から曲線など切る形を変えたりするなど、日常生活に必要な基本動作をスムーズに習得できるように指導していく。 (★「4環境の把握」)</p> <p>本人の使いやすい形や重さの筆記用具や滑り止め付き定規等を用いることにより、安心して取り組めるように入力等で記録することや、自分の苦手な部分を申し出て、コンピュータによるキーボード入力等で記録することや、黒板を写真に撮ること等、ICT機器を用いて書字の代替を行えるよう指導する。 (★「2心理的な安定」「4環境の把握」)</p> <p>発達の段階に応じて、広い歩行やガイド歩行、基本的な白杖の操作技術、他者に援助を依頼する方法などを身に付けて安全に目的地まで行けるよう指導する。白杖を用いた歩行の際には、保つる視覚を十分に活用したり、視覚補助具を適切に使ったりできる力を付けさせる。</p>
(2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用と	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 様々な補助用具等の補助的手段の活用</li> </ul>		
(3) 日常生活に必要な基本動作に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 身辺処理動作の習得</li> <li>□ 書字、描写等々の学習のための動作の習得</li> </ul>		
(4) 身体の移動能力に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 自力での身体移動や歩行</li> <li>□ 歩行器や車椅子による移動</li> </ul>		

<p>(4) 身体の移動能力に関すること</p>	<p><input type="checkbox"/> 自力での身体移動や歩行 <input type="checkbox"/> 歩行器や車椅子による移動</p>	<p>筋力が弱く、歩行に必要な緊張が得られない。</p> <p>歩行が難しい。</p> <p>心臓疾患があり、心臓への負担が掛かることから歩行による移動が制限され、必要に応じて歩行器や電動車椅子等の補助的手段を活用している。</p> <p>寝返りや腹這いが難しい。</p> <p>学校外での移動や、交通機関の利用の際に、一人での移動が難しい。</p> <p>車椅子を利用して、一人で外出することがある。</p>	<p>歩行器を用いた歩行を目標に掲げるなど、日常生活に役立つ移動能力を習得するよう指導する。</p> <p>車椅子による移動を目標に掲げるなど、日常生活に役立つ移動能力を習得するよう指導する。</p> <p>医師の指導を踏まえ、病気の状態や移動距離、活動内容によって適切な移動手段を選択し、心臓に過度の負担を掛けることなく移動の範囲が維持できるよう指導する。</p> <p>寝返りや腹這いによる移動だけでなく、それらも含めた基本動作すべての改善及び習得を目指す。姿勢保持や上下肢の基本動作などの指導経過を踏まえて適した移動の方法を選択し、指導する。</p> <p>左記のような社会的な場面における移動能力を総合的に把握し、実際の場面で有効に生かされるよう指導する。例えば、駅など危険が予想される場所を歩く場合に、ためらわずに駅員や周囲の人に援助を依頼することなど、安全が確保できる方法を十分に理解させ、身に付けさせておく。</p> <p>車椅子の操作に慣れるとともに、目的地まで車椅子を操作し続けるための体力を付けさせる。それに加えて、目的地までの距離や段差の状況などを調べ、自分の車椅子を操作する力を考慮して一人で行けるかどうかを判断し、一人で歩くことが難しい場合には、援助者を探して依頼することが必要となる。また、途中で通行人に道を尋ねたり、路上にある障害物を取り除いたりするもたらったりすることなども考えられる。そのため、周囲にいる人に質問したり、依頼したりするコミュニケーションについても指導する。 (★「4環境の把握」「6コミュニケーション」)</p>
<p>(5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること</p>	<p><input type="checkbox"/> 作業に必要な基本動作の習得 <input type="checkbox"/> 巧緻性や持続性の向上 <input type="checkbox"/> 作業を円滑に遂行する能力の向上</p>	<p>左右を協調させた上肢操作のぎこちなさのため、ひもをつまんだり、交差させたりしてひもを結ぶことが難しい。</p> <p>目と手の協応動作や指先の細かい動き、体を思った通りに動かすことなどがうまくいかないことから、身の回りの片付けや整理整頓等を最後まで遂行することが苦手である。</p> <p>手足を協調させて動かすことや微細な運動をすることに難しさがある。</p> <p>自分のやり方にとこだわったり、手足を協調させてスムーズに動かすことが難しかったりすることが多い。さらに、他者の意図を適切に理解することが難しかったり、興味のある一つの情報だけに注意が集中してしまったりしたら、教師が示す手本を自ら模倣しようとする意識が持てない。</p> <p>粗大な運動・動作には問題は見られないものの、細かい手先を使った作業の遂行が難しかったり、その持続が難しかったりする。</p>	<p>指の曲げ伸ばしをしたり、指を対向させたりするような物を介さない基本的な動きを取り入れられるとともに、必要に応じて片方のひもを押さえておく補助具の活用を促す。</p> <p>身体をリラックスさせる運動やボディイメージを育てる運動に取り組みながら、身の回りの生活動作に習熟できるようにする。</p> <p>目的に即して意図的に身体を動かすことを指導したり、手足の簡単な動きから始めて段階的に高度な動きを指導したりする。手指の巧緻性を高めるためには、興味や関心を保持していることを生かしながら、道具等を使って手指を動かす体験の積み重ねを行う。</p> <p>一つの作業について、いろいろな方法を体験させるなどして、作業のやり方へのこだわりを和らげたり、教師との良好な人間関係を形成し、主体的に指導者の示す手本を模倣しようとする気持ちを育てたりする。 (★「2心理的な安定」「3人間関係の形成」)</p> <p>手遊びやピーズなどを仕分けの活動、ひもにピーズを通す活動など、両手や目と手の協応動作などができるように指導する。その際、単に訓練的な活動とならないよう、興味や関心の持てる内容や課題を工夫し、楽しんで取り組めるようにしたり、物を作ることを通して、他者から認められるようにしたりするなど、意図的に取り組めるようにする。(★「4環境の把握」)</p>

区分一覧表 「コミュニケーション」

		具体的指導内容例と留意点	
項目	項目の内容	状態例	
(1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること	□表情や身振り、各種の機器を用いた意思のやりとり	障がいが重度で重複している。  聴覚障がいがあるため、相手の表情を見たり、身振りを交えて伝えたりする。  興味のある物を手にしたいという欲求が勝り、所有者のことを確認しないうちままに、他者の物を使ったり、他者が使っている物を無理に手に入れようとしたりする。  他の人の手を取って、その人に自分が欲しい物を取ってもらおうとする。  語彙が少ないため自分の考えや気持ちや意図を言葉にできないことや相手の質問に的確に答えられない。  自分の気持ちや要求を適切に相手に伝えられなかったり、相手の意図が理解できなかつたりしてコミュニケーションが成立しにくい。  発声や身体の動きによって気持ちや要求を表すことができるが、発声や指差し、身振りやしぐさなどをコミュニケーション手段として適切に活用できない。	話し言葉によるコミュニケーションにこだわらず、本人にとっても可能な手段を講じて、より円滑なコミュニケーションを図る。周囲の者は、表情やしぐさなどを細かく観察することにより、その意図を理解する。双方向のコミュニケーションが成立することを目指して、それに必要な基礎的能力を育てる。  相手を注視する態度や構えを身に付けたり、あるいは自然な身振りで表現したりし声を出したりして、相手と関わるようにすることができる。コミュニケーションを行うための基礎的能力を身に付けさせる。  左記の行動が意思の表出や要求を伝達しようとした行為であることを理解するとともに、より望ましい方法で意思や要求を伝えることができるよう指導する。  興味・関心に応じた教材を活用し、語彙を増やしたり、言葉のやりとりを楽しませる。  自分の気持ちや要求を表現する手段を交えたり、簡単なジェスチャーや絵カードを使ったり、人のやりとりや人と協力して遂行するゲームなどをしたりして、認知発達や社会性の育成を促す学習などを通して、自分の意図を伝えたり、相手の意図を理解したりして適切な関わりができるよう指導する。  欲しい物を要求する場面などで、かざわしい身振りなどを指導したり、発声を要求の表現と異なるよう意味付けたりするなど、様々な行動をコミュニケーション手段として活用できるように指導する。(★「3人間関係の形成」「5身体の動き」)  興味や関心のある活動の中で、教師の言葉掛けに対して視線を合わせたり、楽しんでいる場面に教師が「楽しいね」、「うれしいね」などを感じさせながら、他者との相互的なやりとりややりとりをすることや通し合う楽しさを感ぜさせながら、他者との相互的なやりとりの基礎的能力を高める指導をする。また、個々の実態を踏まえ、無理なく活用できるカードやメモ、機器などを活用する際には、個々の実態を踏まえ、無理なく活用できるように工夫する。(★「3人間関係の形成」「5身体の動き」)
(2) 言語の受容と表出に関すること	□話し言葉や各種の文字・記号等を用いた言語の受容・表出	他の人への関心が乏しく、結果として他の人からの動き掛けを受け入れることが難しい。  脳性まひで、言語障がいや発音が難しい、意思の表出が短く短い短い言葉が伝わるのに相応な時間が掛かっていたりする。  聴覚障がいがあるため、相手へ自分の意図を適切に伝えることが難しい。  発声・発語器官(口腔器官)の微細な動きやそれを調整することが難しいかあったり、音韻意識の未熟さがあったりするため、正しい発音にならないことがある。	発語機能の改善を図るとともに、文字の使用や補助的手段の活用を検討して意思の表出を促す。  音声だけでなく身振りを状況に応じて活用し、さらに、手話・指文字や文字等を活用して、主体的に自分の意思を表出できるような機会を設ける。  構音運動を調整する力を高めたり、音韻意識を育て、音の弁別や自分の発音をフィードバックできるようにしたりして、正しい発音を定着させる。

<p>(2) 言語の受容と表出に 関すること</p>	<p>□話し言葉や各種の文字・記号等を用いた言語の受容・表出</p>	<p>他者の意図を理解したり、自分の考えを相手に正しく伝えたりすることが難しい。</p>	<p>話し人を見たり、話を聞く態度を形成したりするなどの関わりやコミュニケーションの基礎に関する指導を行う。その上で、正確に他者とやりとりするために、絵や写真などの視覚的な手掛かりを活用しながら相手の話を聞くことや、メモ帳やタブレット端末等を活用して自分の話したいことを相手に伝えることができるようになる。また、相手の言葉や表情などから相手の意図を推測することができるようにする。 (★「2心理的な安定」「3人間関係の形成」)</p> <p>教師との個別的な場面や安心でできる小集団の活動の中で、相手の話を受けてやりとりしたりする経験を重ねられるようにしたり、ゲームなどを通して適切な言葉を繰り返すようにしていき、また、気持ちよく、楽しんでいることを高めることと会話するときのルールやマナーを明確にして理解させること、会話中に相手の表情を気に掛けることなどを指導する。 (★「2心理的な安定」「4環境の把握」)</p>
<p>(3) 言語の形成と活用に関すること</p>	<p>□事象や現象、自己の行動等に対応した言語の概念の形成 □体系的な言語の習得</p>	<p>話し言葉を用いることができず、限られた音声しか出せない。  聴覚障がいのため、体験したことと日本語とを結び付けることが難しい。  聴覚障がいがあり、「何を書くか(内容)」と「どのように書くか(日本語表現)」の両方を考える負担が掛かり、なかなか文章を書き進めることができない。  語彙が少ないため自分の考えや気持ちを的確に言葉に言葉にできないことや相手の質問に的確に答えられない。  精算を活用した学習が困難なため、一面的な理解で、事物、事象や動作と言葉が結び付かない。  言葉は知っているものの、その意味を十分に理解せずに活用したり、意味を十分に理解していないことから活用できなくなったりするため、思いや考えを正確に伝える語彙が少ない。  言語発達に遅れがあり、コミュニケーションを円滑に行うことが難しい。</p>	<p>掛け声や擬音・擬声語等を遊びや学習、生活の中に取り入れて、自発的な発声・発語を促すようにする。また、ときには、物語や絵本を身振りなどを使って読み聞かせる。  体験した出来事を文章(5W1H)で表現するときに、まず手話で体験した出来事を表現させ、その内容を日本語に置き換えながら文章を書くなど、手話を活用した日本語の指導をする。  手話を活用することにより「何を書くか」を決めさせた後、「どのように書くか」に専念して書かせる。また、写真や絵などを見て分かったことや考えたことを学級で話し合い、それを文章で表現させる。  興味・関心に応じた教材を活用し、語彙を増やしたり、言葉のやりとりを楽しんだりさせる。  実際に体験ができるような教材・教具を工夫したり、触覚や聴覚、あるいは保つる視覚を適切に活用したりして、言葉の意味を正しく理解し、活用できるように指導する。  実体験、写真や絵と言葉の意味を結び付けながら理解することや、ICT機器等を活用し、見る力や聞く力を活用しながら言語の概念を形成するように指導する。  教師との安心でできる言葉遊びを行ったり、作業や体験的な活動を取り入れたりする。また、語彙の習得や上位概念、属性、関連語等の言語概念の形成には、生活経験を通して、様々な事物を関連付けながら言語化を行う。そのため、課題の設定を工夫して「できた」という経験を重ね自信を持たせ、コミュニケーションに対する意欲を高め、生活の中で生かせるように言葉での表現を引き出していく。 (★「2心理的な安定」「3人間関係の形成」)</p>
<p>(4) コミュニケーションの選択と活用に関すること</p>	<p>□話し言葉や各種の文字・記号、機器等のコミュニケーション手段の適切な選択・活用 □円滑なコミュニケーション</p>	<p>音声言語の表出は困難であるが、文字言語の理解ができる。  音声言語による表出が難しく、上肢の運動・動作にも困難が見られる。  視覚障がいにより点字を常用して学習する。  弱視があるため、コンピュータの拡大機能を使用している。</p>	<p>筆談で相手に自分の意思を伝えたり、文字板、ボタンを押すと音声が出る機器、コンピュータ等を使って、自分の意思を表出したりすることができるように指導する。  下肢や舌、顎の先端等でボタンを押すと音声が出る機器やコンピュータ等を操作できるように工夫する。  キーボードでの入力や点字ディスプレイへの出力に慣れ、点字と普通の文字を相互変換したり、コンピュータの読み上げ機能を使って文書処理をしたりするなど、コンピュータを操作する技能の習得を図る。さらには、点字携帯情報端末を、学習や生活の様々な場面で活用するよう指導する。  自分にとって学習効果の良い文字サイズを知り、拡大文字の資料を必要とする場合などに、コンピュータの拡大機能などを使って、文字サイズ、行間、コントラスト等を調整し読みやすい資料を作成できるように指導する。</p>

<p>(4) コミュニケーションの選択と活用に関すること</p>	<p>□話し言葉や各種の文字・記号、機器等のコミュニケーション手段の適切な選択・活用 □円滑なコミュニケーション</p>	<p>進行性の眼疾患等で普通の文字を使用した学習が難しい。 聴覚障がいがあり、手話や指文字を使用している。 視覚と聴覚の両方に障がいがあるため、コミュニケーションが難しい。 対人関係における緊張や記憶の保持などの困難さを有し、適切に意思を伝えることが難しい。 肢体不自由があり、上肢操作の制限から、文字を書いたりキーボードで入力したりすることが難しい。 進行性の病気の症状が進行して言葉による表出が難しい。 言葉でのコミュニケーションが難しい。 順を追って説明することが困難であるため、聞き手に分かりやすい表現をすることができない。 読み書きの困難により、文章の理解や表現に非常に時間が掛かる。 聴覚障がいがあり、相手や状況に応じたコミュニケーション手段の適切な選択・活用が難しい。</p>	<p>適切な時期に使用文字を点字を切り替える等、学習効率を考えた文字選択の配慮を行う。 音声や手話、指文字、キーボード・スピーチ等を使用して、相手に伝わりやすい手段や伝え方を考える機会を設ける。 保有する視覚と聴覚の活用、触覚を活用したコミュニケーション手段が考えられる。触覚を活用したコミュニケーション手段として、身振りがあがる、障がいの状態や発達段階等を考慮して、適切なコミュニケーション手段の選択・活用に努める。 タブレット型端末に入れた写真や手帳表などの情報を手掛かりとすることや、音声出力や文字・写真など、代替手段を選択して活用したコミュニケーションができるようにしていく。 画面を一定時間見ると自動的に頭部を保持しながら、文字盤の中から自分が伝えたい文字を見ることが入力のできるコンピュータ等々の情報機器を活用し、他者に伝える成功体験の積み重ねを行う。 今後の進行状況を見極め、今までできていたことができなくなることによる自己肯定感（自己を肯定的に捉える感情）の低下への心のケアに留意するとともに、コミュニケーション手段を本人と一緒に考え、自己選択・自己決定の機会を確保しながらコミュニケーション手段を活用する力を獲得していきける。 自分の意思を適切に表し、相手に基本的な要求を伝えられるように身振りなどを活用できたり、話し言葉を補うために総カードやメモ、タブレット端末等の機器等を活用できるよりにしたりする。 簡単な絵に吹き出しや簡単なせりふを書き加えたり、コミュニケーションボード上から、伝えたい項目を選択したりするなどの手段を練習しておき、必要に応じてそれらの方法の中から適切な物を選ぶことができるように指導する。 コンピュータの読み上げ機能を利用したり、関係性と項目を図やシンボルなどで示すアイコンなどのような表現を利用したりすることで、コミュニケーションを楽しむことができるよりにしていく。</p>
<p>(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること</p>	<p>□場や状況に応じた、主体的なコミュニケーションの展開</p>	<p>視覚障がいがあり、視覚的な情報の入手に困難があり、場に応じた話題の選択や、部屋の広さや状況に応じた声の大きさの調節、話し方などに課題がある。 話の内容を記憶して前後関係を比較したり類推したりすることが困難なため、会話の内容や状況に応じた受け答えをすることができない。 会話の内容や周囲の状況を読みとることが難しいため、状況にそぐわない受け答えをする。 家庭などの生活の場では普通の会話ができるものの、学校の友達とは話すことができないなど選択性かん黙がある。</p>	<p>補聴器や人工内耳、読話やキーボード・スピーチ、指文字、手話、筆談（文字や絵）、コンプレックス等情報機器の選択・活用によって、聴覚障がいの状態や発達の段階、進路希望等の本人の意思、保護者の考え等を動かし、本人の持っている可能性を最大限に生かして、将来的にコミュニケーションを円滑にする意欲や自信の喚起、適切にコミュニケーションや人間関係の拡大等に留意するとともに、主体的に状況を判断し、適切にコミュニケーション手段を組み合わせていたり、変更したりすること等ができるよりにしていく。 （★「1健康の保持」「2心理的な安定」「3人間関係の形成」「4環境の把握」） 相手の声の様子や握手をした際の手の位置から、相手の体格や年齢などを推測して話を進めたり、声の響き方から、部屋の広さや相手との距離を判断して声の出し方を調節したりするなど、場や状況に応じた話し方を身に付ける指導を行う。 自分で内容をまとめながら聞く能力を高めるとともに、分からないときに聞き返す方法や相手の表情にも注目する態度を身に付けるよりにしていく。 相手の立場に合わせた言葉遣いや場に応じた声の大きさなど、場面にふさわしい表現方法を身に付けさせる。なお、その際には、実際の生活場面で、状況に応じたコミュニケーションが安定し、安心できる状況づくりや信頼できる人間関係づくりが重要であり、その上で、興味・関心のある事柄について、共感しながらか一掃に活動したり、日記や作文などを通して気持ちを言葉に表現したりする機会を多くする。また、話すことだけでなく、状況に応じて、筆談などの話し言葉以外のコミュニケーション手段を活用する。その際、自信が持て、自己に対して肯定的なイメージを確立することができるよりにしていく。 （★「1健康の保持」「2心理的な安定」「3人間関係の形成」）</p>

<p>(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること</p>	<p>口場や状況に応じた、主体的なコミュニケーションの展開</p>	<p>入院中の不安の原因が分からなかったり、気持ちや状態が継続している。また、不安を表現することができないことによるイライラなどによる攻撃的な行動につながる。 看護師、教師等への暴言などの攻撃的な行動につながる。</p> <p>援助を求めたり依頼したりするだけでなく、必要なことを伝えたり、相談したりすることが難しい。</p>	<p>先に入院していた子どもたちの体験や気持ちの変化等を聞くことを通して、自分の行動や言葉の背景にある不安に気付かせ、遊びや話し合い等で、不安を言語化し、気持ちの安定につなげていく。 (★「2心理的な安定」「3人間関係の形成」)</p> <p>日常的に報告の場面をつくることや相手に伝えるための話し方を学習させ、ホワイトボードなどを使用して気持ちや考えを書きながら整理していく。そして、安心して自分の気持ちを言葉で表現する経験を重ね、相談することの良さが実感できるように指導していく。 (★「2心理的な安定」「3人間関係の形成」)</p>
----------------------------------	-----------------------------------	---	---

障がい種別「視覚障がい」

区分	項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
1 健康の保持	(1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること	<input type="checkbox"/> 体温の調節 <input type="checkbox"/> 健康状態（覚醒と睡眠など）の維持・改善に必要な生活のリズムの獲得 <input type="checkbox"/> 食事や排泄などの生活習慣の形成 <input type="checkbox"/> 衣服の調節 <input type="checkbox"/> 室温の調節 <input type="checkbox"/> 感染予防のための清潔の保持など健康な生活環境の形成	昼夜の区別がつきにくくことから覚醒と睡眠のリズムが不規則になり、昼夜逆転した生活になる。  視覚障がいがある。	困難の要因を明らかにした上で、無理のない程度の課題から取り組む。生活のリズムや生活習慣の形成は、日課に即した日常生活の中で指導をする。
	(3) 身体各部の状態の理解と保護に関すること	<input type="checkbox"/> 病気や事故等による神経、筋、骨、皮膚等の身体各部の状態の理解 <input type="checkbox"/> 身体各部位の適切な保護と症状の進行の防止	視覚障がいがある。	発達の段階に応じて、眼の構造や動き、自己の視力や視野などの状態について十分な理解を図る。その上で、保有する視機能を維持するため、学習中の姿勢に留意したり危険な場面での対処方法を学んだりして、視覚管理を適切に行うことができるように指導する。
2 安定心理的な	(4) 障がいの特性の理解と生活環境の調整に関すること	<input type="checkbox"/> 自己の障がいの特性の理解及び学習上 <input type="checkbox"/> 状況に応じた、自己の行動や感情の調整及び他者に対する主体的な動き掛けによる、学習や生活をしやすい環境づくり	見える範囲に限られることにより周囲の状況把握に困難が生じるため、慣れている学校内であっても環境の把握が十分ではない。	自分の見え方の特徴を理解した上で、部屋に置かれた様々な物の位置などを自ら触ったり、他者から教えてもらったりして確認する。その際、物の位置関係が把握しやすいたり、順序よく丁寧に確認できるようにする。また、自分に分かちやすいういように整理したり、置く場所を決めたりしておく。さらに、必要以上に行動が消極的にならないように情緒の安定を図る。 (★「12心理的な安定」「3人間関係の形成」「4環境の把握」)
	(2) 状況の理解と変化への対応に関すること	<input type="checkbox"/> 場所や場面の状況の理解と心理的抵抗の軽減 <input type="checkbox"/> 変化に対する状況の理解と適切な対応法の習得	見えにくさから周囲の状況を把握することが難しいため、初めての場所や周囲の変化に対して、不安になる。	周囲がどのような状況かを教師が言葉で説明したり、あらかじめ子どもとその場に移動して一緒に確かめたりすることによって情緒的な安定を図るようにする。その上で、子どもも周囲の状況を見回したり、聴覚などの保有する感覚を活用したりして状況を把握することを指導する。(★「3人間関係の形成」「4環境の把握」)
3 人間関係の形成	(1) 他者とのかわり基礎に関すること	<input type="checkbox"/> 人に対する基本的な信頼感の形成 <input type="checkbox"/> 他者からの動きかけを受け止め、応ずること	相手の顔が見えない、あるいは見えにくいために、他者との関わりが消極的、受動的になる。	自分の顔を相手の声か聞こえてくる方向に向けていたり、相手との距離を意識したりして声の大きさを調整したりするなどのコミュニケーションを図るための基本的な指導を行う。また、その場の状況の変化が分らない場合は、必要に応じて、友達や周りにいる人に問い掛けたり、積極的に他者と関わろうとする態度や習慣を養うように指導する。 (★「2心理的な安定」「6コミュニケーション」)
	(2) 他者の意図や感情の理解に関すること	<input type="checkbox"/> 他者の意図や感情の理解 <input type="checkbox"/> 場に応じた適切な行動の形成	相手の表情を視覚的に捉えることが困難なため、相手の意図や感情の変化を読み取ることが難しい。	聴覚的な手掛かりである相手の声の抑揚や調子の変化などを的確に聞き分けることができるよう指導する。
4 環境の把握	(4) 集団への参加の基礎に関すること	<input type="checkbox"/> 集団の雰囲気に合わせて関わること <input type="checkbox"/> 集団に参加するための手順やまじりの理解 <input type="checkbox"/> 遊びや集団活動への積極的な参加	目で見ればすぐに分かるようなゲームのルールが捉えにくく、集団の中に入っていくけない。	あらかじめ集団活動に参加するための手順や決まり、必要な情報を得るための質問の仕方を指導して、積極的に参加できるようにする。
	(1) 保有する感覚の活用に関すること	<input type="checkbox"/> 保有する感覚（視覚、聴覚、触覚、嗅覚、固有覚、前庭覚など）の十分な活用	弱視である。	保有する視覚を最大限に活用するとともに、その他の感覚も十分に活用して、学習や日常生活に必要な情報を収集するための指導をする。
4 環境の把握	(2) 確認や認知の特性についての理解と対応に関すること	<input type="checkbox"/> 自分に入ってくる情報の適切な処理 <input type="checkbox"/> 自己の感覚の過敏さや認知の偏りなどの特性の理解と、適切な対応	障がいの特性により屋外だけでなく屋内においても蛍光灯などにまぶしさを強く感じる。	遮光眼鏡を装着するよう指導するとともに、その習慣化を図る。また、室内における見えやすさを必要に応じて他者に伝えたり、カーテンで明るさを調整したりできるように指導する。
	(3) 感覚の補助及び代行手段の活用に関すること	<input type="checkbox"/> 保有する感覚を用いて状況を把握しやすくするために各種の補助機器の活用 <input type="checkbox"/> 他の感覚や機器での代行	小さな文字など細かな物や遠くの物を読み取ることが難しい。  周囲の人から見られることを気にして、弱視レンズの使用をためらう。	遠用・近用などの各種の弱視レンズや拡大読書器などの視覚補助具、タブレット型端末などを効果的に活用できるように指導する。また、明るさの変化を音の変化に変える感覚器のように、視覚以外の感覚で確認できる機器を必要に応じて活用できるように指導する。  低学年から各種の弱視レンズなどを使ってよく見える体験を繰り返すとともに、障がいの理解を図り、障がいによる困難な状態を改善・克服する意欲を喚起する指導を行う。 (★「12心理的な安定」「15身体の動き」)

<p>4 環境の把握</p>	<p>(4) 感覚を総合的に活用して周囲の状況に把握し、それに基づいて自分のいる場所や進むべき方向などを的確に判断し行動できるように指導する。中学生・高校生の場合は、必要に応じて、携帯電話のナビゲーション機能などを利用して自分の位置と周囲の状況の把握をさせる。</p>	<p>他の感覚器官から情報を得て、活動している。</p>	<p>様々な感覚を通して得られる情報を総合的に活用して周囲の状況を把握し、それに基づいて自分のいる場所や進むべき方向などを的確に判断し行動できるように指導する。中学生・高校生の場合は、必要に応じて、携帯電話のナビゲーション機能などを利用して自分の位置と周囲の状況の把握をさせる。</p>
<p>(5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること</p>	<p>□物の機能や属性、形、色、音、音が変わる様子、空間・時間等の概念の形成 □獲得した概念を認知や行動の手掛かりとした活用</p>	<p>事物・事象の全体像を捉え、必要な情報を抽出して、的確な概念を形成することが難しい。 弱視のため、見ようとする物に極端に目を近づけたり、見える範囲が限られる場合があったりするため、全体像が捉えにくく、地図やグラフなどに示されている情報の中から必要な情報を抽出することが難しい。</p>	<p>触覚や保有する視覚などを活用し、対象物の形や大きさ、手触り、構造、機能等を観察することによって、的確な概念を形成できるように指導する。それらの概念を日常の学習や生活における認知や行動の手掛かりとして活用できるように指導する。</p>
<p>5 身体の動き</p>	<p>(1) 姿勢と運動・動作に関する基本的な動作の習得 □姿勢保持 □上肢・下肢の運動・動作の改善及び習得 □関節の拘縮や変形の予防 □筋力の維持・強化</p> <p>(4) 身体の移動能力に関すること</p>	<p>身体の動き等を模倣することを通して基本的な運動・動作を習得することが難しい。 視覚障がいがある。</p>	<p>姿勢や身体全体の動きについて、教師の身体や模型などに直接触らせて確認させた後、自分の身体を実際に使って、その姿勢や動きを繰り返し学習させるとともに、その態度教師が口頭で説明したり、手を添えたりするなどして、正しい姿勢の保持や運動・動作を習得できるように指導する。</p> <p>発達の段階に応じて、伝い歩きやガイド歩行、基本的な白杖の操作技術、他者に援助を依頼する方法などを身に付けて安全に目的地まで行けるように指導する。白杖を用いた歩行の際には、保有する視覚を十分に活用したり、視覚補助具を適切に使ったりできる力を付けさせる。</p>
<p>6 コミュニケーション</p>	<p>(3) 言語の形成と活用に関すること</p> <p>(4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること</p>	<p>視覚を活用した学習が困難なため、一面的な理解で、事物、事象や動作と言葉が結び付かない。 点字を常用して学習する。 コンピュータの拡大機能を使用している。 進行性の眼疾患等で普通の文字を使用した学習が難しい。 視覚と聴覚の両方に障がいがあるため、コミュニケーションが難しい。 視覚的な情報の入手に困難があり、場に応じた話題の選択や、部屋の広さや状況に応じた声の大きさの調節、話し方などに課題がある。</p>	<p>実際に体験ができるような教材・教具を工夫したり、触覚や聴覚、あるいは保有する視覚を適切に活用したりして、言葉の意味を正しく理解し、活用できるように指導する。</p> <p>キーボードでの入力や点字ディスプレイへの出力に慣れ、点字と普通の文字を相互交換したり、コンピュータの読み上げ機能を使って文書処理をしたりするなど、コンピュータの操作する技能の習得を図る。さらには、点字携帯情報端末を、学習や生活の様々な場面で活用できるように指導する。</p> <p>自分にとって学習効率の良い文字サイズを知り、拡大文字の資料を必要とする場合などに、コンピュータの拡大機能などを使って、文字サイズ、行間、コントラスト等を調整し読みやすい資料を作成できるように指導する。</p>
<p>(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること</p>	<p>□場や状況に応じた、主体的なコミュニケーションの展開</p>	<p>相手の声の響き方から、部屋の広さや相手との距離を判断して声の出し方を調節したり進めたり、声の響き方から、部屋の広さや相手との距離を判断して声の出し方を調節したりする。適切な時期に使用文字を点字に切り替える等、学習効率を考えた文字選択の配慮を行う。</p>	<p>保有する視覚と聴覚の活用、触覚を活用したコミュニケーション手段が考えられる。触覚を活用したコミュニケーション手段として、身振りサインに触ること、手話や指文字に触れて読み取る触手話・触指文字、指点字等があるが、障がいの状態や発達段階等を考慮して、適切なコミュニケーション手段の選択・活用による指導に努める。</p> <p>相手の声の響き方から、部屋の広さや相手との距離を判断して声の出し方を調節したり進めたり、声の響き方から、部屋の広さや相手との距離を判断して声の出し方を調節したりする。</p>

障がい種別「聴覚障がい」

区分	項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
1 健康の保持	(3) 身体各部の状態の理解と養護	<input type="checkbox"/> 病気や事故等による神経、筋、骨、皮膚等の身体各部の状態の理解 <input type="checkbox"/> 身体各部の適切な保護と症状の進行の防止	聴覚障がいがある。	発達の段階に応じて、耳の構造や自己の障がいについての十分な理解を図る。その上で補聴器等を用いる際の留意点についても理解を促すなどして、自ら適切な聞こえの状態を維持できるように耳の保護に関わる指導を行う。
	(4) 障がいの特性の理解と生活環境の調整	<input type="checkbox"/> 自己の障がいの特性の理解及び学習上又は生活上の困難さの理解 <input type="checkbox"/> 状況に応じた、自己に対する主体的な働きかけによる、学習や生活しやすい環境づくり	聴覚障がいがある。	どのような音が聞こえて、どのような音が聞こえないのかを自分で試したり理解し、時と場合によって聞こえなかつたりすることに気付かせ、卒業後と自分の聞こえの状況や最も理解しやすいコミュニケーションの方法を自ら伝えていくこと、聞こえの状況やコミュニケーションにつながる聴覚活用に加え、手話や筆談など、他者とコミュニケーションを図るための様々な方法があることを理解し、その中で自分がやりやすいコミュニケーションの方法を選択できるようにすることが大切である。 (★「2心理的な安定」「6コミュニケーション」)
2 心身の安定	(3) 障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲	<input type="checkbox"/> 障がいの状態の理解と受容 <input type="checkbox"/> 主体的に学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲の向上	人とのコミュニケーションを円滑に行うことができなかつたり、音声のみでの指示や発話を理解することができなかつたりするため、学習場面や生活場面において、人と関わることを新しい体験をすることに對して消極的になってしまう。	自分自身の聞こえにくさによって、人と関わる際にどのような困難が生じるのかや、新しい体験をする際にどのようなように行動したり、周囲に働きかけたりするなどのことを考え、試したり、体験したりすることを通して、積極的な問題解決に向かう意欲を育てる。 (★「1健康の保持」「4環境の把握」「6コミュニケーション」)
	(2) 他者の意図や感情の理解	<input type="checkbox"/> 他者の意図や感情の理解 <input type="checkbox"/> 場に応じた適切な行動の形成	聴覚的な情報を入力しにくくことから、視覚的な手掛かりだけで判断したり、会話による情報で円滑でないために自己中心的に捉えたりしやすい。	状況の推移を振り返りながら、出来事の流れについて総合的に判断する経験を積ませる。その際、聴覚活用や話話等の多様なコミュニケーション手段を場面や相手に応じて選択し、的確に会話の内容を把握することができるようにする。 (★「2心理的な安定」「4環境の把握」「6コミュニケーション」)
3 成人間関係の形成	(4) 集団への参加の基礎	<input type="checkbox"/> 集団の雰囲気に合わせてのこと <input type="checkbox"/> 集団に参加するための手順やきまりの理解 <input type="checkbox"/> 遊びや集団活動への積極的な参加	会話の情報を的確に把握できにくいため、ルールや常識の理解、それに基づいた行動が難しい。	会話の背景を想像したり、実際の場面を活用したりして、行動の仕方や相手の受け止め方などについて、具体的なやりとりを通して指導する。
	(1) 保有する感覚の活用	<input type="checkbox"/> 保有する感覚(視覚、聴覚、触覚、嗅覚、固有覚、前庭覚など)の十分な活用	裸耳では学習や日常生活に必要な情報を収集することが難しい。	補聴器等の装用により、保有する聴力を十分に活用していく。場所や場面に応じて、磁気ループを用いた集団補聴システム、FM電波や赤外線を用いた集団補聴システム又はFM補聴器等の機器の特徴に合った活用ができるようにする。
4 環境の把握	(3) 感覚の補助及び代行手段の活用	<input type="checkbox"/> 保有する感覚を用いて状況を把握しやすくするために各種の補助機器の活用 <input type="checkbox"/> 他の感覚や機器での代行	補聴器や人工内耳を装用している。	補聴器等を装用していても、音や他者の話を完全に聞き取れるわけではないため、聴覚活用に加え、視覚を通して情報収集(手話や指文字、キューボード・スピーチ、口形、読話など)の特徴や機能を理解して活用できるようにする。
	(4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動	<input type="checkbox"/> いろいろな感覚器官やその補助及び代行手段の総合的な活用 <input type="checkbox"/> 情報収集や環境状況の把握による、的確な判断や行動の形成	補聴器等を通して得られた情報だけでは、周囲の状況やその変化を十分に把握することが難しい。 背後や外の様子等、周囲の状況の把握に困難に感じにくくことや、周囲の人とのコミュニケーションの不十分さなどの影響で、物事がどのようなように推移してきたか、相手がどう思っているか、これから何が始まるかなどについて、予想できにくい。	身の回りの音を聞き取り、様子や言葉を理解する場合には、視覚や嗅覚などの感覚も総合的に活用する指導が必要である。その際には、情報を的確に収集することにも、様々な感覚をいかに活用するかについても考えさせる。
	(5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成	<input type="checkbox"/> 物の機能や属性、形、色、音が変化する様子、空間・時間等の概念の形成 <input type="checkbox"/> 獲得した概念を認知や行動の手掛かりとした活用	聴覚障がいがある。	視覚的な情報を適切に活用して作業等を行う。例えば、折り紙をする場合で、過程を的確な言葉に結び付けていく。「端を折るような活動の際には、それぞれ作業」「左手で押さえておく」「右手で折り目を付ける」「片方を開く」などの言葉を知らず、実際に作業できなくなると、その概念を的確に身に付け、さらに、習得した概念を通して繰り返し練習すること、その概念を的確に身に付けることができるようになる。(★「6コミュニケーション」)

6 コミュニケーション	
(1) コミュニケーションの基礎的能力	<p>相手の表情を見たり、身振りを交えて伝えたりする。</p> <p>相手へ自分の意図を適切に伝えることが難しい。</p> <p>体験したことと日本語とを結び付けることが難しい。</p> <p>「何を書くか(内容)」と「どのように書くか(日本語表現)」の両方を考える負担が掛かり、なかなか文章を書き進めることができない。</p> <p>手話や指文字を使用している。</p> <p>視覚と聴覚の両方に障がいがあるため、コミュニケーションが難しい。</p> <p>相手や状況に応じたコミュニケーション手段の適切な選択・活用が難しい。</p>
(2) 言語の受容と表出	<p>□ 表情や身振り、各種の機器を用いた意思のやりとり</p> <p>□ 話し言葉や各種の文字・記号等を用いた言語の受容・表出</p>
(3) 言語の形成と活用	<p>□ 事象や現象、自己の行動等に対応した言語の概念の形成</p> <p>□ 体系的な言語の習得</p>
(4) コミュニケーション手段の選択と活用	<p>□ 話し言葉や各種の文字・記号、機器等のコミュニケーション手段の適切な選択・活用</p> <p>□ 円滑なコミュニケーション</p>
	<p>相手を注視する態度や構えを身に付けたり、あるいは自然な身振りで表現したり声を出したりして、相手と関わることでできるようにしたりするなど、コミュニケーションを行うための基礎的能力を身に付けさせる。</p> <p>音声だけでなく身振りを状況に応じて活用し、さらに、手話・指文字や文字等を活用して、主体的に自分の意思を表出できるような機会を設ける。</p> <p>体験した出来事を文章(5W1H)で表現するときに、まず手話で体験した出来事を表現させ、その内容を日本語に置き換えながら文章を書くなど、手話を活用した日本語の指導をする。</p> <p>手話を活用することにより「何を書くか」を決めさせた後、「どのように書くか」に専念して書かせる。また、写真や絵などを見て分かったことや考えたことを字で話し合い、それを文章で表現させる。</p> <p>音声や手話、指文字、キュード・スピード・スビーチ等を使用して、相手や伝わりやすい手段や伝え方を考える機会を設ける。</p> <p>保有する視覚と聴覚の活用、触覚を活用したコミュニケーション手段が考えられる。触覚を活用したコミュニケーション手段として、身振や指文字に触れること、手話や指文字に触れて読み取る触手話・触指文字・指点字等があるが、障がいの状態や発達段階等を考慮して、適切なコミュニケーション手段の選択・活用に努める。</p> <p>補聴器や人工内耳、読話やキータブ・スピーチ、指文字、手話、筆談(文字や絵)、コンピュータ等情報機器等の選択・活用に当たって、聴覚障がいの状態や発達の段階、進路希望等の本人の意思、保護者の考え等を勘案し、本人の持っている可能性を最大限に生かして、将来の自立や積極的な社会参加を目指す方法を工夫する。その際、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲や自信の喚起、周囲に対する関心や人間関係の拡大等に留意するとともに、主体的に状況を判断し、適切に言葉での表現や手段を組み合わせていたり、変更したりすること等ができるようにしていく。 (★「1健康の保持」「2心理的な安定」「3人間関係の形成」「4環境の把握」)</p>

障がい種別「知的障がい」

区分	項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
1 持の健康 保	5) 健康状態の維持・改善に関すること	<input type="checkbox"/> 運動量の減少及び体力低下の防止 <input type="checkbox"/> 日常生活における適切な健康の自己管理	運動量が少ないことにより、肥満がみであり体力低下を招いたりする。また、心理的な要因により不登校の状態が続き、運動量が極端に少なくなったり、食欲不振の状態になったりする。	体力低下を防ぐために、運動することへの意欲を高めながら適度な運動を取り入れたりと、日常生活と健康について実際の生活に即して学習したりするなど、日常生活において自己の健康管理ができるようになる。
2 安心 定理的な	3) 障がいによる学習上の困難を改善・克服する意欲に關すること	<input type="checkbox"/> 障がいの状態の理解と受容 <input type="checkbox"/> 主体的に学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲の向上	コミュニケーションが苦手なことで、人と関わることに消極的になったり、受け身の態度になったりする。	音声が不明瞭だったり、相手の言葉が理解できなかつたりすることに加え、失敗経験から人と関わることに自信が持てなかつたり、周囲の人への依存心が強かつたりすることなどが要因であると考えられる。まずは、自分の考えや要求が伝わったり、相手の意図を受け止めたたりする双方向のコミュニケーションが成立する成功体験を積み重ね、自ら積極的に関わりあうようとする意欲を育てる。 (★「14 環境の把握」「6 コミュニケーション」)
3 成係人の関 の関形	3) 自己の理解と行動の調整に關すること	<input type="checkbox"/> 自分の得意なことや不得意なこととの理解 <input type="checkbox"/> 自分の行動の特徴の理解 <input type="checkbox"/> 集団の中の状況に応じた行動の形成	失敗経験等の積み重ねにより、自分に自信が持てず、行動することにためらいがちなことになる。	容易にできる活動を設定し成就感を味わわせ、徐々に自信を回復しながら自己に肯定的な感情を高めさせる。
4 握環 境の把	4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況に關する把握に關すること	<input type="checkbox"/> いろいろな感覚器官やその補助及び代行手段の総合的な活用 <input type="checkbox"/> 情報収集や環境状況の把握による、的確な判断や行動の形成	自分の身体に対する意識や概念が十分に育っていないため、物や人にぶつかったり、簡単な動作をまねることが難しかったりする。	粗大運動や微細運動を通して、全身及び身体の各部位を意識して動かしたり、身体各部の部位の名称やその位置などを言葉で理解したりするなど、自分の身体に対する意識を高めながら、自分の身体が基点となって位置、方向、遠近の概念の形成につなげられるように指導する。
5 身体 の動き	1) 姿勢と運動的機能に關すること	<input type="checkbox"/> 日常生活に必要な動作の基本となる姿勢保持 <input type="checkbox"/> 上肢・下肢の運動・動作の改善及び習得 <input type="checkbox"/> 関節の拘縮や変形の予防 <input type="checkbox"/> 筋力の維持・強化	身体の部位を適切に動かしたり、指示を聞いて姿勢を変えたりすることが難しい。	より基本的な動きの指導から始め、徐々に複雑な動きを指導する。そして、次第に、目的の動きに近づけていくことにより、必要に運動・動作が確実に身に付くよう指導する。
	3) 日常生活に必要な基本動作に關すること	<input type="checkbox"/> 身体処理動作の習得 <input type="checkbox"/> 書き、描写等の学習のための動作の習得	衣服の着脱におけるボタンの着脱やはさみなどの道具の操作などが難しい。	興味や関心が持ていない内容や課題を工夫し、使いやすしい適切な道具や素材に配慮する。その上で、課題の難易度を考慮しながら、例えば、衣服の着脱では、ボタンはめの前にボタン外しから取り組むことや、ボタンや穴の大きさを徐々に小さくすること、はさみを使用する際には、切る長さやボタンの向きを徐々に長くしたり、直線から曲線など切る形を変えたりするなど、日常生活に必要な基本動作をステップアップで指導していく。 (★「14 環境の把握」)
	5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に關すること	<input type="checkbox"/> 作業に必要な基本動作の習得 <input type="checkbox"/> 巧緻性や持続性の向上 <input type="checkbox"/> 作業を円滑に遂行する能力の向上	粗大な運動・動作には問題は見られぬものの、細かい手先を使った作業の遂行が難しかったり、その持続が難しかったりする。	手遊びやピエゾなどを仕分けする活動、ひもにピエゾを通す活動など、両手や目と手の協働動作などができるように指導する。その際、単に訓練的な活動とならないよう、興味や関心の持てる内容や課題を工夫し、楽しんで取り組めるようにしたり、物を作ることをとおるようにする。 (★「4 環境の把握」)
6 コ ニ ケ ー シ ョ ン	1) コミュニケーションの基礎的能力に關すること	<input type="checkbox"/> 表情や身振り、各種の機器を用いた意思のやりとり	自分の気持ちや要求を適切に相手に伝えられなかつたり、相手の意図が理解できなかつたりしてコミュニケーションが成立しにくい。	自分の気持ちや要求を適切に伝えるために、簡単なジェスチャーやアイコンを交えたりするなど、要求を伝える手段を広げるとともに、人とのやりとりや人と協力して遂行するゲームなどを通して、相手の意図を理解したりして適切な関わりができてくるよう指導する。
		<input type="checkbox"/> 発声や身体の動きによって気持ちや要求を表すことができるが、発声や指差し、身振りやしぐさなどをコミュニケーション手段として適切に活用できない。	発声や身体を要求する場面などで、ふさわしい身振りなどを指導したり、発声や要求の表現となるよう意味付けたりするなど、様々な行動をコミュニケーション手段として活用できるように指導する。 (★「3 人間関係の形成」「5 身体の動き」)	欲しいものを要求する場面などで、ふさわしい身振りなどを指導したり、発声や要求の表現となるよう意味付けたりするなど、様々な行動をコミュニケーション手段として活用できるように指導する。 (★「3 人間関係の形成」「5 身体の動き」)
		<input type="checkbox"/> 他の人への関心が乏しく、結果として他の人からの働き掛けを受けられることが難しい。	興味や関心のある活動の中で、教師の言葉掛けに対して視線を合わせたり、楽しんでいたり教師が「楽しいね」などの言葉や掛け合いを楽しんだりして、人と関わりあうことを促すことや通じ合える喜びを感じさせながら、他者との相互的なやりとりやコミュニケーション手段として身振りや絵カードやメモ、機器などを活用する際には、個々の実態を踏まえ、無理なく活用できるように工夫する。 (★「3 人間関係の形成」「5 身体の動き」)	興味や関心のある活動の中で、教師の言葉掛けに対して視線を合わせたり、楽しんでいたり教師が「楽しいね」などの言葉や掛け合いを楽しんだりして、人と関わりあうことを促すことや通じ合える喜びを感じさせながら、他者との相互的なやりとりやコミュニケーション手段として身振りや絵カードやメモ、機器などを活用する際には、個々の実態を踏まえ、無理なく活用できるように工夫する。 (★「3 人間関係の形成」「5 身体の動き」)

6 シニコ ヨケミ ン	(4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること	<input type="checkbox"/> 話し言葉や各種の文字・記号、機器等のコミュニケーション手段の適切な選択・活用 <input type="checkbox"/> 円滑なコミュニケーション	対人関係における緊張や記憶の保持などの困難さを有し、適切に意思を伝えることが難しい。	タブレット型端末に入れた写真や手順表などの情報を手掛かりとすることや、音声出力や文字・写真など、代替手段を選択し活用したコミュニケーションができるようにしている。
----------------------	-----------------------------	--	--	---

障がい種別「病弱・身体虚弱」

区分	項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
1 健康の保持	(1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関する事	<input type="checkbox"/> 体温の調節 <input type="checkbox"/> 健康状態（覚醒と睡眠など）の維持・改善に必要な生活のリズムの獲得 <input type="checkbox"/> 食事や排泄などの生活習慣の形成 <input type="checkbox"/> 衣服の調節 <input type="checkbox"/> 室温の調節や換気 <input type="checkbox"/> 感染予防のための清潔な環境の形成	覚醒と睡眠のリズムが不規則なことが多い。また、体力が弱かったり、食事の量や時間、排泄の時刻が不規則になったりする。	1日の生活状況（覚醒と睡眠のリズム、食事及び水分摂取の時間や回数・量など）や体調に関する情報（呼吸機能、体温調節機能、脱糞の種類や時間、てんかん発作の有無とその状態など）を把握し、日課に即して日常生活の中で指導をする。 困難の要因を明らかにした上で、無理のない程度の課題から取り組む。生活のリズムや生活習慣の形成は、日課に即して日常生活の中で指導をする。
	(2) 病気の状態の理解と生活管理に関する事	<input type="checkbox"/> 病気の状態の理解と改善 <input type="checkbox"/> 病気の進行の防止に必要な生活様式 <input type="checkbox"/> 生活の自己管理	食生活や運動不足等の生活習慣と関連する2型糖尿病である。  進行性の疾患がある。	自己の病気を理解し血糖値を毎日測定して、病状に応じた対応ができるようにするとともに、適切な食生活や適度の運動を行うなど主体的に生活管理を行い、病気の進行を防止するよう指導する。  病気を正しく理解し、日々の体調や病気の状態の変化に留意しながら、適度な運動に対する理解や、身体機能の低下を予防するよう生活の自己管理に留意した指導を行う。
	(3) 身体各部の状態の理解と生活管理に関する事	<input type="checkbox"/> 病気や事故等による神経、筋、骨、皮膚等の身体各部の状態の理解 <input type="checkbox"/> 部位を適切な保護と症状の進行の防止	うつ病などの精神性の疾患があり、食欲の減退などの身体症状、興味や関心の低下や意欲の減退などの症状が見られるが、それらの症状が病気に由来するものであることを理解できない。  てんかん発作のなかで、短時間意識を失う小発作の場合には、発作が起きているのを本人が自覚しにくいことから、自己判断して服薬を止めしてしまう。  小児がんの経験がある。	医師の了解を得た上で、病気の仕組みと治療方法を理解するように指導する。ストレスが症状に影響を与えることが多いので、例えば、日記を書くことでストレスとなった要因に気づいたり、小集団での話し合いの中で、ストレスを避ける方法や発散する方法を考へたりするなど、自らその軽減を図ることができるよう指導する。  定期的な服薬の必要性について理解させるとともに、確実に自己管理ができるよう指導する。  治療後に起きる成長障害がいや内分泌障害がいや等の晩期合併症のリスクがあることを理解して、体調の変化や感染症予防等に留意するなど、病気の予防や適当な運動や睡眠等の健康管理を自らできるようにする。
	(4) 生活環境の改善	<input type="checkbox"/> 生活環境の改善	てんかんがある。	定期的な服薬の必要性について理解するとともに、服薬により多くの場合は発作をコントロールできるといった安心感を持たせる。また、障がいのある生活者への留意事項を理解し守ることで定期的な服薬が難しい場合は、コミュニケーションや、定期的に服薬すること、生活の状況等を含めて、てんかんについて分りやすく示した絵本や映像資料などを用いて理解を図った。また、ストレスをためることがてんかん発作の誘因となることがあるため、情緒の安定を図るよう指導する。注意事項を守り服薬を忘れないようにするために、周囲の人の理解や協力を得ることが有効な場合があるため、発達の段階等に応じて、自分の病状を他の人に適切に伝えることができるよう指導する。 (★「12心理的な安定」「6コミュニケーション」)
	(5) 健康状態の維持・改善に関する事	<input type="checkbox"/> 運動量の減少及び体力低下の防止 <input type="checkbox"/> 日常生活における適切な健康の自己管理	長時間寝たきりの状態により、床ずれ等がある。  たんの吸引等の医療的ケアを必要とする。	患部への圧迫が続かないように、定期的に体位を変換することの必要性を理解させ、自分で行う方法を工夫したり、自分でできない場合には他の人に依頼したりできるようにする。  健康状態の詳細な観察が必要であることや、指導の前後にたんの吸引等の医療的ケアが必要なこともあることから、養護教諭や看護師等と十分連携を図って指導を進める。

心臓疾患の特徴、治療方法、生活管理などについて、個々の発達の段階等に応じて理解ができるようにするとともに、自分の健康の状態を把握し、その状態に応じて日常生活や学習活動の状態をコントロールしたり、自ら進んで医師に相談したりできるようにする。これからの指導を行う際には、生活管理や入院生活から生じるストレスなどの心理的な側面にも配慮するとともに、実施可能な運動等については学校生活管理指導表等を参考にしながら可能な限り取り組みを行う。  
 (★「12心理的な安定」)

2	心理的な安定	<p>□情緒の安定</p> <p>□情緒の安定に関すること</p>	<p>白血病治療の副作用による貧血や嘔吐などが長期間続くことにより、情緒が不安定な状態である。</p> <p>入院と退院を繰り返していたり、退院後も感染予防のため学校に登校できにくい状態であったりする。</p> <p>心理的に緊張しやすく、不安になりやすい傾向がある。また、身体面では、嘔吐、下痢、拒食等様々な症状があり、日々それらが繰り返され、そのため強いストレスを感じ、集団に参加することが難しい。</p>	<p>悩みを打ち明けたり、自分の不安な気持ちを表現できるようにしたり、心理的な不安を表現できるように活動をした。情緒の安定を図る。</p> <p>テレビ会議システム等を活用して学習に対する不安を軽減するような指導を工夫する。</p>
3	<p>障がいによる学習上の困難を改善・克服すること</p> <p>障がいの状態の理解と受容</p> <p>主体的に学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲の向上</p>	<p>障がいの状態の理解と受容</p> <p>主体的に学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲の向上</p>	<p>友達の病気の進行を見ていることから、将来の自分の病状についても認識している。</p> <p>障がいに起因して心理的な安定を図ることが困難な状態にある。</p>	<p>教師が病気の原因を把握した上で、本人の気持ちを理解しようとする態度で関わる。その上で、良好な人間関係作りを目指して、集団構成を工夫したり、様々な活動を行った。十分にコミュニケーションができていた。★「13 人間関係の形成」 「16 コミュニケーション」</p> <p>卒業後も視野に入れないながら学習や運動において打ち込むことができ、少くとも困難を改善・克服しようとする意欲の向上を図る。</p>
3	<p>他者の意図や感情の理解</p> <p>他者の意図や感情の理解に関すること</p>	<p>□他者の意図や感情の理解</p> <p>□場に応じた適切な行動の形成</p>	<p>障がいに起因して心理的な安定を図ることが困難な状態にある。</p> <p>一人で入院しており、病気の不安を一人で抱え込んだり、家族から離れて過ごすこと、孤独を感じたり、逆に親に心配させないよう、周囲の人へ攻撃的な行動や言葉が表出する。</p>	<p>同じ障がいのある者同士の自然な関わりを大切にしたり、社会で活躍している先輩の生き方や考え方を参考にできるようにして、生きがいを感じるよう工夫し、少しでも困難を改善・克服して積極的に行動しようとする態度を育てる。</p> <p>小集団での話し合い活動や遊び等の取組を通して、不安な気持ちを表現したり、他者に意見を聞いたりして協調性を養うよう指導を行う。 ★「12 心理的な安定」 「16 コミュニケーション」</p>
5	<p>身体の移動能力に関すること</p>	<p>□自力での身体移動や歩行</p> <p>□歩行器や車椅子による移動</p> <p>□日常生活に必要な移動能力の向上</p>	<p>心臓疾患があり、心臓への負担が掛かることから歩行による移動が制限され、必要に応じて歩行器や電動車椅子等の補助的手段を活用している。</p>	<p>医師の指導を踏まえ、病気の状態や移動距離、活動内容によって適切な移動手段を選択し、心臓に過度の負担を掛けることなく移動の範囲が維持できるように指導する。</p>
6	<p>コミュニケーション</p>	<p>□話し言葉や各種の文字・記号、機器等のコミュニケーション手段の適切な選択と活用</p> <p>□円滑なコミュニケーション</p> <p>□場や状況に応じた、主体的なコミュニケーションの展開</p>	<p>進行性の病気の症状が進行して言葉による表出が難しい。</p>	<p>今後の進行状況を早極め、今ままでできていたことができなくなることによる自己肯定感（自己を肯定的に捉える感情）の低下へのケアに留意するとともに、コミュニケーション手段を本人と一緒に考え、自己選択・自己決定の機会を確保しながらコミュニケーション手段を活用する力を獲得していきよう指導する。</p> <p>先に入院していた子どもとの体験や気持ちを変化等を聞くことを通じて、自分の行動や言葉の背景にある不安に気がかせ、遊びや話し合い等の中で、不安を言語化し、気持ちの安定につなげていく。（★「12 心理的な安定」 「13 人間関係の形成」）</p>

障がい種別「肢体不自由」

区分	項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
1 健康の保持	② 病気の状態の理解と生活の管理に関すること	<input type="checkbox"/> 病気の状態の理解と改善 <input type="checkbox"/> 病気の進行の防止に必要な生活様式 <input type="checkbox"/> 生活の自己管理	二分脊椎により、長時間同じ座位をとることで褥瘡（じよくそう）ができる。	定期的に姿勢変換を行うよう指導する。
	③ 身体各部の状態の理解と養護に関すること	<input type="checkbox"/> 病気や事故等による神経、筋、骨、皮膚等の身体各部の状態の理解 <input type="checkbox"/> 身体各部位の適切な保護と症状の進行の防止	下肢切断によって義肢を装着している。  筋萎縮等により筋力が低下し、運動機能などの各機能が低下する筋ジストロフィーである。	義肢を装着している部分を清潔に保ったり、義肢を適切に管理したりすることができるようにする。  身体の状態に応じて運動の自己管理ができるように指導する。特に、心臓機能や呼吸機能の低下は命に関わることであるため、筋肉に過度の負担を掛けないように留意しつつ機械能低下を予防することが重要である。そのため、病気の原因や経過、進行の予防、運動の必要性、適切な運動方法や運動量などについて学習させる。その際、治療方法や病気の進行、将来に関する不安等を持つことがあるので、情緒の安定に配慮した指導を行う。また、病気の進行に伴い、姿勢変換や移動、排泄などの際に周囲の人に支障を依頼することが必要になってくるので、場や状況に応じたコミュニケーション方法について学ばせる。 (★「12心理的な安定」「6コミュニケーション」)
2 安定心理的な関係人の間関形成	③ 障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服に関すること	<input type="checkbox"/> 障がいの状態の理解と受容 <input type="checkbox"/> 主体的に学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲の向上	肢体不自由があるために移動が難しい。	手段を工夫し実際に自分の力で移動ができるようになるなど、障がいに伴う困難を自ら改善し得たという成就感が持てるような指導を行う。
	③ 自己の理解と行動の調整に関すること	<input type="checkbox"/> 自分の得意なことや不得意なこと <input type="checkbox"/> 自分の行動の特徴の理解 <input type="checkbox"/> 集団の中の状況に応じた行動の形成	肢体不自由の状態が重度であり、心理的な不安定を図ることが難しい。	壁返りや腕の上げ下げなど、運動・動作をできるだけで自分自身の困難を改善・克服する意欲を育てる。  自分でできること、補助的な手段を活用してできること、他の人に依頼して手伝ってもらうことなどについて、実際の体験を通して理解を促す。
3 成関係人の間関形成	① 保有する感覚の活用に関すること	<input type="checkbox"/> 保有する感覚（視覚、聴覚、触覚、嗅覚、固有覚、前庭覚など）の十分な活用	経験が乏しく、自分の能力を十分理解できていない。	自分自身でできること、補助的な手段を活用してできること、他の人に依頼して手伝ってもらうことなどについて、実際の体験を通して理解を促す。
	② 感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること	<input type="checkbox"/> 自分に入ってくる情報の適切な処理 <input type="checkbox"/> 自己の感覚の過敏さや認知の偏りなどの特性の理解と、適切な対応	運動・動作に伴う筋の収縮・伸張、関節の屈曲・伸展などに制限や偏りがあり、自分自身の体位や動きを把握し、調整することが難しい。  脳性まひがあり、文字や図形を正しく捉えることが難しい。	自分自身の体位や動きについて、視覚的なイメージを提示したり、分かりやすい言葉で伝えたりして、自分の身体を正しく調整することができるように付けさせる。  一つの文字や図形だけを取り出して輪郭を協調して見やすくしたり、文字の部首や図形の特徴を話し言葉で説明したりする。また、学習活動を通じて、自分の得意な学習のスタイルを知り、自ら使えるように指導する。
4 環境の把握	④ 感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること	<input type="checkbox"/> いろいろな感覚器官やその補助及び代行手段の総合的な活用 <input type="checkbox"/> 情報収集や環境状況の把握による、的確な判断や行動の形成	上肢にまひがあり、文字や図形を書くことが難しい。	コンピュータ等を活用して書くことを補助することによって、学習を効果的に進めるようにする。
			体の動かさず活動や水泳などの全身を協調して動かす運動を苦手としていく。	固有覚や前庭覚の発達段階を把握した上で、現在できている動作がより確実にできるような取り組むとともに、指や身体を、一つ一つ確かめながらゆくり動かしやすくなるように取り組むなどとして、目の前に合った運動から行うようにする。また、「できた」という経験と自信を持てるようにし、自己を肯定的に捉えることができるようにする。 (★「12心理的な安定」「3人間関係の形成」「5身体への動き」)
動く対象物に手を伸ばしてそれをつかむなどといった、目と手を協働させた活動が難しい。				頭部を安定させるための補助具を活用したり、前腕で上体を支えやすくする姿勢の保持を工夫したりすることで、目の前に置かれた興味のある玩具を注視したり、ゆくり動かしやすくなるようにする。また、見ていた対象物に手を伸ばして、倒れたり転がったりする経験を重ね、目で手の動きを追うような力を付けるように指導する。(★「5身体への動き」)

4 環境の把握	<p>5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること</p> <p>□物の機能や属性、形、色、音が変化する場合、空間・時間等の概念の形成</p> <p>□獲得した概念を認知や行動の手掛かりとした活用</p>	<p>身体の動きの制限により、上下、前後、左右、遠近等の概念の形成が十分に図られず、空間における自分と対象の位置関係を理解することが難しい。</p> <p>上肢操作が難しく、見えにくさがあったりすることが多い。物の機能や属性等、基本的な概念の形成を図ることが難しい。</p>	<p>自分の身体の各部位を確認するよう活動を通して、自分の身体に対する意識を明確にする。空間概念の形成を図る。</p> <p>手掛かりとしやすい情報の提示方法を明らかにして、多くの物に関わらせ、それぞれ物の特徴を把握させる。初めて関わる物については、物の特徴を教師が言語化して伝えること、予測する力を育てる。</p> <p>(★「5身体の動き」「6コミュニケーション」)</p>
1)	<p>□日常生活に必要な動作の基本となる姿勢保持</p> <p>□上肢・下肢の運動・動作の改善及び獲得</p> <p>□関節の拘縮や変形の予防</p> <p>□筋力の維持・強化</p>	<p>基本動作が未習得であったり、間違っただけで身についてしまったりしない。そのため、生活動作や作業動作を十分に行うことができない。</p>	<p>全身又は身体各部位の筋緊張が強すぎる場合、その緊張を弛めたり、弱すぎる場合には、過度な緊張状態をつくりだしたりするなど、個々の運動・動作の状態に即した指導を行う。一方、筋ジストロフィーの場合、関節拘縮や変形予防のための筋力の維持を図る適度な運動が必要である。</p>
2)	<p>□様々な補助用具等の補助手段の活用</p>	<p>日常生活動作や作業動作の遂行を補うため、補助用具を必要とする。</p> <p>車椅子の使用が度重なることにより、立位を保持する能力が低下する。</p>	<p>目的や用途に応じて適切な用具を選び、十分に使いこなせるように指導する。また、発達の段階を考慮しながら、補助用具のセッティングや収納の仕方を身に付けたり、自分に合うように補助用具を調整したりすることを指導する。</p>
3)	<p>□周辺処理動作の習得</p> <p>□書字、描写等の学習のための動作の習得</p>	<p>上肢を十分に動かすことができない。</p> <p>運動・動作が極めて困難であり、日常生活に必要な基本動作のほとんどで援助を受けている。</p>	<p>座位をとることが可能ならば、背盤を安定させるための装置や体幹を支えるためのベルトなどを用いた椅子を活用する。併せて、自分で頭を上げた状態を維持するために、積極的に肩を動かしたり触るよう指導することが必要である。子どもが視覚や触覚を積極的に活用するよう教材・教具や環境の設定を工夫する。</p> <p>(★「4環境の把握」)</p>
4)	<p>□自力での身体移動や歩行</p> <p>□歩行器具や車椅子による移動</p>	<p>歩行が弱い、歩行に必要な緊張が得られない。</p> <p>歩行が難しい。</p> <p>嘔吐や腰痛が難しい。</p>	<p>安定した座位を確保しながら、両腕を体の前へ伸ばす、身体の正面で両手を合わせ、指を握ったり開いたりする、手の動きを目で追う等の指導をする。</p> <p>援助を受けやすい姿勢や手足の動かし方を身に付けることを目標として、指導を行う。</p> <p>歩行器具を用いた歩行を目標に掲げるなど、日常生活に役立つ移動能力を習得できるよう指導する。</p> <p>車椅子による移動を目標に掲げたりするなど、日常生活に役立つ移動能力を習得できるよう指導する。</p> <p>嘔吐や腰痛だけでなく、それらも含めた基本動作すべての改善及び習得を目指す。姿勢保持や上下肢の基本動作などの指導経過を踏まえて適した移動の方法を選択し、指導する。</p>
5)	<p>□作業に必要な基本動作の習得</p> <p>□巧緻性や持続性の向上</p> <p>□作業を円滑に遂行する能力の向上</p>	<p>学校外での移動や、交通機関の利用の際に、一人での移動が難しい。</p> <p>車椅子を利用して、一人で外出することがある。</p> <p>左右を協調させた上肢操作のぎこちなさのため、ひもをつまんだり、交差させたりしてひもを結ぶことが難しい。</p>	<p>左記のような社会的場面における移動能力を総合的に把握し、実際の場面で有効に生かされるよう指導する。例えば、駅など危険が予想される場所を歩く場合には、歩行者に注意を促す。また、途中で通行人に道を尋ねたり、路上にある障害物を取り除いたりすることなども考えられる。そのため、周囲にいる人に質問したり、依頼したりするコミュニケーションについても指導する。</p> <p>(★「4環境の把握」「6コミュニケーション」)</p> <p>車椅子の操作に慣れるとともに、目的地まで車椅子を操作し続けるための体力を付けさせる。それに加えて、目的地までの距離や段差の状況などを調べ、自分の車椅子を操作する力を考慮して一人で行くかどうかを判断し、一人で行くことが難しい場合には、援助者を探して依頼することが必要となる。また、途中で通行人に道を尋ねたり、路上にある障害物を取り除いたりすることなども考えられる。そのため、周囲にいる人に質問したり、依頼したりするコミュニケーションについても指導する。</p> <p>(★「4環境の把握」「6コミュニケーション」)</p>

6 コミュニケーション	② 言語の受容と表出に関すること	□話し言葉や各種の文字・記号等を用いた言語の受容・表出	脳性まひで、言語障がいを伴い、意思の表出が難しい。内言語や言葉の理解には困難がないが、話し言葉が不明瞭であったり短い短い言葉を伝えるのに相応な時間が掛かったりする。	発語機能の改善を図るとともに、文字の使用や補助的手段の活用を検討して意思の表出を促す。
コミュニケーション	④ コミュニケーション手段の選択と活用に関すること	□話し言葉や各種の文字・記号、機器等のコミュニケーション手段の適切な選択・活用 □円滑なコミュニケーション	音声言語による表出が難しく、上肢の運動・動作にも困難が見られる。	下肢や舌、顎の先端等でボタンを押すと音声が出る機器やコンピュータ等を操作できるように工夫する。
コミュニケーション			上肢操作の制限から、文字を書いたりキーボードで入力したりすることが難しい。	画面を一定時間見るために頭部を保持しながら、文字盤の中から自分が伝えたい文字を見ることができ、他人の力でできるコンピュータ等の情報機器を活用し、他者に伝える成功体験の積み重ねを行う。



障がい種別「言語障がい」

区分	項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
1 健康の保持	(2) 病気の状態の理解と生活管理に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>病気の状態の理解と改善</li> <li>病気の進行の防止に必要な生活様式の理解</li> <li>生活の自己管理</li> </ul>	<p>口 歯裂の既往歴があり、滲出性中耳炎やむし歯などになりやすい。</p>	<p>日頃から聞こえの状態に留意したり、丁寧な歯磨きの習慣形成に努めたりするなどして、病気の予防や健康管理を自らできるようにする。</p>
	(4) 障がいの特性の理解と生活環境の調整に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己の障がい特性の理解及び学習上又は生活上の困難さの理解</li> <li>状況に応じた、自己の行動や感情の調整及び他者に対する主体的な働き掛けによる、学習や生活をしやすい環境づくり</li> </ul>	<p>吃音に関する知識を得る機会がなく、吃音状態が生じることへの不安感や恐怖感を持ち、内面の葛藤を一人で抱えている。</p>	<p>安心した場の中で、吃音について学び、吃音についてより客観的に捉えられるようにする。また、発達の段階や吃音状態の悪化等に応じて、周囲の人へ「どうしてほしいのか」等を伝える方法を話し合う。</p>
2 心理的な安定	(1) 情緒の安定に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>情緒の安定</li> </ul>	<p>不安や緊張が高まった状態になると、チックの症状により、身体が動いてしまったり、言葉を発してしまったりする。</p>	<p>不安や緊張が高まる原因を知り、自ら不安や緊張を和らげるようにする方法を身に付ける指導をする。</p>
	(2) 状況の理解と変化への対応に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>場所や場面の状況の理解と心理的抵抗の軽減</li> <li>状況の変化に対する状況の理解と適切な対応方法の習得</li> </ul>	<p>選択性かん黙があり、特定の場所や状況等において緊張が高まることなどにより、家庭などではほとんど支障なく会話ができるものの、特定の場所や状況では会話ができない。</p>	<p>本人は話したくても話せない状態であることを理解し、本人が安心して参加できる集団構成や活動内容等の工夫をしたり、対話的な学習を進める際には、選択時の提示や筆談など様々な学習方法を認めたうえで、情緒の安定を図りながら、他者とのやりとりができる場面を増やしていく。</p>
	(3) 障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>障がいの状態の理解と受容</li> <li>主体的に学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲の向上</li> </ul>	<p>吃音があり、学校生活等においてできるだけ言葉少なくすまそうとうするなどの消極的になる。</p>	<p>教師との安心できる関係の中で、楽しく話す体験を多く持つこと、様々な話し方や読み方を体験したり、自分の得意なことなどに気がかかせて自信を持たせたりすること等を通して、吃音を自分なりに受け止めて積極的に学習等に取り組むようにする。その際、好きなことや得意なことを話題にして自ら話せるようにするとともに、達成感や成功感を味わえるようにする。 (★「1」健康の保持 「3」人間関係の形成 「6」コミュニケーション)</p>
6 コミュニケーション	(1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>表情や身振り、意思のやりとり</li> <li>各種の機器を用いた</li> </ul>	<p>言語発達に遅れがあり、語彙が少ないため自分の考えや気持ちの確に言葉にできないことや相手の真意に的確に答えられない。</p>	<p>興味・関心に応じた教材を活用し、語彙を増やしたり、言葉のやりとりを楽しむ。</p>
	(2) 言語の受容と表出に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>話し言葉や各種の文字・記号等を用いた言語の受容・表出</li> </ul>	<p>構音運動を調整する力が高めたり、音韻意識を育て、音の弁別や自分の発音をフィードバックできるようにしたりして、正しい発音を定着させる。</p>	<p>構音運動を調整する力が高めたり、音韻意識を育て、音の弁別や自分の発音をフィードバックできるようにしたりして、正しい発音を定着させる。</p>
	(3) 言語の形成と活用に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>事象や現象、自己の行動等に対応した言語の概念の形成</li> <li>体系的な言語の習得</li> </ul>	<p>言語発達に遅れがあり、コミュニケーションを円滑に行うことが難しい。</p>	<p>教師との安心できる場で言葉遊びを行ったり、作業や体験的な活動を取り入れたりする。また、語彙の習得や上位概念、属性、関連語等の言語概念の形成には、生活経験を通じて、様々な事象や物事を関連付けながら言語化を行う。そのために、課題の設定を工夫して「できた」という経験を重ね自信を持たせ、コミュニケーションを引き出していく。 (★「2」心理的な安定 「3」人間関係の形成)</p>
	(4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>話し言葉や各種の文字・記号、機器等のコミュニケーション手段の適切な選択、活用</li> <li>円滑なコミュニケーション</li> </ul>	<p>音声言語の表出は困難であるが、文字言語の理解ができる。</p>	<p>筆談で相手に自分の意思を伝えたり、文字板、ボタンを押すと音声が出る機器、コンピュータ等を使って、自分の意思を表出したりすることができると指導する。</p>
	(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>場や状況に応じた、主体的なコミュニケーションの展開</li> </ul>	<p>家庭などの生活の場では普通の会話ができるものの、学校の友達とは話すことができないなど選択性かん黙がある。</p>	<p>気持ちよく安定し、安心できる状況づくりや信頼できる人間関係づくりが重要であり、その上で、興味・関心のある事柄について、共感しながら一緒に活動したり、日記や作文などを通して気持ちや意思を交換する機会を多くする。また、話すこととにこだわらず状況に応じて、筆談など話し言葉以外のコミュニケーション手段を活用する。その際、自信が持てるように肯定的なイメージを保つことができると指導を行う。 (★「1」「2」心理的な安定 「3」人間関係の形成)</p>



障がい種別「自閉症」

区分	項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
1 健康の保持	(1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること	<input type="checkbox"/> 体温の調節 <input type="checkbox"/> 健康状態（覚醒と睡眠など）の維持・改善に必要な生活のリズムの獲得 <input type="checkbox"/> 食事や排泄などの生活習慣の形成 <input type="checkbox"/> 衣服の調節や換気 <input type="checkbox"/> 室温の調節 <input type="checkbox"/> 感染予防のための清潔な環境の形成	特定の食物や衣服に強いこだわりを示す場合があり、極端な偏食になったり、季節の変化にかかわらず同じ衣服を着続けたりする。 相手からどのようなように見られているのかを推測することが苦手なため、整髪や着衣の乱れなど身だしなみを整えることに関心が向かない。	困難の要因を明らかにした上で、無理のない程度の課題から取り組む。清潔や衛生を保つことの必要性を理解できるようにし、家庭等との密接な連携の下に不衛生にならないように日常的に心掛けられるようにする。
	(4) 障がいの特性の理解及び学習上又は生活上の困難さの理解 状況に応じた、自己の行動や感情の調節及び他者に対する主体的な働き掛けによる、学習や生活をしやすい環境づくり	<input type="checkbox"/> 自己の障がい特性の理解及び学習上又は生活上の困難さの理解 <input type="checkbox"/> 状況に応じた、自己の行動や感情の調節及び他者に対する主体的な働き掛けによる、学習や生活をしやすい環境づくり	自分の体調がよくない、悪くなりつつある、疲れているなどの変調が分からず無理をしようとしてしまうことがある。その結果、体調を崩したり、回復に非常に時間が掛かったりする。	規則正しい生活をすることの大切さを理解したり、温度に適した衣服の調節をすることや、適切な指針を身に付けること、客観的な指針となる体温を測ることを習慣化し、適切な指針を保護者や教師と相談できるように指導すること、また、自己管理するときに健康に関する習慣については、自己を客観視するため、例えば、毎朝その日の体調を記述したり、起床・就寝時刻などを記録したりして、スケジュール管理をすること、自らの体内の感覚に注目することなどの指導がある。 (★「13.人間関係の形成」「4.環境の把握」「6.コミュニケーション」)
	(5) 健康状態の維持、改善に関すること	<input type="checkbox"/> 運動量の減少及び体力低下の防止 <input type="checkbox"/> 日常生活における適切な健康の自己管理 <input type="checkbox"/> 情緒の安定	感覚の過敏さやこだわりがあり、大きな音がしたり、予定通りに物事が進まなかったりすると、情緒が不安定になる。 運動量が少ないことにより、肥満さみであったり体力低下を招いたりする。また、心理的な要因により不登校の状態が続き、運動量が極端に少なくなったり、食欲不振の状態になったりする。	自分から別の場所に移動したり、音量の調整や予定を説明してもらったことを他者に体験したりするなどの、自ら刺激の調整を行い、気持ちを落ち着かせることができるようにする。
2 心理的な安定	(1) 情緒の安定に関すること	<input type="checkbox"/> 情緒の安定	心理的に緊張したり不安になったりする状態が継続し、集団に参加することが難しい。 他者に自分の気持ちや適切な方法で伝えることが難しいため、自傷行為や、他者に対して不適切な関わり方をしてしまう。	環境的な要因（睡眠、生活のリズム、体調、天気、家庭生活、人間関係など）を明らかにし、情緒の安定を図る指導をすることともに、必要に応じて環境の改善を図る。
	(2) 状況の理解と変化への対応に関すること	<input type="checkbox"/> 場所や場面の状況の理解と心理的抵抗の軽減 <input type="checkbox"/> 変化する状況の理解と適切な対応方法の習得	場所や場面が変化することにより、心理的に圧迫を受けて適切な行動ができない。 日々の日課と異なる学校行事や、急な予定の変更などに対応することができず、混乱したり、不安になったりして、どのような行動したらよいか分からない。	体力低下を防ぐために、運動することへの意欲を高めながら適度な運動を取り入れたり、食生活と健康について実際の生活に即して学習したりするなど、日常生活において自己の健康管理ができるようになる。
3 人間関係の形成	(1) 他者とのかわりへの基礎に関すること	<input type="checkbox"/> 人に対する基本的な信頼感の形成 <input type="checkbox"/> 他者からの働きかけを受け止め、応ずること	特定の動作や行動に固執したり、同じ話を繰り返したりするなど、次の活動や場面を切り替えることが難しい。	自分にとって快適な刺激を得ていたり、不安な気持ちや和らげるために自分を落ち着かせようとして行動していたりしていることが要因として考えられるため、特定の動作や行動等を無理にやめさせたりするのはなく、本人が納得して次の活動に移ることができるよう段階的に指導する。その際、時間帯や回数あらかじめ決めたり、自分で予定表を書いて確かめたりして、早通しを持って取り組むように指導する。 (★「13.人間関係の形成」「4.環境の把握」)
	(2) 他者の意図や感情の理解に関すること	<input type="checkbox"/> 他者の意図や感情の理解 <input type="checkbox"/> 場に応じた適切な行動の形成	他者との関わりを持とうとするが、その方法が十分身に付いていない。 言葉や表情、身振りなどを総合的に判断して相手の思いや感情を読み取り、それに応じた適切な行動が難しい。 言葉を言葉通りに受け止めてしまい、相手の真意を読み取れない。	指導担当を決め、安定した関係を形成する。やりとりの方法を大きく変えず繰り返して指導し、相互に関わり合う案地を作ったあと、やりとりの方法を増やす。言葉だけでなく、具体物や視覚的な情報を加える。



6 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン	<p>(4) コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 手 段 の 選 択 と 活 用 に 関 連 す る 事 項</p> <p><input type="checkbox"/> 話し言葉や各種の文字・記号、機器等のコミュニケーション手段の適切な選択・活用</p> <p><input type="checkbox"/> 円滑なコミュニケーション</p>	<p>言葉でのコミュニケーションが難しい。</p> <p>順を追って説明することが困難であるため、聞き手に分かりやすい表現をすることができない。</p> <p>会話の内容や周囲の状況を読みとることが難しいため、状況にそぐわない受け答えをする。</p> <p>援助を求めたり依頼したりするだけでなく、必要なことを伝えたり、相談したりすることが難しい。</p>	<p>自分の意思を適切に表し、相手に基本的な要求を伝えられるように身振りなどを用いて知らせたり、話し言葉を補うために絵カードやメモ、タブレット端末等の機器等を活用できるようにしたりする。</p> <p>簡単な絵に吹き出しや簡単なせりふを書き加えたり、コミュニケーションボード上から伝えたい項目を選択したりするなどの手段を練習しておき、必要に応じてそれらの方法の中から適切な物を選ぶことができるように指導する。</p> <p>相手の立場に合わせた言葉遣いや場に応じた声の大きさなど、場面にふさわしい表現方法を身に付けさせる。なお、その際には、実際の生活場面で、状況に応じたコミュニケーションを学ぶことができるよう指導を行う。</p> <p>日常的に報告の場面を作ることや相手に伝えるための話し方を学習させ、ホワイトボードなどを使用して気持ちや考えを書きながら整理していく。そして自分の気持ちを言葉で表現する経験を重ね、相談することの良さが実感できるように指導していく。 (★「1・2心理的な安定」「3人間関係の形成」)</p>
---------------------	--	--	--



障がい種別「LDJ」

区分	項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
1 健康の保	(4) 障がいの特性の理解及び学習上又は生活上の困難さの理解や感情の調整及び他者に対する主体的な働き掛けによる、学習や生活をしやすい環境づくり	<input type="checkbox"/> 自己の障がいの特性の理解及び学習上又は生活上の困難さの理解や感情の調整及び他者に対する主体的な働き掛けによる、学習や生活をしやすい環境づくり <input type="checkbox"/> 情緒の安定	学習や対人関係がうまくいかないことを感じている一方で、自分の長所や短所、得手不得手を客観的に認識することが難しかったり、他者との違いから自分を否定的に捉えていたりする。  生活全般において自信を失っているため、自分の思う結果が得られず感情的になり、情緒が不安定になる。	個別指導や小集団などの指導形態を工夫しながら、対人関係に関する技能を習得するなかで、自分の特性に気づき、自分を認め、生活する上で必要な支援を求められるようになる。  本人が得意なことを生かして課題をやり遂げるように指導し、成功したことを褒めることで自信を持たせたり、自分の良さに気づくことができるようにしたりする。
2 心理的な安定	(1) 情緒の安定に関すること (3) 障がいの状態の理解と受容する学習上又は生活上の困難さを改善・克服する意欲に関すること	<input type="checkbox"/> 障がいの状態の理解と受容 <input type="checkbox"/> 主体的に学習上又は生活上の困難さを改善・克服しようとする意欲の向上	数字の概念や規則性の理解や、計算することに時間が掛かったり、文章題の理解や推論することが難しかったりすることで、自分の思う結果が得られず、学習への意欲や関心が低い。  文章を読んで学習する時間が増えるにつれ、理解が難しくなり、学習に対する意欲を失い、やがては生活全体に対しても消極的になってしまふ。	自己の特性に応じた方法で学習に取り組み、周囲の励ましや期待、賞賛を受けながら、何が必要かを理解し、「できた」という成功体験の積み重ねを行う。  振り仮名を振る、拡大コピーをすることで自分が読みやすくなることを知ることや、コンピュータによる読み上げや電子書籍を利用するなどの代替手段を使うこと等により、読む取りやすくなることを学習する。また書くことの困難さを改善、克服するためには、口述筆記のアプリやワープロを使い、自分に合った方法で学習するまで練習する。またフリック入力などが使用できることにより、自分で入力して練習することや、意欲的に活動することできるようにする。また、こうした代替手段等の使用についても、意欲を高めるように指導する。また、意欲を高めるように指導する。また、意欲を高めるように指導する。また、意欲を高めるように指導する。
3 人間関係の形成	(3) 自己の理解と行動の調整に関すること (4) 集団への参加の基礎に関すること	<input type="checkbox"/> 自己の得意なことや不得意なこととの理解 <input type="checkbox"/> 自己の行動の特徴の理解 <input type="checkbox"/> 集団の中の状況に応じた行動の形成 <input type="checkbox"/> 集団の雰囲気に合わせて行動すること <input type="checkbox"/> 集団に参加するための手順やきまりの理解 <input type="checkbox"/> 遊びや集団活動への積極的な参加	自己に肯定的な感情を持つことができず、活動が消極的になったり、自暴自棄になったりする。  言葉の意味理解の不足や関連のないから、友達との会話の背景や経過を類推することが難しく、集団に積極的に参加できない。	早期から成就感を味わわせるような活動を設定するとともに、自己を肯定的に捉えられるように指導する。  日常的によく使われる友達同士の言い回しや分らないときの尋ね方などを、あらかじめ小集団で指導する。
4 環境の把握	(2) 感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること (4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること	<input type="checkbox"/> 自分に入ってくる情報の適切な処理 <input type="checkbox"/> 自己の感覚の過敏さや認知の偏りなどの特性理解と、適切な対応	言葉や数の学習で困難を示し、認知面において不得意なことがある一方で得意な方法を持っている。	一人一人の認知の特性に応じた指導方法を工夫し、不得意なことを少しずつ改善できるように指導するとともに、得意な方法を積極的に活用するよう指導する。
5 動身体	(3) 日常生活に必要な基本動作に関すること	<input type="checkbox"/> 身辺処理動作の習得 <input type="checkbox"/> 書字、描写等の学習のための動作の習得	鉛筆の握り方がきこちな過度に力が入りすぎてしまうこと、筆圧が強すぎて行や枠からはみ出てしまうこと等、手や指先を用いる細かい動きのコントロールが苦手である。さらには、うまく取り組めないことにより、焦りや不安が生じて、筆字に書字が乱れてしまふ。	様々な場面で、見たり触ったりする体験的な活動と「左」や「右」という位置や方向を示す言葉と関連付けながら指導して、基礎的な概念の形成を図る。  本人の使いやすい形や重さの筆記用具や滑り止め付き定規等を用いることにより、安心して取り組めるようにして指導する。また、自分の苦手な部分を出て、コンピュータによってキーボード入力等で記録することや黒板を写真に撮ること等、ICT機器を用いて書字の代替を行えるように指導する。 (★「2.心理的な安定」「4.環境の把握」)

6 コミュニケーション	<p>(3) 言語の形成と活用に関すること</p>	<p>□ 事象や現象、自己の行動等に対応した言語の概念の形成 □ 体系的な言語の習得</p>	<p>語彙が少ないため自分の考えや気持ちの的確に言葉にできないことや相手の質問に的確に答えられない。</p> <p>言葉は知っているものの、その意味を十分に理解せずに活用したり、意味を十分に理解できていないことから活用できなかつたりするため、思いや考えを正確に伝える語彙が少ない。</p>	<p>興味・関心に応じた教材を活用し、語彙を増やしたり、言葉のやりとりを楽しんだりさせる。</p>
<p>(4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること</p>	<p>□ 話し言葉や各種の文字・記号、機器等のコミュニケーション手段の適切な選択・活用 □ 円滑なコミュニケーション</p>	<p>読み書きの困難により、文章の理解や表現に非常に時間が掛かる。</p>	<p>コンピュータの読み上げ機能を利用したり、関係性と項目を図やシンボルなどで示すマインドマップのような表現を利用したりすることで、コミュニケーションすることに楽しさと充実感を味わえるようにしていく。</p>	
<p>(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること</p>	<p>□ 場や状況に応じた、主体的なコミュニケーションの展開</p>	<p>話の内容を記憶して前後関係を比較したり類推したりすることが困難なため、会話の内容や状況に応じた受け答えをすることができない。</p>	<p>自分で内容をまとめながら聞く能力を高めるときに聞き返す方法や相手の表情にも注目する態度を身に付けるなどして、そのときの状況に応じたコミュニケーションができるようにする。</p>	

障がい種別「ADHD」

区分	項目	項目の内容	状態例	具体的指導内容例と留意点
1	健康の保持	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活のリズムや生活習慣の形成に関する項目</li> <li>体温の調節</li> <li>健康状態（覚醒と睡眠など）の維持・改善に必要な生活のリズムの獲得</li> <li>食事や排泄などの生活習慣の形成</li> <li>衣服の調節</li> <li>室温の調節</li> <li>感染予防のための清潔な環境の形成</li> <li>自己の障がい特性の理解及び学習上又は生活上の困難さの理解や感情の状況に応じた、自己の行動や感情の調整及び他者に対する主体的な動き掛けによる、学習や生活をしやすい環境づくり</li> </ul>	<p>周囲のことに気が散りやすいことから一つの行動に時間が掛かり、整理・整頓などの習慣が十分身に付いていない。</p> <p>学習や対人関係がうまくいかないことを感じている一方で、自分の長所や短所、得手不得手を客観的に認識することが難しくかったり、他者との違いから自分を否定的に捉えていたりする。</p>	<p>困難の要因を明らかにした上で、無理のない程度の課題から取り組む。生活のリズムや生活習慣の形成は、日課に即した日常生活の中で指導をする。</p> <p>個別指導や小集団などの指導形態を工夫しながら、対人関係に関する技能を習得するなかで、自分の特性に気づき、自分を認め、生活する上で必要な支援を求められるようにする。</p>
2	安心定定的な人間関係の形成	<ul style="list-style-type: none"> <li>情緒の安定に関する項目</li> <li>自分の得意なことや不得意なこととの理解</li> <li>自分の行動の特徴の理解</li> <li>集団の中の状況に応じた行動の形成</li> <li>集団の雰囲気に合わせて参加すること</li> <li>集団に参加するための手順やきまりの理解</li> <li>遊びや集団活動への積極的な参加</li> </ul>	<p>自分の行動を注意されたときに、反発して興奮しやすい。</p> <p>注意や集中を持続し、安定して学習に取り組むことが難しい。</p> <p>同じ失敗を繰り返したり、目的に沿って行動を調整することが苦手だったりする。</p>	<p>自分を落ち着かせることができる場所に移動してその興奮を静めることや、一旦その場を離れて深呼吸するなどの方法があることを教え、それらを実際に行うことができるように指導する。</p> <p>刺激を統制した落ち着いた環境で、必要なことに意識を向ける経験を重ねながら、自分に合った集中の仕方や課題への取り組み方を身に付け、学習に落ち着いて参加する態度を育てていく。</p>
3	環境の把握	<ul style="list-style-type: none"> <li>感覚や認知の特性についての理解と対応に関する項目</li> <li>認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関する項目</li> </ul>	<p>注意機能の特性により、注目すべき箇所が分からず、学習等に支障をきたす。短い、注目する対象が変動しやすいなどから、学習等に支障をきたす。</p> <p>活動に過度に集中してしまい、終了時刻になっても活動を終えることができない。</p>	<p>因果関係を図示して理解させたり、実現可能な目当ての立て方や振り返りの仕方を学んだりして、自ら適切な行動を選択し調整する力を育てていく。</p> <p>ルールを少しずつ段階的に理解できるように指導したり、ロールプレイによって適切な行動を具体的に指導したりする。また、遊びへの参加方法が分からないときの不安を軽減する方法や友達への声かけの練習をする。 ★「2心理的な安定」「6コミュニケーション」</p>
4	身体動き	<ul style="list-style-type: none"> <li>姿勢や運動・動作の基本的な動作に関する項目</li> <li>巧緻性や持続性の向上に関する項目</li> </ul>	<p>活動の流れや時間を感覚的に捉えられるようなスケジュールや時計などを示し、時間によって活動時間が区切られていることを理解できるようにしたり、残り時間を確認しながら活動の一覧表に優先順位をつけたりするなどして、適切に段取りを整えられるようにする。</p>	<p>注目すべき箇所を色分けしたり、手で触れるなど他の感覚も使ったりすることで注目しやすくしながら、注意を持続させることができることを実感し、自分に合った注意集中の方法を積極的に使用できるようにする。</p> <p>身体を動かすことに関する指導だけでなく、姿勢を整えやすいような机や椅子を使用することや、姿勢保持のチェックポイントを自分で確認できるような指導を行う。 ★「2心理的な安定」「4環境の把握」</p>
5	生活習慣の形成	<ul style="list-style-type: none"> <li>日常生活に必要な動作の習得</li> <li>作業に必要な基本動作の習得</li> <li>巧緻性や持続性の向上</li> <li>作業を円滑に遂行する能力の向上</li> </ul>	<p>目と手の協応動作や指先の細かい動き、体を思った通りに動かし、動かすことが上手くないことから、身の回りの片付けや整理整頓等を最後まで遂行することが苦手である。</p>	<p>身体を動かすことに関する指導だけでなく、姿勢を整えやすいような机や椅子を使用することや、姿勢保持のチェックポイントを自分で確認できるような指導を行う。 ★「2心理的な安定」「4環境の把握」</p>

5 動身 き体 の	⑤ 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること	<input type="checkbox"/> 作業に必要な基本動作の習得 <input type="checkbox"/> 巧緻性や持続性の向上 <input type="checkbox"/> 作業を円滑に遂行する能力の向上	<p>手足を協調させて動かすことや微細な運動をすることに難しさがある。</p>	<p>目的に即して意図的に身体を動かすことを指導したり、手足の簡単な動きから始めて、段階的に高度な動きを指導したりする。手指の巧緻性を高めるためには、興味や関心を持つていくことを生かしながら、道具等を使って手指を動かす体験の積み重ねを行う。</p>
6 ンケ ーミ シヨ ニ	② 言語の受容と表出に関すること	<input type="checkbox"/> 話し言葉や各種の文字・記号等を用いた言語の受容・表出	<p>思ったことをそのまま口にして、相手を不快にさせるような表現を繰り返すことがある。</p>	<p>教師との個別的な場面や安心できる小集団の活動の中で、相手の話を受けてやりとりをする経験を重ねられるようにしたり、ゲームなどを通して適切な言葉を繰り返し使用できるようにしたりして、楽しみながらコミュニケーション力を高めること、人と会話するときにのルルやマナーを明確にして理解させること、会話中に相手の表情を気にすることなどを指導する。          (★「12 心理的な安定」「13 人間関係の形成」「14 環境の把握」)</p>

## 自立活動の指導上の留意点(指導内容の設定)

### ア 主体的に取り組む指導内容

子どもが興味を持って主体的に取り組む、成就感を味わうとともに、自己を肯定的に捉えることができるような指導内容を取り上げる。

＜主体的に取り組む、成就感を味わうために・・・＞

子どもにとって、解決可能で、取り組みやすい内容にする。

子どもが興味・関心を持って取り組めるようにする。

子どもが目標を自覚し、意欲的に取り組んだことが成功に結び付いたということを実感できるようにする。

＜自己を肯定的に捉えるために・・・＞

子どもが自己に対してどのような感情を抱いているのかを把握し、成長に即して自己を捉える感情を高められるようにする。

### イ 改善・克服の意欲を喚起する指導内容

子どもが、障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲を高めることができる指導内容を重点的に取り上げる。

障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲を喚起できるようにする。

### ウ 発達の進んでいる側面を更に伸ばすような指導内容

子どもが、発達の遅れている側面を補うために、発達の進んでいる側面を更に伸ばすような指導内容を取り上げる。

子どもの発達の進んでいる側面にも着目する。

子どもが自信を持って意欲的に取り組む態度を育成するとともに、少し努力すれば達成できるような目標や内容の設定を行うなど、改善・克服のための取組を行う。

### エ 自ら環境を整える指導内容

子どもが、活動しやすいように自ら環境を整えたり、必要に応じて周囲の人に支援を求めたりすることができるような指導内容を計画的に取り上げる。

＜自らが環境を整える＞

子ども自ら環境に働き掛ける力を育む。

＜必要に応じて周囲の人に支援を求める＞

自分だけで活動しやすい環境が作れない場合は、周囲の人に依頼して環境を整えることができるようにする。

### オ 自己選択・自己決定を促す指導内容

子どもに対し、自己選択・自己決定する機会を設けることによって、思考・判断・表現する力を高めることができるような指導内容を取り上げる。

子どもが目標を自覚し、改善・克服するための方法等について、自ら選んだり、物事を決定して実行したりするようにする。

### カ 自立活動を学ぶことの意義について考えさせるような指導内容

子どもが、自立活動における学習の意味を将来の自立や社会参加に必要な資質・能力との関係において理解し、取り組めるような指導内容を取り上げる。

自立活動での学習が、将来の自立や社会参加にどのように結び付いていくのか、子どもが自らその関係を理解して学習に取り組めるようにする。

## キーワードを詳しく解説！！

### ◎ 自己を肯定的に捉える

障がいのある子どもは、ときには、自分をひどく他者から劣っていると思うことがあります。「自己を肯定的に捉える」感情は、自分にも良いところがあると認める感情であり、自己肯定感や自己有能感と言われることもあります。学校の教育活動全体を通して行われますが、自立活動の指導においては特に重視されなければなりません。

#### 【指導におけるポイント】

- ・できるようになったことやその過程での変化を称賛し、自分の存在を認められ、受け入れられているという安心感を得られるようにします。
- ・自分について振り返る機会を適宜設定し、頑張っている自分を確認したり、過去と比較して成長していることが実感できるようにします。
- ・自己を客観的に捉えらえるようにすることも大切です。発達の段階に応じて、他者との比較や何らかの基準によって自己を客観的に捉えらえるように、適切に指導します。

◇同じ障がいのある年長者がモデルとなることもあるので、先輩の話聞く機会を設けることも有効な方法の一つです。

### ◎ 発達の進んでいる側面を伸ばす

#### 【指導のポイント】

一般に発達の遅れた側面やできないことのみに着目しがちだが、苦手なことやつらいことを繰り返し行うことは、効果が現れるのに必要以上の時間を要したり、方法によっては子どもの学習への意欲を低下させ、劣等感を持たせることも考えられます。発達の進んでいる側面を更に促進することによって、子どもが自信を持って学習に取り組む態度を育成するようにします。

これは、発達の遅れている側面や改善の必要な障がいの状態に対して取り組まなくてよいということではありません。改善・克服のための取組も併せて必要です。常にPDCAサイクルを意識しながら、子どもの状況等を評価し、課題を改善していくことは、教師に求められる専門性の一つでもあります。

### ◎ 自ら環境を整える

障がいのある人々を取り巻く社会的状況の変化の中で、障がいの状態を捉える上で環境要因が重視されており、周囲のサポートを得ながら自分らしく生きるという考え方が広がっています。子どもが、困難を改善・克服するために必要な知識・技能等を身に付けるとともに、活動しやすいように環境を整えることが重要です。

#### 【弱視の子どもの例】

読書をする際、適切な明るさを確保するために照明等の準備をしたり、準備ができない場合に他者への依頼の仕方を学んだりします。

#### 【自閉症のある子どもの例】

不快に感じる音や光、雰囲気等を避けるために場所を移動したり、移動することを周囲の人に伝えたりすることを学習します。

### ◎ 自己選択・自己決定を促す

#### 【心臓疾患のある子どもの例】

幼い頃から治療をしても、自分の体調や病気の状況について説明することが難しい子どもがいます。病気の自己管理が大切であり、その上で自らの活動を選択し、人に伝える力が必要です。そのためにも、自分の体調や病気の状況について正しく捉えるとともに、日ごろから体調や病気の状況を記録したり、人に伝えたりするなどの表現方法を身に付けることで、体調のほか病気の状況を自覚し、今の状況で何ができるか、どの程度できるかを的確に判断する力を身に付けられるようにすることが大切です。

### ◎ 自立活動を学ぶことの意義について考える

#### 【「6コミュニケーション(1)コミュニケーションの基礎的能力に関すること」の学習では…】

発声や指差し、身振りやしぐさなどをコミュニケーション手段として適切に活用していくことは、子どもが自立と社会参加を果たす上で様々な人と関わる際に、欠かすことのできない基盤となる力です。このような自立活動を学ぶことの意味に自ら気づき、目的意識を持って、主体的に学習に取り組めるようにしていくことは、子どもの自立活動に対する学習に取り組む力を高め、将来の自立と社会参加を実現する又は果たす上で非常に重要です。

## ◆おわりに

近年、特別支援学級に在籍する児童生徒の多様な障がいの種類や状態等に応じた指導の充実が求められています。自立活動は、障がいのある児童生徒の教育活動全体の基盤となるものです。本ガイドブックを活用していただき、先生方が実践された指導・支援を校内で共有するなど、自立活動の指導力向上を図っていただければ幸いです。

### —参考文献—

- 文部科学省『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編』2018
- 文部科学省『小学校学習指導要領』2018
- 文部科学省『中学校学習指導要領』2018
- 岡山県総合教育センター『自立活動ハンドブック—知的障害のある児童生徒の指導のために—』2015
- 山梨県総合教育センター『自閉症・情緒障害特別支援学級を中心とした自立活動の指導ガイドブック』2014



# 自立活動の指導「手順シート」記入の流れ

実態の見直し  
目標の見直し  
指導内容の見直し

① 実態把握  
P9

子どもを理解するための実態把握(情報収集)をします。  
(障がいの状態、発達や経験の程度、興味・関心、長所やよさ、課題、本人・保護者の願い等)  
◆できることや得意なことにも目を向け、そのときの状況や手立ての内容等も参考にする。  
◆行動観察以外に、本人・保護者からの聞き取り内容や関係機関等からの情報も参考にする。  
◆個別の教育支援計画や個別の指導計画の「引継ぎ事項」等の内容も参考にする。

② 整理  
実態把握の  
P10

情報収集した内容を自立活動の区分に基づいて整理します。  
◆子どもの全体像をとらえるため、自立活動の内容の6区分に即して内容を整理する。  
◆心理的、医学的な立場から情報収集したり、福祉施設等から情報収集したりして、実態を多面的に把握する。

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション

③ 課題の抽出  
P11

指導開始時点で課題となることを抽出します。  
◆子どもの視点に立ちながら、実態の中から「できること」「もう少しでできること」「援助があればできること」「できないこと」などの観点で整理し、課題を明らかにする。

〈書き方1〉  
「②実態把握の整理」から、そのまま記入する(全て記入するのではない)。  
★指導すべきかどうかの視点で考える。

〈書き方2〉  
複数の区分を関連させて記入する。  
★課題同士の関連が明らかな場合は、まとめて記入する。

〈書き方3〉  
伸ばしていくべき点を記入する。  
★できることをさらに高めることで、よりよい生活に繋がるという視点で考える。

④ 中心的な課題  
P12

抽出した課題同士の関連を整理して、中心的な課題を導き出します。  
◆抽出した課題の中に、「原因と結果」のように関連しているものに着目する。  
◆「原因と結果」以外にも、課題同士が相互に関連しているようなものに着目する。  
◆一つの課題の改善が、他の課題の改善にも繋がっていくものに着目する。



⑤ 指導目標の設定  
P13

中心的な課題等を踏まえ、1年間の長期目標と各学期の短期目標を設定します。  
◆長期目標と短期目標とのつながりを持たせる(長期目標を設定した後に、短期目標を考える)。  
◆目標は子ども目線で記入し、子どもが聞いて何をやるのかが分かるような文章表記を心掛ける。

長期目標(1年間)	
短期目標	1学期
	2学期
	3学期

「何をやるかが具体的に書いてある」文章表記が大切です。  
「どの場面で、何をどのくらい(回数や時間等)するのか」が書かれてあると、目標がより具体的になり評価もしやすくなります。



⑥ 選定  
指導内容の  
P14

指導内容に関連する自立活動の区分や項目を選び出します。  
◆子どもの得意な認知処理等を支援に取り入れると指導の効果が高まるので、できている面にも着目する。  
◆実際の指導を行う際に必要な項目を関連付けるので、空欄となる区分があっても構わない。

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
	(2) 状況の理解と変化への対応に関すること	(1) 他者とのかわりの基礎に関すること	(5) 認知や行動の手がかりとなる概念の形成に関すること		(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること

⑦ 指導内容の設定  
P15, 16

選定した区分や項目を組み合わせながら、具体的な指導内容を考えます。  
◆いつ、どこで(どの場面で)、どのような支援をするのかを具体的に記入する。  
◆目標を達成するために必要な指導内容を段階的に取り上げるようにする。  
◆「特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編」に明記されている以下の6つの点に考慮する。

㉗主体的に取り組む指導内容      ㉘改善・克服の意欲を喚起する指導内容  
 ㉙発達の進んでいる側面を更に伸ばすような指導内容      ㉚自ら環境を整える指導内容  
 ㉛自己選択・自己決定を促す指導内容      ㉜自立活動を学ぶことの意義について考えさせるような指導内容

⑧ 評価  
P17, 18

子どもの評価だけでなく、指導内容や支援の手立てについても評価を行います。  
◆誰が見ても分かる客観的な記録(どの場面で、どの支援で、どうなったか等)に基づいて評価を行う。  
◆「指導内容は実態に合っていたか、支援の手立ては適切だったか」等の観点で、指導者側の評価も行う。  
◆評価を基にして、次年度(来学期)に向けた実態把握や目標、指導内容等の見直し、修正等を行う。